

古市遺跡群 XXXII

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 67

2011

羽曳野市教育委員会

古市遺跡群 XXXII

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 67

2011

羽曳野市教育委員会

序

大阪府の東南部に位置する羽曳野市は、金剛、葛城の山並みを仰ぎ、石川がゆるやかに流れる、水と緑に恵まれた自然豊かなところ。このような自然環境は太古の昔から人々の暮らしや文化を育み、数多くの歴史的遺産として今日に受け継がれています。本市ではこれらの豊かな自然や歴史的遺産を活かし、「人・時をつなぐ・安心・健康・躍動都市 はびきの」を市の将来像と定め、まちづくりを進めています。

本冊は国庫補助事業として実施した市内に所在する埋蔵文化財の発掘調査の成果を報告するもので、平成20年度に新規発見された城不動坂古墳の周濠の調査を行い、前方後円墳であることがわかりました。また郡戸東遺跡では、鎌倉時代の集落跡を検出し、市内では珍しい縄文土器が出土した新規発見の古市鳥飼遺跡などの調査成果を収めました。

調査の実施にあたり、土地所有者をはじめとする関係者の方々、関係各機関のご協力を賜りましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

羽曳野市教育委員会

教育長 藤田 博誠

目 次

序

例言

羽曳野市埋蔵文化財分布図

調査位置および調査概要一覧	1
古市鳥飼遺跡	8
島泉東遺跡	42
郡戸東遺跡	46
高屋城跡・城不動坂古墳	52
塚穴古墳	71
報告書抄録	
写真図版	

例 言

1. 本書は平成22年度に羽曳野市教育委員会が国庫補助事業として計画、実施した羽曳野市内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は本市教育委員会生涯学習室社会教育課世界遺産登録準備室職員を担当者として、平成22年4月1日に着手し、平成23年3月31日をもって終了した。ただし、本書は作成の都合により平成21年10月1日から平成22年9月30日までの間に実施した調査について収録した。古市鳥飼遺跡は河内一浩、島泉北遺跡、高屋城跡・城不動坂古墳10-01、10-02、郡戸東遺跡は井原稔、高屋城跡・城不動坂古墳09-09は高野学、塚穴古墳は武村英治が調査を担当した。
3. 発掘調査等において、ご指導、ご協力を頂いた方々や関係機関は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。(敬称略、順不同)。
文化庁、宮内庁書陵部古市陵墓監区事務所、大阪府教育委員会、土地所有者、工事主体者および関係者
4. 本書で使用する調査位置図等に使用する地図は、地形、工作物等の概略を示すもので、土地境界、建物位置などを厳密に示すものではない。
5. 遺構写真の一部と出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房による。
6. 本書作成には社会教育課世界遺産登録準備室職員があたり、編集を井原 稔が行った。

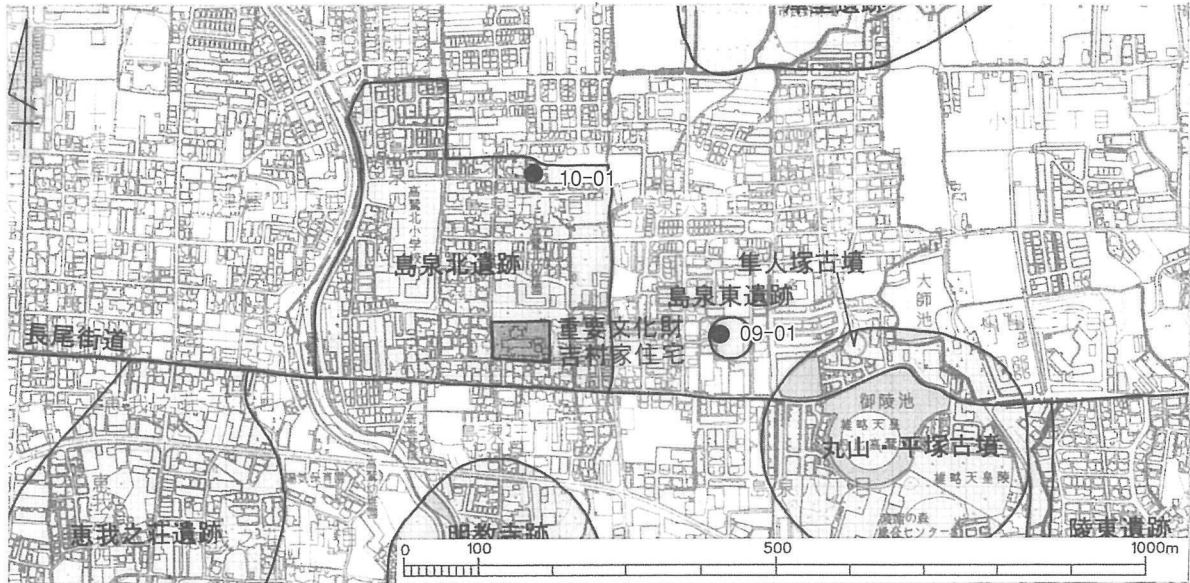


図1 調査箇所位置図1（島泉東遺跡・島泉北遺跡）

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積 (m ²)	調査成果
島泉東遺跡	09-01	H22.1.6	H22.1.9	島泉6丁目13-11	個人住宅	14.0	別途掲載
島泉北遺跡	10-01	H22.6.7	H22.6.7	島泉5丁目199-3の一部	個人住宅	6.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削を行う。第1調査区は現地表面から30cm掘り下げるが、すべて盛土であった。第2調査区は現地表面から80cm掘り下げる。層序は、盛土(35cm)、耕土(10cm)、床土(5cm)、黄灰色粘質土(10cm)、灰褐色粘質土(10cm)、灰黄色粘質土(10cm)となる。遺構・遺物は確認できなかった。



図2 調査箇所位置図2（郡戸遺跡・郡戸東遺跡）

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積 (m ²)	調査成果
郡戸遺跡	09-01	H22.3.15	H22.3.15	郡戸235-4、-5	個人住宅	6.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削後、確認を行う。第1調査区は全て盛土。第2調査区は盛土の下層は耕土、地山と続く。遺構・遺物は確認できなかった。
郡戸東遺跡	10-01	H22.4.26	H22.4.30	郡戸401-8	個人住宅	50.0	別途掲載
郡戸東遺跡	10-03	H22.6.21	H22.6.21	郡戸376-8	個人住宅	10.0	申請地内の擁壁部分に沿って掘削を行う。現地表面から40cm下層で2ヶ所遺構を検出した。一方には遺物も少量出土した。建物基礎は盛土内におさまるため支障なし。

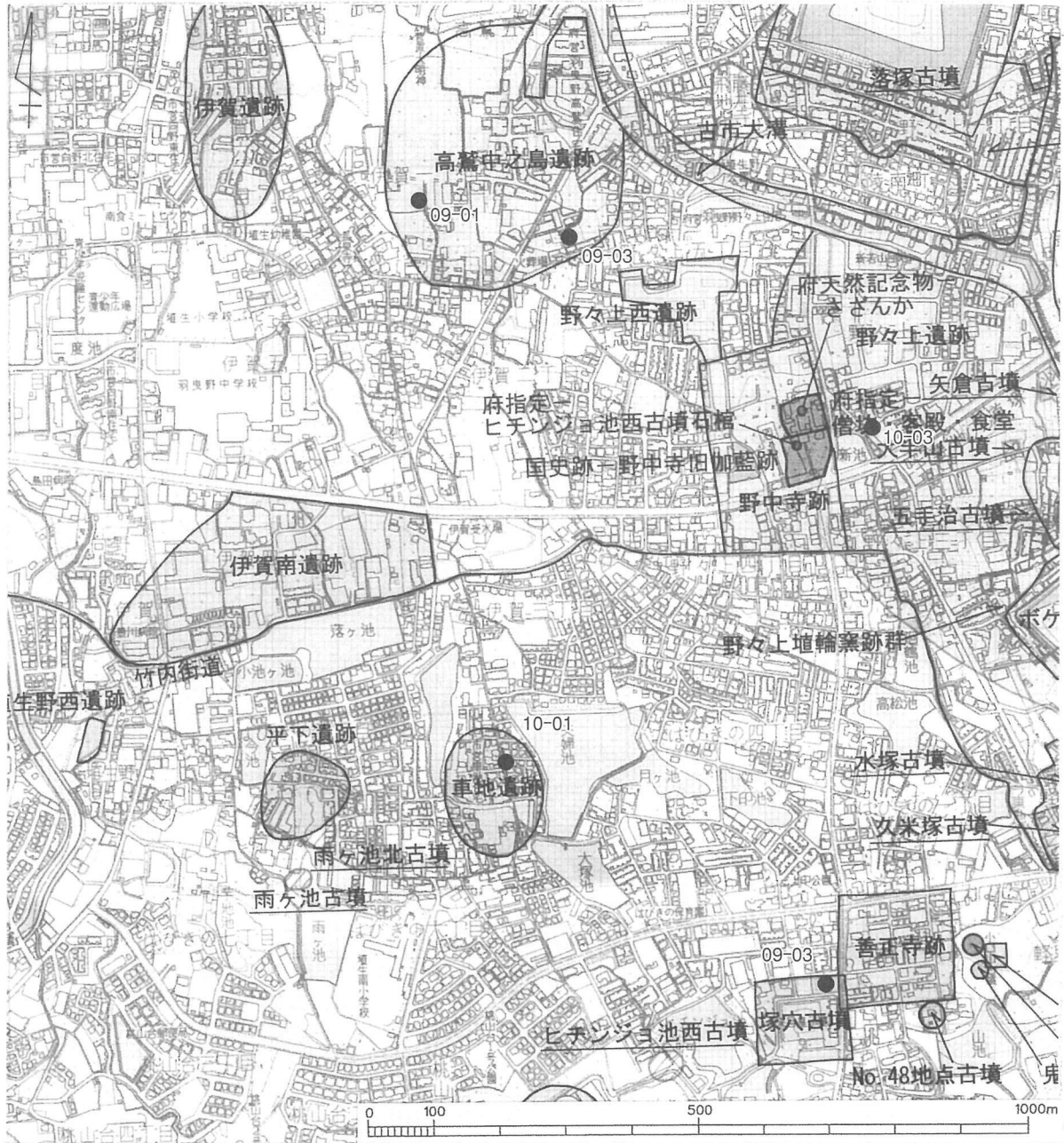


図3 調査箇所位置図3 (車地遺跡・高鷲中之島遺跡・野々上遺跡・塚穴古墳)

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積 (㎡)	調査成果
車地遺跡	10-01	H22.5.11	H22.5.11	伊賀3丁目649-20	個人住宅	6.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し重機掘削を行う。両調査区とも盛土、オリーブ色粘質土、地山となる。すでに地山面が削平されており、遺構・遺物は確認できなかった。
高鷲中之島遺跡	09-01	H21.11.24	H21.11.24	伊賀1丁目339-1の一部	個人住宅	4.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削を行う。第1調査区は現地表面から約35cm掘り下げるが、全て盛土であり、遺構・遺物は確認できなかった。第2調査区も約50cm掘り下げるがすべて盛土であった。
高鷲中之島遺跡	09-03	H22.3.2	H22.3.2	野々上5丁目412-1	個人住宅	2.0	申請地内に調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から0.6m掘り下げる。耕土・床土・濁黄色粘土・地山層と続く。すでに削平されていると見られ、遺構・遺物は確認できなかった。
野々上遺跡	10-03	H22.8.10	H22.8.10	野々上2丁目67-10	個人住宅	3.0	申請地内に調査区を設定し重機掘削後、人力掘削にて断面及び平面精査を行う。現地表面から0.4m掘り下げるが、すべて盛土であり、遺構・遺物は確認できなかった。
塚穴古墳	09-03	H22.3.1	H22.3.5	はびきの3丁目296-3	確認調査	18.5	別途掲載

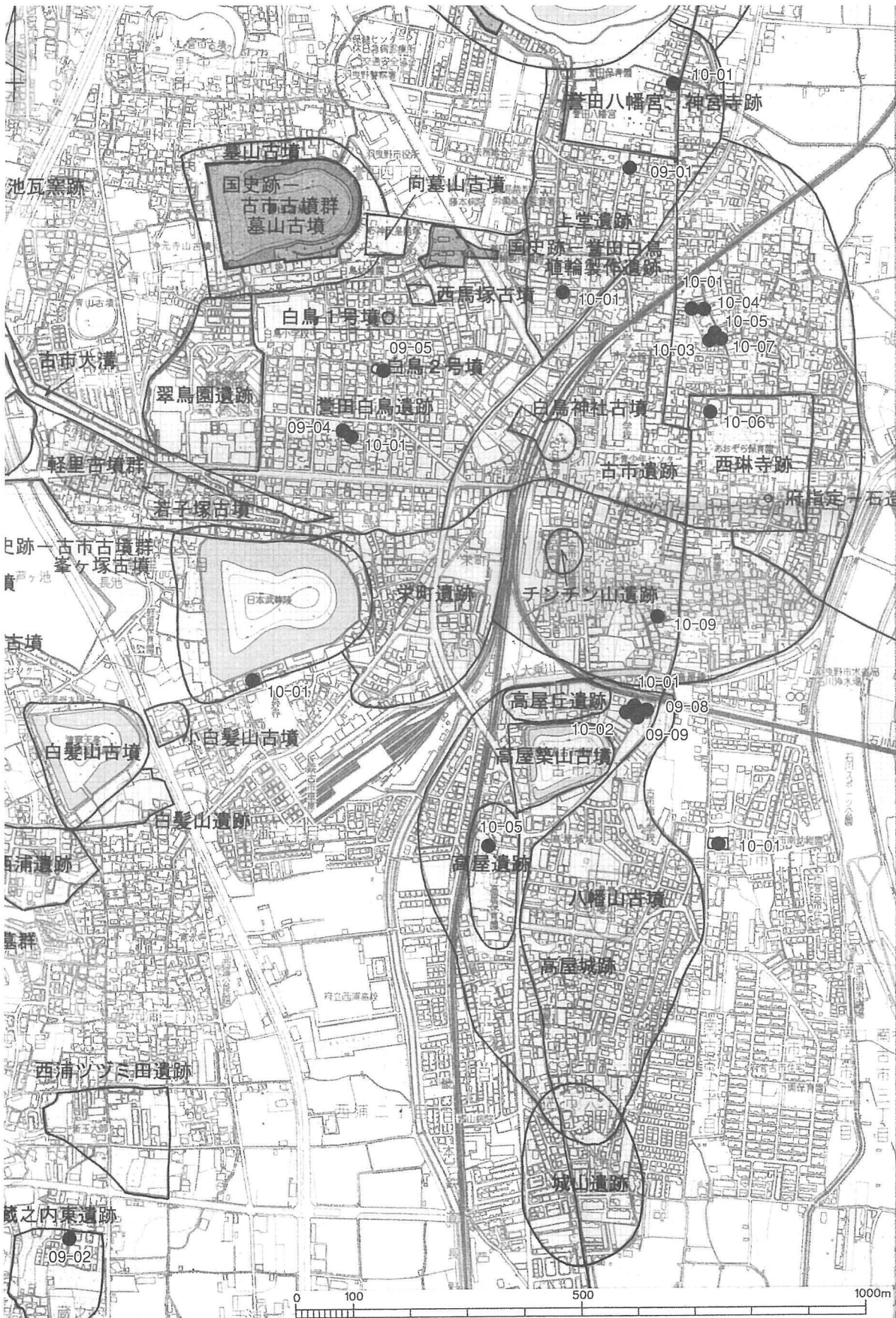


図4 調査箇所位置図(高屋城跡・城不動坂古墳・古市遺跡・西琳寺跡・上堂遺跡・菅田八幡宮・神宮寺跡・前の山古墳・菅田白鳥遺跡・古市鳥飼遺跡・蔵之内東遺跡)

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積(m ²)	調査成果
高屋城跡	09-08	H22.3.17	H22.3.17	古市5丁目772-4、-7の一部	個人住宅	8.8	東西5.0m、南北0.8mの調査区1、東西6.0m、南北0.8mの調査区2を設定。調査区1は基礎深現地地下0.25mまで宅地造成土、一部で0.4mまで造成土、または攪乱坑を確認。調査区2は基礎深0.25mまで宅地造成土、地盤改良部では1.0mまで宅地造成土であった。
高屋城跡・城不動坂古墳	09-09	H22.3.15	H22.3.19	古市5丁目772-5の一部	個人住宅	36.9	別途掲載
高屋城跡・城不動坂古墳	10-01	H22.5.10	H22.5.14	古市5丁目772-3、-6の一部	個人住宅	27.0	別途掲載
高屋城跡・城不動坂古墳	10-02	H22.5.12	H22.5.21	古市5丁目772-1の一部	個人住宅	36.0	別途掲載
高屋城跡	10-05	H22.8.4	H22.8.4	古市7丁目839番1の一部	個人住宅	12.0	申請地内に調査区を4か所設定し重機掘削を行う。現地表面から0.5～0.9mは盛土、その下層に過去の解体時の整地層が0.2～0.3m堆積し、部分的に包含層が残っていた。基礎は30cmと浅く、柱状改良部分を中心に掘り下げたが、1.5m以上上げると基礎に支障をきたすため、その範囲内にとどめた。遺物は若干出土したが、遺構は見られなかった。
古市遺跡	10-01	H22.4.16	H22.4.16	誉田1丁目957-3、-6	個人住宅	3.5	申請地内に調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から40cm掘り下げる。盛土の下層は、近世の包含層であった。包含層からは遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。
古市遺跡	10-03	H22.5.20	H22.5.20	誉田1丁目750-2の一部	個人住宅	4.0	申請地内に1ヶ所調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から30cm掘り下げるが全て盛土であり、遺構・遺物は確認できなかった。
古市遺跡	10-07	H22.8.20	H22.8.20	誉田1丁目750番2の一部	個人住宅	4.0	申請地内に調査区を1ヶ所設定し重機掘削を行う。現地表面から約1m掘り下げる。上層70cmは盛土、下層は茶褐色泥砂粘質土であった。遺構・遺物は確認できなかった。
古市遺跡	10-09	H22.9.22	H22.9.22	古市4丁目349-1、-2	個人住宅	11.3	申請地内に調査区を1ヶ所設定し、重機掘削後、確認を行う。現地表面から0.4～0.7m掘り下げた。上層0.35mは盛土、包含層と続く。0.7mの深さで段丘礫層の地山層に到達した。遺物は少量出土したが、遺構は確認できなかった。
古市遺跡・西琳寺跡	10-06	H22.6.16	H22.6.16	古市2丁目125-18	個人住宅	8.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削後、人力で平面及び断面を精査を行った。第1調査区は全て盛土、第2調査区は盛土、オリーブ色粘質土(包含層)であった。包含層から遺物が少量出土したが、遺構は認められなかった。基礎は盛土におさまる。
上堂遺跡	09-01	H22.1.18	H22.1.18	誉田3丁目1234-1の一部	個人住宅	7.0	申請地内に2ヶ所調査区を設定し、重機掘削を行う。第1調査区、第2調査区とも現況から20cm掘り下げるが、盛土であった。遺物は出土せず、第2調査区では地山面に遺構が確認された。GL面は現況から35cm上にあるため支障なし。
上堂遺跡	10-01	H22.5.18	H22.5.18	誉田3丁目310-5	個人住宅	7.1	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削を行う。第1調査区は現地表面から約30cm掘り下げる。アスファルトの下層は茶褐色粘質土、地山と続く。第2調査区ではアスファルトの下層は整地土(30cm)、茶褐色粘質土(包含層:60cm)となる。包含層からは少量の遺物が出土した。第1調査区では30cmで地山が見られたが、第2調査区では現況から1m掘り下げても地山が確認できず、南に急激に傾斜しているものと考えられる。遺構かどうかは確認できなかった。
誉田八幡宮・神宮寺跡・上堂遺跡	10-01	H22.5.27	H22.5.27	誉田3丁目1169-8	個人住宅	6.0	申請地内に2ヶ所調査区を設定し、重機掘削を行う。第1調査区は現地表面から30cm掘り下げ、碎石層30cm、盛土10cmであった。第2調査区は80cm掘り下げ、碎石層10cm、盛土70cm、一部茶褐色の包含層が見られ、遺物が出土した。

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積(m ²)	調査成果
前の山古墳	10-01	H22.9.2	H22.9.2	軽里3丁目228-3	個人住宅	7.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削を行う。両調査区とも現状から0.3m掘り下げる。第1調査区は表土、耕土であった。第2調査区は耕土の下層に地山層がみられた。この地山層は前の山古墳の外堤の一部と考えられる。既に上面が削平されているものと考えられる。遺物は見られなかった。
誉田白鳥遺跡	09-04	H21.11.19	H21.11.19	白鳥2丁目319-34、 -29の一部	個人住宅	8.0	申請地内に2ヶ所調査区を設定し重機掘削を行う。第1調査区は現地表面から40cm掘り下げる。層序は、盛土、灰褐色粘質土(耕土と盛土が混ざったもの)、濁黄色粘質土(マンガン混)となり、包含層から遺物が出土した。第2調査区は現地表面から60cm掘り下げ、盛土、黄灰色粘質土、橙灰色シルト(地山層)と続く。黄灰色粘質土からは遺構と考えられる落ち込みの上層で遺物が出土した。建物範囲では、基礎は盛土内におさまるため支障はない。
誉田白鳥遺跡	09-05	H21.12.7	H21.12.7	白鳥2丁目204-68	個人住宅	4.0	申請地内に1ヶ所調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から70cm掘り下げる。盛土(30cm)、耕土・床土(30cm)、黄灰色粘質土(マンガン混入:10cm)、地山層へと続く。包含層から遺物は出土したが、遺構は確認できなかった。
誉田白鳥遺跡	10-01	H22.4.19	H22.4.19	白鳥2丁目319-36	個人住宅	6.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削を行う。第1調査区は40cm、第2調査区は50cm掘り下げた。どちらも表土、攪乱土、地山と続く。遺構は確認できなかったが、遺物は少量出土した。
古市鳥飼遺跡	10-01	H22.9.1	H22.9.10	南古市1丁目	確認調査	85.0	別途掲載
蔵之内東遺跡	09-02	H22.1.22	H22.1.22	蔵之内559-27	個人住宅	5.0	申請地内に2ヶ所調査区を設定し、重機掘削を行う。第1調査区は建物部分内で現況から40cm掘り下げるが、全て盛土であり支障はない。第2調査区は駐車場部分で現況から1.2m掘り下げた。上層80cmは盛土、耕土、黄茶色砂質土、灰色砂質土、黄灰色粘質土(地山層)と続く。地山面で約40cm四方の柱穴を検出した。しかし遺物が出土しなかったため時期は不明である。

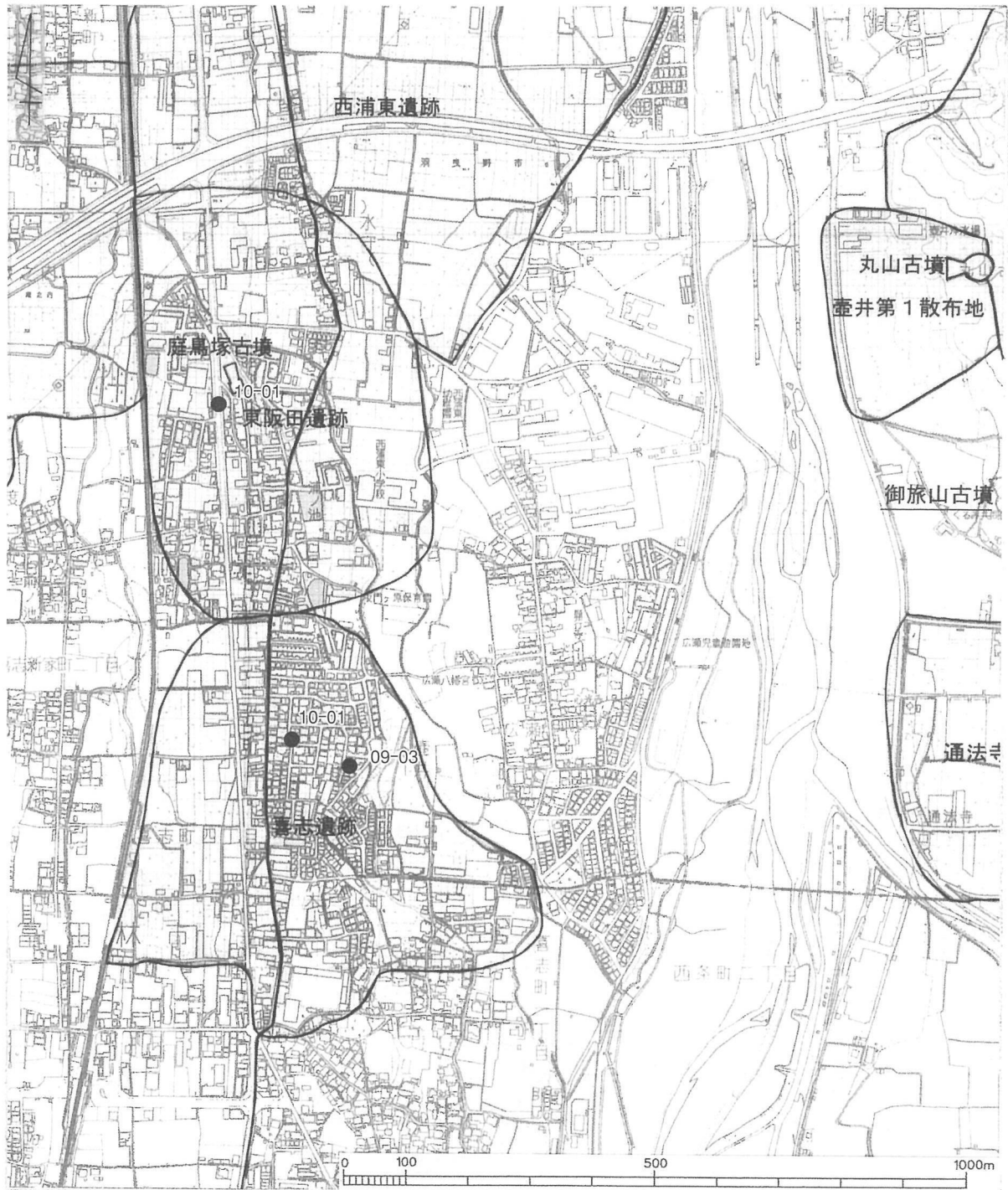


図5 調査箇所位置図5（東阪田遺跡・喜志遺跡）

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積 (㎡)	調査成果
東阪田遺跡	10-01	H22.4.15	H22.4.15	東阪田80-5	個人住宅	3.0	申請地内に調査区を設定し、重機掘削を行う。現地表面から80cm掘り下げるが上層60cmは盛土、下層は耕土であった。遺構・遺物は確認できなかった。
喜志遺跡	09-03	H22.3.11	H22.3.11	東阪田391-149	個人住宅	4.6	申請地内において、調査区2ヶ所を設定し、重機掘削の後に断面及び平面を人力で精査した。その結果、表土下は全て段丘礫層であり、遺構及び遺物包含層が認められなかった。
喜志遺跡	10-01	H22.6.2	H22.6.2	東阪田391-26	個人住宅	8.5	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削を行う。第1調査区は基礎の深さまで(30cm)掘り下げたが、全て盛土であった。第2調査区は現地表面から70cm掘り下げる。上層40cmは盛土、下層30cmは茶褐色粘質土(包含層)で遺物が出土した。またその下層の黄土色粘質土で遺構を確認した。



図6 調査箇所位置図6 (大黒遺跡)

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積 (m ²)	調査成果
大黒遺跡	10-01	H22.7.15	H22.7.15	大黒502番3の一部、502番4	個人住宅	7.0	申請地内に調査区を2ヶ所設定し、重機掘削を行う。第1調査区は現地表面から約40cm第2調査区は現地表面から1.5m掘り下げたが、1.4mまでは盛土・整地層であり、遺構・遺物は確認できなかった。

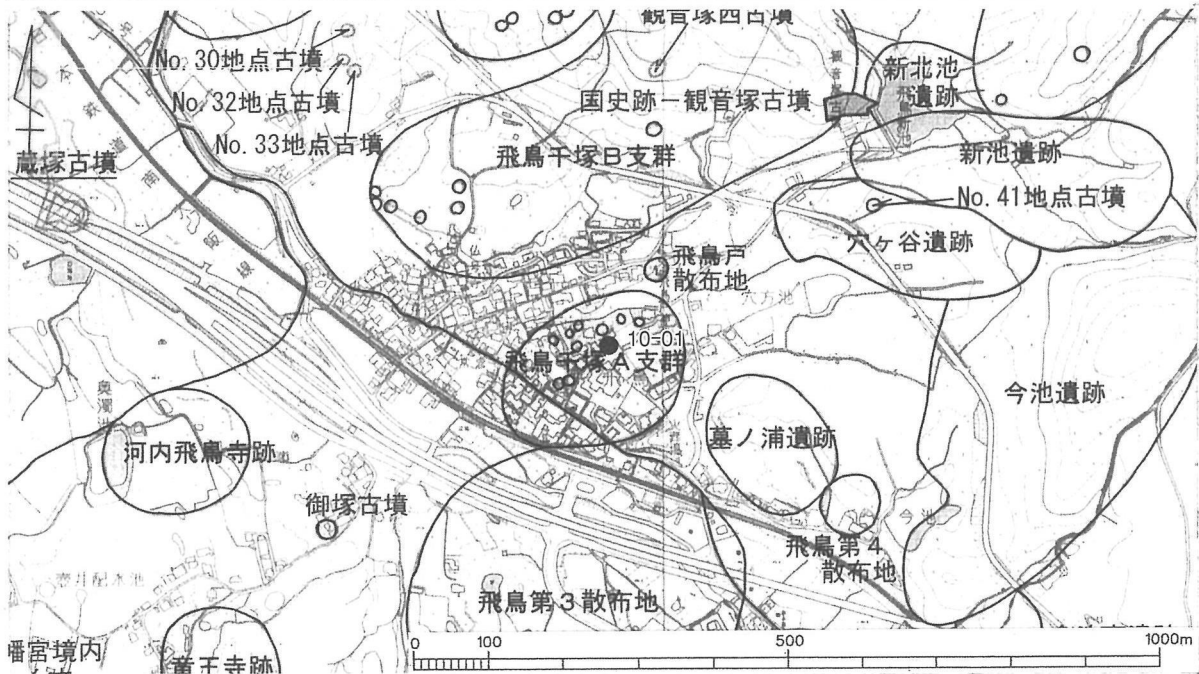


図7 調査箇所位置図7 (飛鳥千塚A支群)

遺跡名称	調査番号	調査開始日	調査終了日	申請地	調査原因	調査面積 (m ²)	調査成果
飛鳥千塚A支群	10-01	H22.9.21	H22.9.21	飛鳥1142	個人住宅	7.5	申請地内に2ヶ所調査区を設定し、重機掘削後、人力にて精査を行う。現地表面から約35cm(基礎深まで)掘り下げると、墳丘より周溝と考えられる溝を検出した。溝の幅は約1mで、遺物等は確認できなかった。基礎より深くは掘り下げられないため確認にとどまった。遺構まで基礎が及ばないため支障はない。

古市鳥飼遺跡

10-01 調査

羽曳野市南古市1丁目において申請面積約1,270㎡の宅地造成が計画された(図8)。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、本市で300㎡を越える工事を行う場合は事前に試掘調査が必要であるため、「土木工事等による試掘調査依頼書」の提出を願った。平成22年8月24日に届出があり受理した(羽教生社第2291号)。

依頼書に基づき平成22年9月1日に試掘調査を実施した。調査区の設定にあたっては掘削が深くなる埋設管部分とした。調査の方法は重機により筋掘り後に断面観察をし、堆積状況と遺物の有無を確認した。また、土層の変わり目で平面の遺構精査を行った。

その結果、古墳時代から室町時代にいたる遺物^①の包含層が確認され、遺構も検出された。同日付けで土地所有者でもある申請者から「遺跡発見届け出」が提出され、同日これを受理した(羽教生社第2300号)。

遺跡の発見届出により羽曳野市教育委員会は遺跡名を“古市鳥飼遺跡”とした。当地の小字が「鳥飼」(とりがい)であることから大字の古市に小字を冠した^②。

羽曳野市教育委員会では遺跡の範囲、遺構の性質、時期など今後の保存策を講じる資料を得るために、平成22年9月6日から9月9日までの期間で85㎡の範囲を発掘調査することとなった。



図8 調査位置図(トーン部分)

遺跡の立地と歴史的環境

調査前の古市鳥飼遺跡の地目は水田で、周辺は宅地が立ち並んでいる。かつて広大に広がる田園風景であったが「平成」の時代になって開発が進み景観が一変した。密集する住宅で石川の堤防が見えなくなっているが、元は石川北半流の左岸に立地する。

地形分類^③は氾濫原となり、標高28mである。東に緩やかに下降する傾斜し、調査区の東に位置する羽曳野市立古市南幼稚園から更に一段下がり旧河川敷となる。遺跡の西方には高屋丘陵が聳え立ち、標高36m～40mの独立の河岸段丘との比高は8m～12mの差がある。

同丘陵には旧石器から近世にかけての生活痕跡が確認でき、ここでは“高屋丘陵遺跡群^④”として捉えて古い時期からの遺跡を順に紹介しよう。

弥生時代中期から後期の土器や石器、竪穴住居が検出された高屋遺跡、古墳時代の土師器が出土した高屋丘遺跡がある。

丘陵の最高所に宮内庁が管理する陵墓が2ヶ所存在する。ひとつは「安閑天皇古市高屋丘陵」に治定されている高屋築山古墳。いま一つは「安閑天皇皇后春日山田皇女古市高屋陵」に治定されている八幡山古墳である。

高屋築山古墳は、墳丘長122mの前方後円墳で、前方部を西に向け、周濠が廻る。中世に城として利用されるため墳丘上段は平坦化している。東京国立博物館所蔵のガラス椀（白瑠璃椀）はかつて西琳寺の什宝であった^⑤。『河内名所図会』には江戸時代（享保年間か）に同古墳から出土したと伝えられている。宮内庁の調査で周濠から出土した円筒埴輪から6世紀中葉の築造と考えられる。

後者は、一辺30～40mの方形状の高まりが陵墓とされているが、大阪府教育委員会や羽曳野市教育委員会の発掘によって本来は墳丘長約85mの前方後円墳であったことが判明した。墳丘の削平は高屋城の築造によるもので、削られた土砂によって周濠は埋められていた。調査成果から前方部が北を向き、盾形の周濠が廻る。出土した円筒埴輪は6世紀初頭に製作されたもので、高屋築山古墳より先行して築造と考えられる。なお、古市の旧家には“城山”から出土したという画文帯神獸鏡や金銅飾履片、鉄剣片が残されており、八幡山古墳の出土品と考えられている（羽曳野市史編纂委員会1994）。

また、高屋城によって壊された古墳が発掘調査によって数基が確認されている^⑥。本書に納められている城不動坂古墳もその一つで、復元墳丘長約36mの前方後円墳がある。横穴式石室から出土した須恵器から6世紀中葉の築造と判明している。周濠出土の埴輪の年代も齟齬はない。

奈良時代になると掘立柱建物の柱穴跡や井戸が検出され（大阪府教育委員会1979、1980）、遺物として土器の他に複弁七葉蓮華文軒丸瓦の出土が報告されている^⑦（羽曳野市教育委員会1986）。

鎌倉時代には西琳寺の奥の院「宝生院」が叡尊によって造営される。墓地跡は昭和32年の道路工事中に五輪石塔が発掘された付近が推定されている。五輪塔は現在、西琳寺の境内に移設されている^⑧。

室町時代になると高屋城が畠山氏によって築城される。高屋城は文献史料から応永年間（1394～1428）に畠山基国によって築造され、その後いく度かの記録に登場するものの天正3年（1575）に織田信長による焼き討ち以降は廃城になった定説化がなされている^⑨。

高屋城跡の範囲は、地形とかつて存在した土塁や堀跡から平山城で連郭式の縄張りが復元されている。その規模は南北800m、東西450mと考えられている。発掘調査は昭和48年（1973）から大阪府教育委員が実施したことに始まり、昭和59年（1984）から羽曳野市教育委員会が調査を実施している。調査によって土塁と堀によって区切られた郭が明らかとなった。郭には礎石柱の建物が築かれるが、瓦が出土していないことから板葺もしくは檜皮葺きであろう。出土する遺物は土師皿、陶磁器が主流である。碁石や文房具類の出土もあり、上級武士の居住地であったことも推測される。

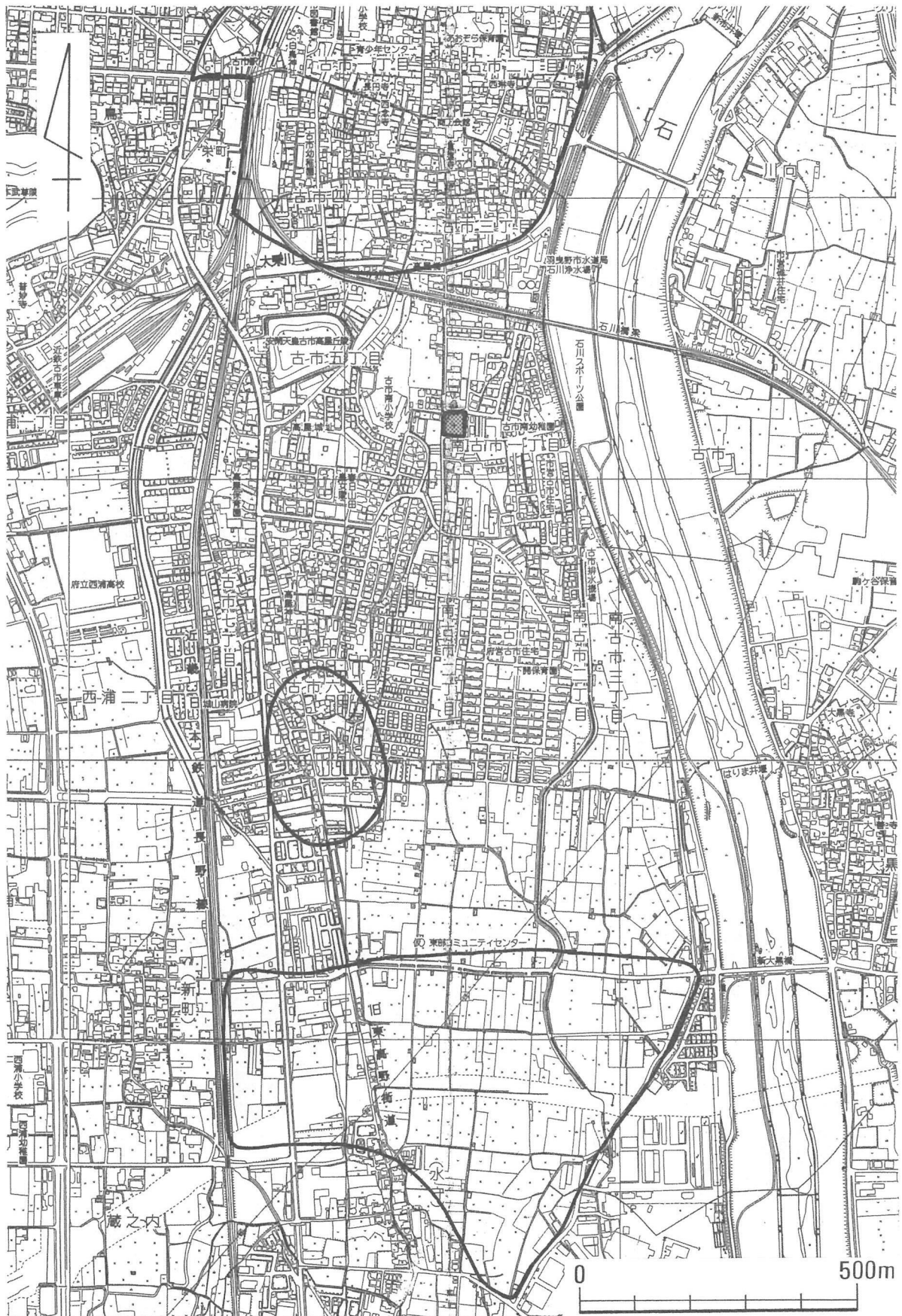


図9 調査地周辺遺跡分布図

高屋丘陵の北側に沿って西へ流れる大乘川は石川に合流するように江戸時代の後期に流路を付け替えられている^⑩。新たな大乘川の北に低位段丘が広がり古市遺跡が分布する。同遺跡は、縄文時代から江戸時代にわたる遺跡であるが、昭和54年（1979）の古市小学校の発掘成果により上堂遺跡から分離、その後遺跡の分布範囲が拡大した。同遺跡での縄文時代の遺構、遺物は平成元年（1989）に確認された。標高28mの低位段丘の東縁辺で土器棺墓が検出された。棺に使用された土器は滋賀里Ⅲ式に属する深鉢である。今後、縄文時代晩期の集落が発見される可能性が高いと思われる。

高屋丘陵の南には城山遺跡と西浦東遺跡が分布している。城山遺跡からは北白川上層式の縄文土器片が出土している。土器は包含層からの出土で、表面に磨滅が観察されることから二次堆積と考えられる。図10に提示した縄文土器は、3が中期の粗製土器を再実測したものと1と2が『府営城山住宅建替に伴う高屋城跡（城山遺跡）発掘調査概要』の報告書に未掲載土器の実測図である。図10-3の表面にはすり消し縄文が観察されることから、北白川上層の縄文土器で、後期前半と考えられる。

また弥生土器第Ⅱ様式の壺片のほか破片点数は多いという。畿内第Ⅱ様式の弥生土器は、羽曳野市内では前期古墳のお旅山古墳の墳丘下層で確認されている^⑪ほか、飛鳥第二散布地でも確認されている。

城山遺跡の南の沖積地に立地する西浦東遺跡では、縄文中期の以前の土器が確認され、縄文後期の遺物が遺跡の東部を中心に増加する。北白川上層式の土器が伴う炉の検出は当地が長期定住集落ではなく、いわゆるキャンプ地であった可能性を示唆している。その後、弥生時代中期以降継続的、断続的に水田域として機能していたことが出土した土器や遺構から判断できる。6世紀の一時的な居住地として形成されたことも特筆される。同遺跡は、西浦地区散布地と周知されてきたが、平成10年（1998）から始まった南阪奈道路の調査で「西浦東遺跡」と改称された^⑫。

西浦東遺跡の南は富田林市から北に緩やかに下降する中位段丘があり、段丘上には東阪田遺跡が存在する。大阪府教育委員会の調査で縄文時代前期と考えられているチャート製の横型石匙形の石器が出土している。今のところは前期に遡る土器の出土が確認されていないが、昭和55年（1980）の羽曳野市教育委員会が実施した発掘で注口土器が出土している（羽曳野市教育委員会1980）。

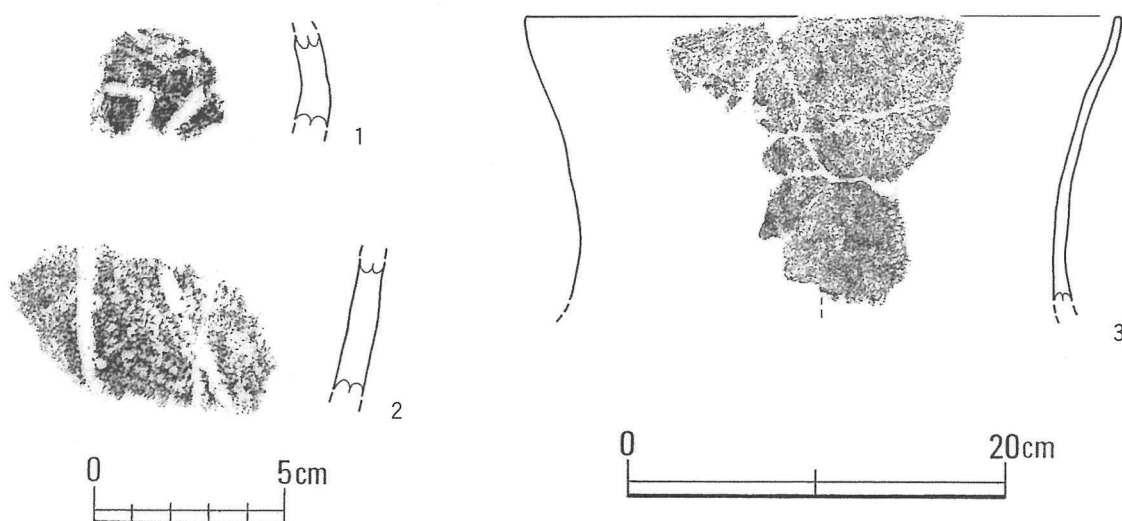


図10 城山遺跡出土縄文土器実測図

基本層序と検出遺構

調査区は申請地の南寄りに東西方向の長さ17m、幅5mの範囲である。申請地の南辺を東西に通る道路の北端から北へ約10m、道路にほぼ平行する（図11）。

調査によって確認できた層序は、耕土・床土を除去すると、調査区の西側の試掘トレンチでは砂層が現れるのに対して東側では瓦器や須恵器が包蔵されている層（＝落ち込みの埋土）がある（図12）。落ち込みの堆積層は5層に分層でき、堆積状況は水平であった。最も下で確認した灰色（5Y4/1）粘質土は古墳時代の遺物のみが出土する。落ち込みが検出されたベース面は⑬浅黄橙色粘質土で、弥生土器と縄文土器の小片が包蔵されていた。土器は磨滅が認められ、同層に薄い砂層の観察できることから流路の堆積層と考えられる。

落ち込みの下から溝1と溝2を検出し、遺構のベース面は⑧灰白色粘質土で、その下層の⑩有機質土には直径15cm程度の倒木が包蔵されていた。遺物は包含されていない。

一方、調査区の西側の試掘トレンチで確認した粗砂層は、層の上面で東方へ下降するオリブ黒色粘土が確認できた。サブトレンチでは縄文土器片のほか、サヌカイト片が出土している。

以下、主だった遺構を検出順に報告することとする。

【落ち込み】

調査区の東側で検出した。東側へ下降する東西方向の肩を確認し、検出幅5m、検出した長さは5mの規模をもつ。落ち込みは更に東へ広がる。落ち込みの深さは約0.5mで、埋土は5層に分層できた。

上から、①にぶい黄褐色砂質土、②褐灰色砂質土、③明赤褐色砂質土、④明褐色砂質土、⑤灰色粘土である（図12の土層図と対応）。

出土遺物は、瓦器、須恵器、土師器などの土器片（最大で10cm大）が出土している。⑤の灰色粘土からは中世の遺物が含まれず、須恵器の破片のみが出土しているので現段階では古墳時代の堆積土として捉えている。その上は中世以降の耕地化に伴う土壌層と考えている。

【溝】

落ち込みの下面で確認した。検出面は標高28.4mで、耕作面から地下70cmのところである。溝は南北方向で、2条検出した。便宜上検出

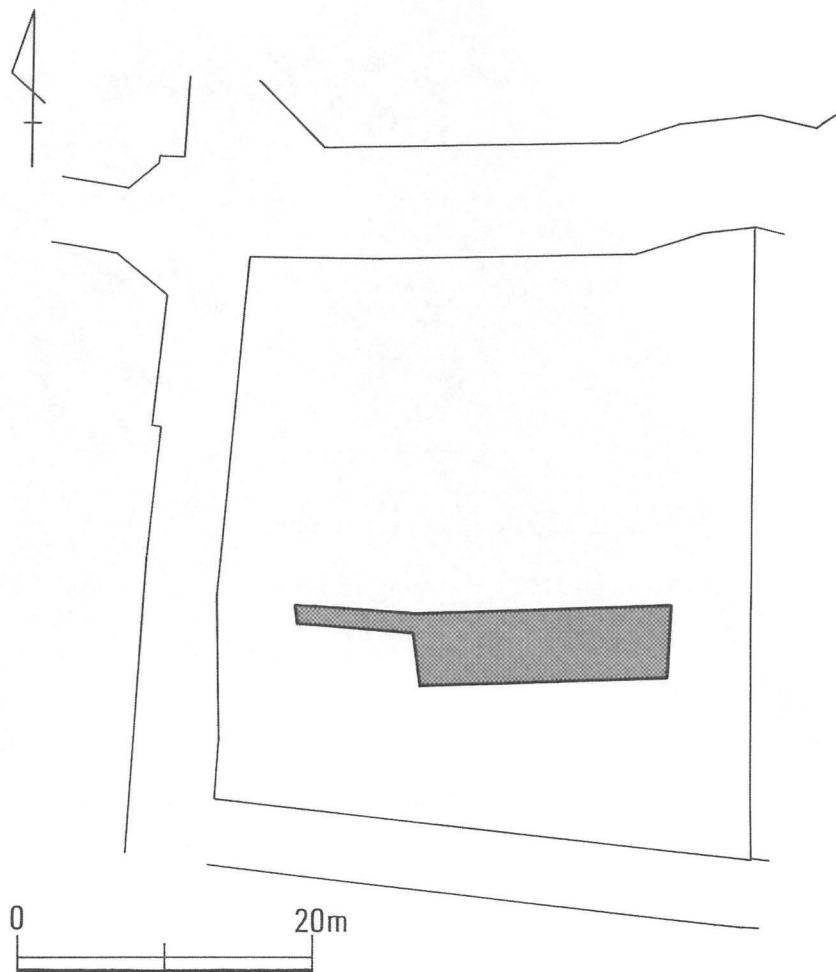


図11 調査区配置図（トーン部分）

順に遺構番号を付け、調査時と同じく西側を溝1、東側を溝2とした。

溝1は検出幅1.0～1.5mで残存する深さは15cm～27cmを計測できた。埋土は褐灰色（10Y R 4 / 1）粘質土の単層であり、砂の堆積は確認できなかった。埋土から土器片が出土している。数点の破片がかたまって西肩にへばりつく状態であった。土器表面には磨滅が認められなかった。

溝2は検出幅1.0m～1.2m、残存する深さは11cm～15cmを計測できた。埋土は褐灰色（10Y R 4 / 1）粘質土の単層であった。砂の堆積は認められなかった。埋土からはサヌカイトと土器片が出土したが、溝2に比べて遺物の出土量が極めて少ない。

【落ち込み（自然流路）^⑬】

調査区の西側において弥生土器を包含する浅黄橙色（10Y R 8 / 4）粘質土が東に向かって緩やかに傾斜する。

西側の肩を検出した。そこから東へ下降するオリーブ黒色粘土が堆積土である。堆積土内には直径20cm前後の自然木が包蔵されていた。下層面付近では拳大から人頭大の河原石が多く認められた（写真1）。ある時期に旧河川であった可能性がある。

堆積層の厚さは60～70cmである。土器片が出土したほかサヌカイト、獣骨などがあった。土器片には磨滅が認められなかった。

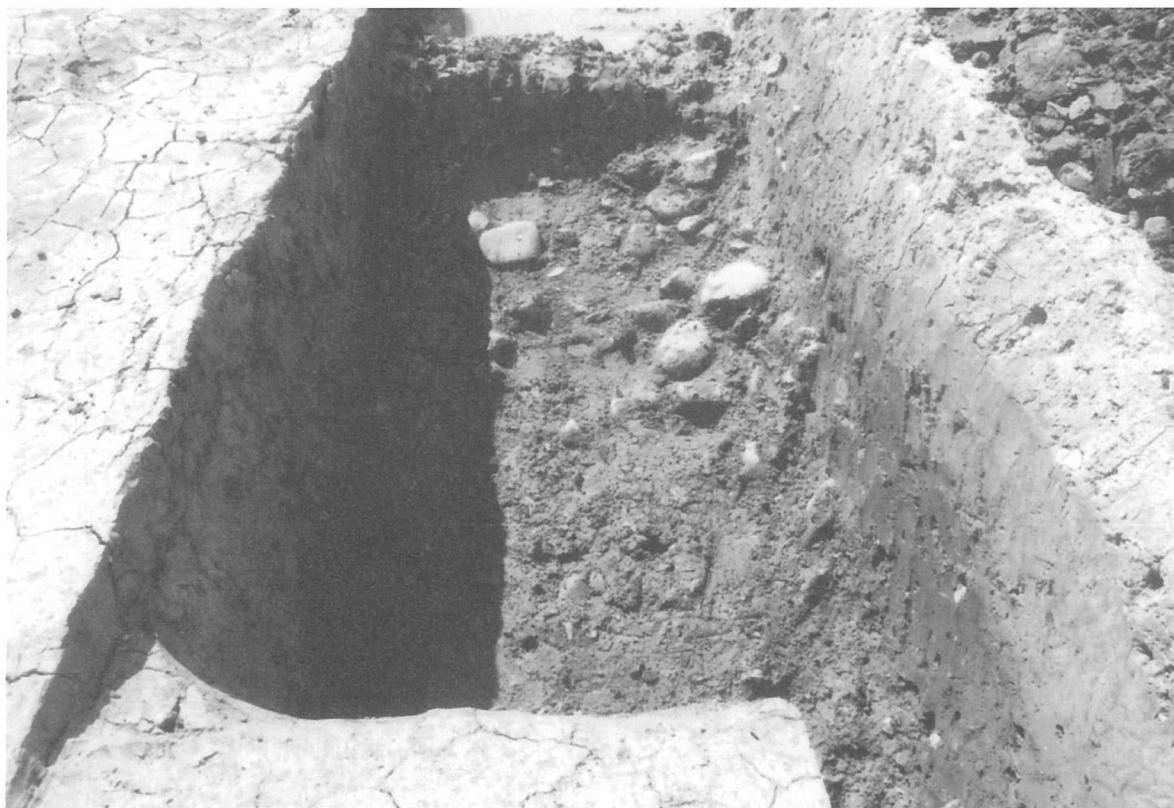


写真1 落ち込み（自然流路）

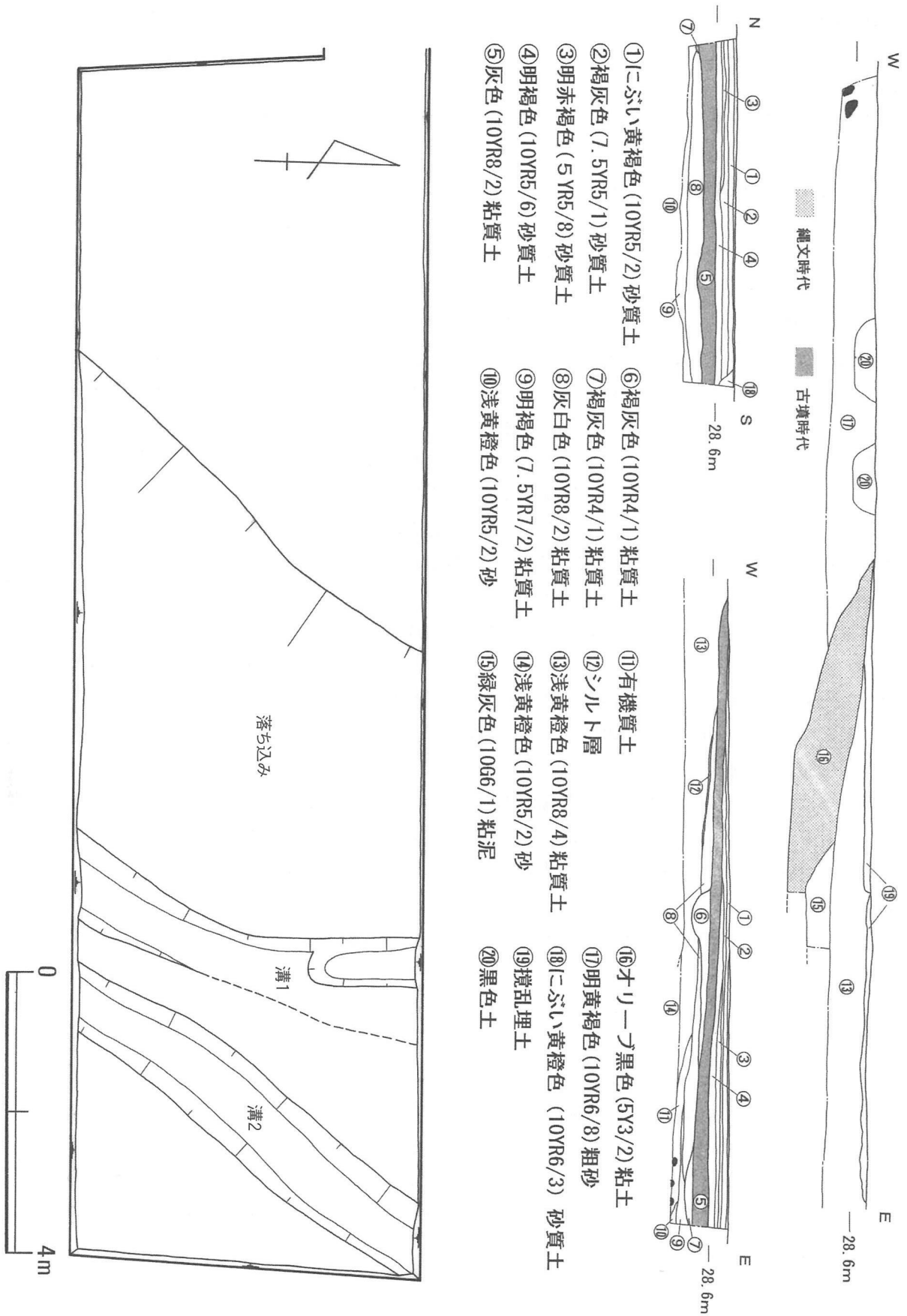


図12 遺構全体図・土層断面図

出土遺物

全体に小片が多く、総重量2.5kgを測る。以下、遺構ごとに遺物を報告することとする^④。

【落ち込み】

調査区の東側で検出した落ち込みから出土した遺物は、古墳時代から室町時代に帰属する土器類であった（図13）。

1は瓦器碗の口縁部の破片である。口縁部端面を丸く仕上げている。和泉型の瓦器碗と考えられる。小片のため口径は復元できない。

2は瓦器碗の底部の破片である。高台の断面形態が三角を呈し、内面見込みには格子の暗文が観察できる。

3も瓦器碗の底部であるが、高台の断面形態が扁平になる。内面の暗文は器壁面の保存状況が良くなく観察できない。外面には指オサエの凹凸が残る。瓦器碗としては新しい要素を示している。

4は土師質の羽釜片である。鏝が欠損するが、羽釜の口縁部から胴部にかけて鏝が貼り付ける部分である。口縁部はやや外反するカーブが観察できることからやや短めの「く」字に近い断面を呈する形態と推測する。胴部には煤の付着が遺存し、外面調整が観察できない。内面はナデによる調整であった。石英、長石が多く含む胎土で色調は暗赤褐色を呈する。

5は土師小皿片で底部付近が欠損する。口縁の残存率は30パーセントである。内外面をナデ調整により口縁端部を尖り気味に仕上げている。口縁端部にやや黒く変色した部分が観察されることから「灯明皿」として使用されていたと思われる。

6は瓦質土器のすり鉢の破片である。5cm四方の破片の内面に10本の線刻を施した摺り目が遺存するが、破片のため摺り目の条線が増す可能性もある。調整は外面がタテ方向のヘラ削り、内面にナデを施した後に摺り目を入れる。器壁の厚みが1cmでざらざら感のある断面は灰色を呈する。胎土に石英、長石の微砂を含み、内外面の色調は黒色を呈する。

7は円筒埴輪の胴部片である。6.5cm×5cmの破片で円形のスカシ孔が遺存する。厚さ1.2cmである。外面調整はナナメ方向のハケメ、内面調整はユビナデ。粘土紐の接合痕跡が観察できる。焼成は窖窯によるもので無黒斑であった。胎土は長石や赤色斑文岩を多く含む。色調は明黄橙色を呈する。調整の手法や焼成方法より5世紀末から6世紀前葉の製作時期が考えられる。川西編年のV期に該当する資料である。

8は土師器の高杯である。杯部の口縁部が欠損し、杯部底が2分の1程度残存する。杯の脚部の接合方法が観察できた。いわゆるソケット技法と呼ばれる高杯の脚の先端をあらかじめ明けた孔に挿入するもので、5世紀代の土師器制作に採用された接合方法である。長石など細かい砂粒が含む胎土で、にぶい黄橙色を呈する。

9は須恵器の杯蓋片である。3.5cm大の土器片からは法量復原が困難であった。稜部の断面形状より5世紀末から6世紀前葉の製作時期と考えられる。陶邑編年のMT15型式の範疇になろうか。色調は外面が赤灰色、断面がいわゆるアズキ色、内面が淡灰色を呈する。

10も須恵器の杯蓋片である。今回出土品の中では最も大きい破片で6cm四方を測る。稜線の断面がシャブさに欠けることから陶邑編年のMT15型式の範疇で収まり、製作年代は6世紀の前葉に位置づけられる。色調は淡灰色を呈する。

11は須恵器の破片であるが、ここでは器壁の厚さや調整から杯蓋の天井部の一部と考えている。色調は白灰色を呈するが、胎土の感じは10の破片と同じである。製作年代は破片から確定できないが、10の破片に近似するので6世紀代の須恵器として考えて良からう。

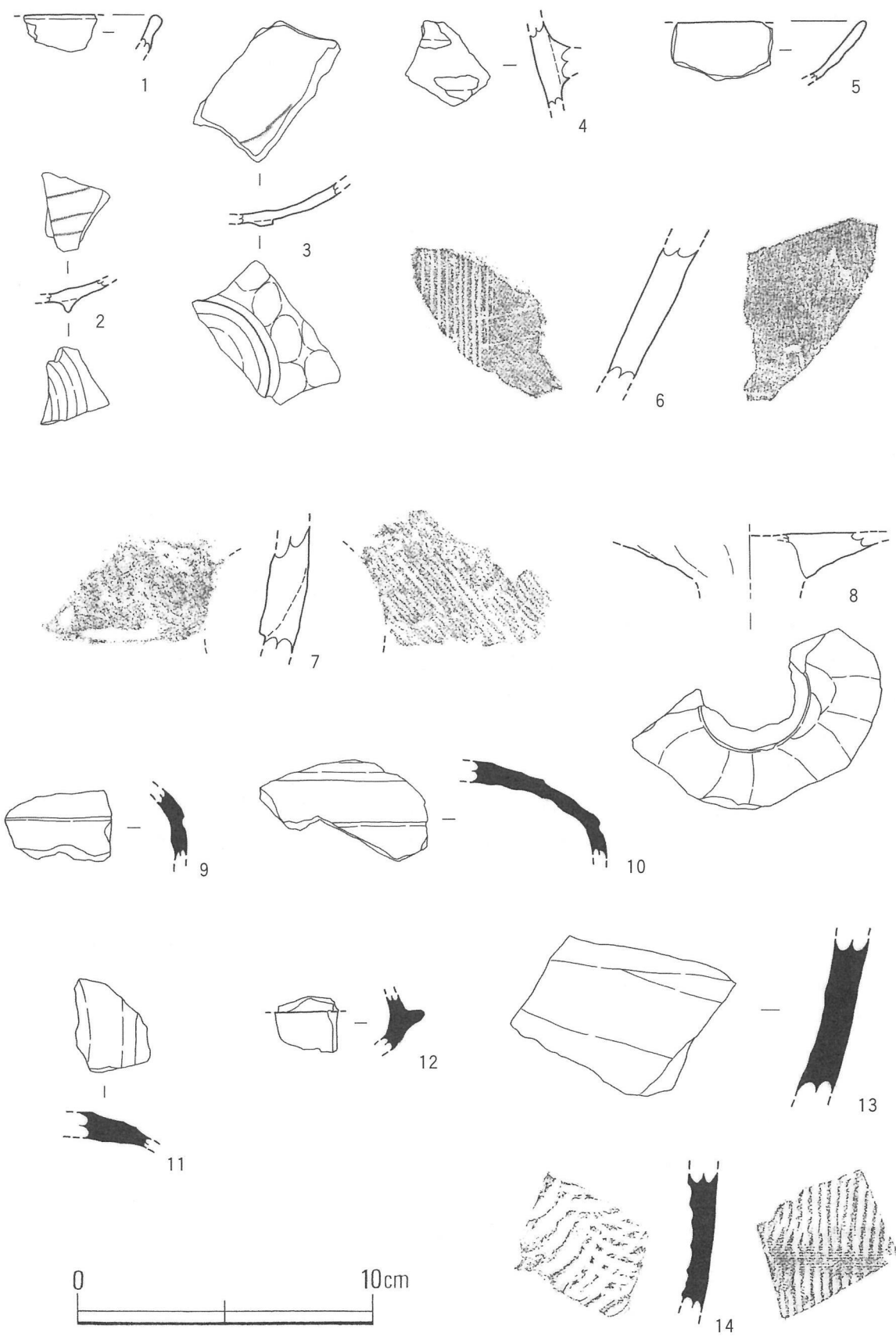


图13 出土遺物実測図 (中世・古代・弥生)

12は須恵器の杯身部の破片である。受け部の部分でかえりの出は0.7cmである。断面形態から陶呂編年TK47型式の範疇になろうか。

13は須恵器の甕胴部片である。4.3cm×5.2cmの大きさの破片は厚さ1cmで断面はアズキ色を挟んで灰色を呈する。いわゆるサンド状の縞模様は初期須恵器に多く見られる焼成状態である。調整も外面がタタキを施した後に丁寧にナデ消しを施している。内面もナデによって整形痕跡を消している。調整方法からも古い手法によるもので、先の焼成による器壁断面の色調などと考えると5世紀の初めに生産された甕であることが判断できる。

14も須恵器の甕の破片である。外面、内面ともに調整の手法が観察される。外面は平行タタキの後にカキ目を部分的に施している。内面は青海波文が明瞭に残っている。色調は白灰色を呈し、焼成は甘い。白色砂や黒色粒が目立つ。調整方法から6世紀代と考えられる。

【溝】

溝1から出土した土器を図14と図15に提示した。図化し得たのは12点である。

15は広口壺の口縁部である。口径を復元することができなかった。緩やかに外反する口縁部を呈し、口縁端部は端面が僅かに凹む。調整は外面にナナメハケを施す。端部はヨコナデによって仕上げていた。胎土に1mm以下の石英、長石を多く含む。色調は黄橙色を呈する

16は広口壺の口縁部である。端部が欠損するが緩やかに外反する頸部をもつ。調整は外面にナナメハケを施す。

17は、広口壺の体部上位の破片で、頸部に近い部分である。外面調整はミガキであろうか。

18は粘土継ぎ目の痕跡から破片は壺の肩部にあたるのがわかる。外面調整はミガキを施す。

19は外面に縦方向のヘラミガキが顕著に見られることから壺胴部の下半にあたる。内面の調整は判断しづらい。胎土は白色砂、赤色斑紋岩を多く含む。色調は淡橙色を呈する。

20は3cm大の小さい破片である。外面にタテハケが見られる。内面にススが付着するので甕と考えられるが法量的には疑問である。

21は4cm大の土器片であるが、壺の体部片とした。内外面ともナデ調整である。

22は5cm四方の破片で、器壁は1cmと他の破片に比べ厚い。内外面の調整にナデが施され壺の体部片と考えられる。

23は5cm大であるが壺体部の破片と考えられる。

24は外面にはヘラミガキと思われる調整が残り、壺の体部にあたる。内面の調整は不明である。

25の外面もヘラミガキであろう調整が観察され壺の体部にあたる。

以上、土器の形態が不明な点が多いものの、観察できた調整手法から弥生時代後期の壺形土器が大半であることが判明した。

土器のほかサヌカイトの剥片が3点出土している。

写真2の①は6.4cm×7.2cmの大きさである。同じく②のサヌカイトは7.3cm×3.2cmの大きさで、断面が三角形を呈する。③も溝1から出土している。大きさは4.7cm×2.7cm。

続いて溝2から出土した遺物について述べることにする。遺構の埋土からはわずかに土器片が1点とサヌカイトの剥片が2点出土した。図化した土器の破片は図15の下、26が該当する。

壺の胴部片である26は、カーブから肩部分の破片と考えられる。調整方法はわずかにハケメが外面に観察できる。内面は指オサエの圧痕のほかハケメがみられた。胎土に1mm以下の石英、長石を多く含む。色調は黄橙色を呈する。溝1と同時期の弥生時代の後期に製作された土器であることが調整から窺い知ることができた。

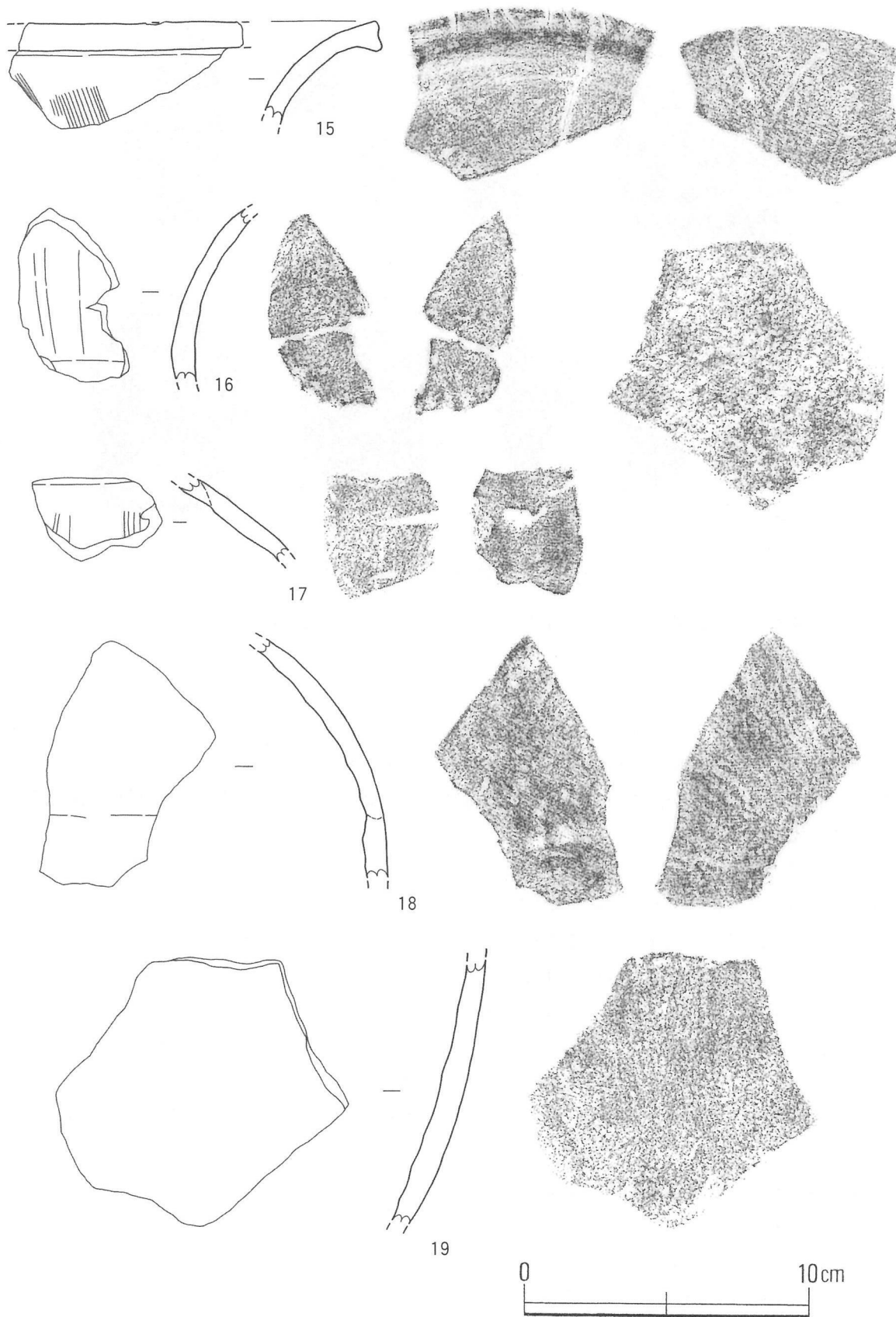


图14 出土遺物実測図（弥生1）

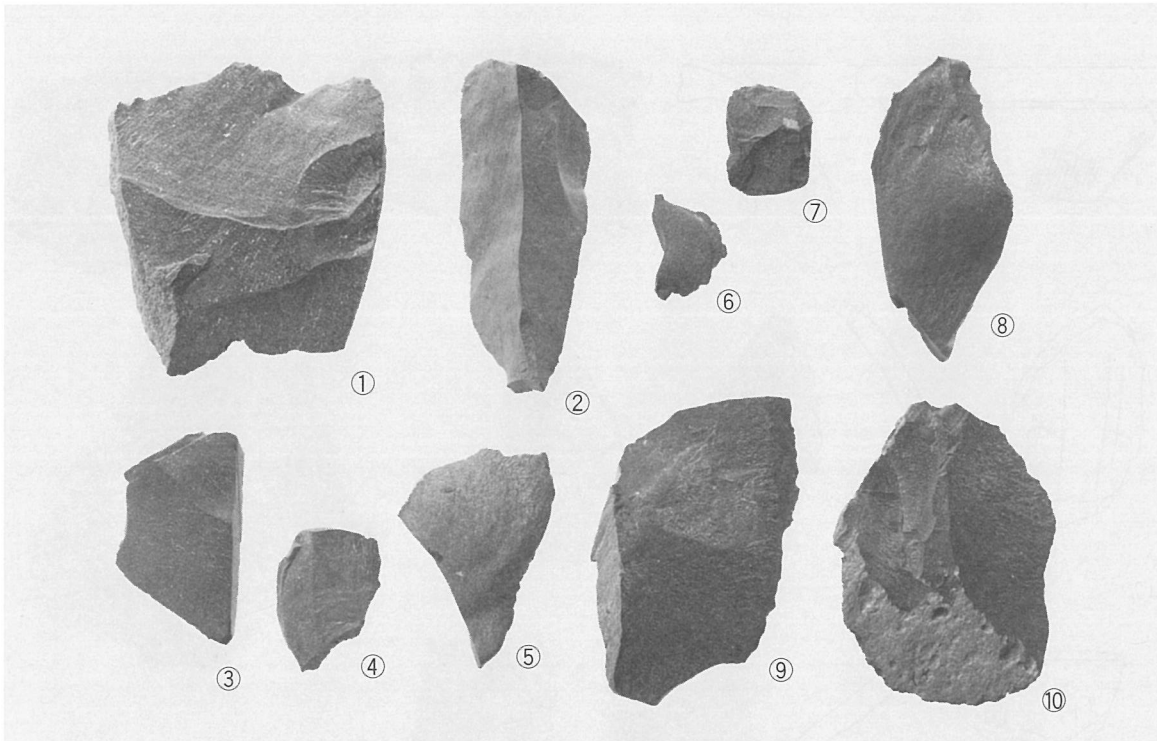


写真2 サヌカイト剥片

2点のサヌカイトの剥片が土器片と伴出した。写真2の④が2.3cm×3.2cmの大きさである。⑤は5.0cm×3.6cmである。

【浅黄橙色粘質土】

図12の土層断面図にある⑬層からは弥生土器片と縄文土器片が数点出土している。前者は細片のため図化できなかったが、底部の破片である。後者は深鉢の頸部にあたる破片で、図15-27に提示した。

縄文土器は表面に磨滅が認められるものの口縁部下端に施された多重沈線による連弧文が観察できる。縄文時代中期と考えられる。

【落ち込み（自然流路）】

落ち込みから出土した土器片は総重量1.4kgである。この内、25点を図化した。

28は深鉢の口縁である。ゆるやかな波状口縁をもつ口縁部は外反する頸部から立ち上がり、口縁端部に面が認められる。口縁部の外面に刺突と沈線を施し、頸部にも沈線が認められる。

29は深鉢A類である。隆帯をもつ口縁部である。平口縁に突起を有し、端部内面に縄文を施している。口縁部の文様帯には渦文を突起部に配置し、周囲に区画文を施す。体部は区画文内に充填縄文を施す。渦文の下方に3本の垂下沈線を施している。縄文はRL。

30は深鉢の胴部片で施文から中位にあたる。外面には蛇行垂下沈線、3単位の垂下沈線が施される。縄文はRL。

31は深鉢の胴部の上位にあたる。胴部には櫛歯状工具による「S」字状の櫛描沈線を施す。縦方向の3条から7条である。

32は櫛歯状工具による縦方向の条線文が見られる。

33は深鉢の胴部片である。磨滅が著しいが斜め方向の縄文が僅かであるが観察される。縄文時代後期の土器であろう。

34は深鉢の口縁部である。口縁部直下に横方向の櫛歯状工具による条線文が施される。

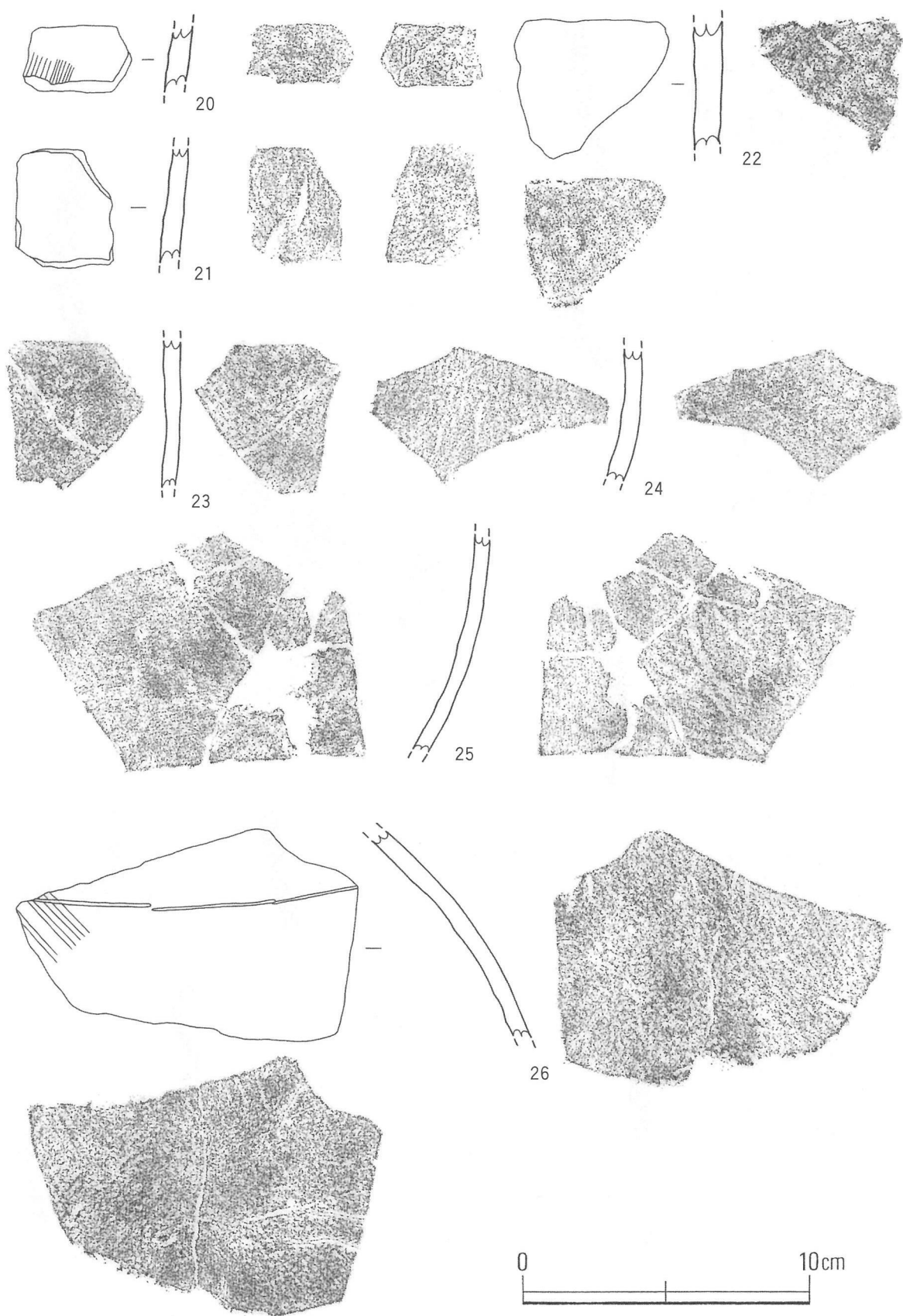


图15 出土遺物実測図 (弥生2)

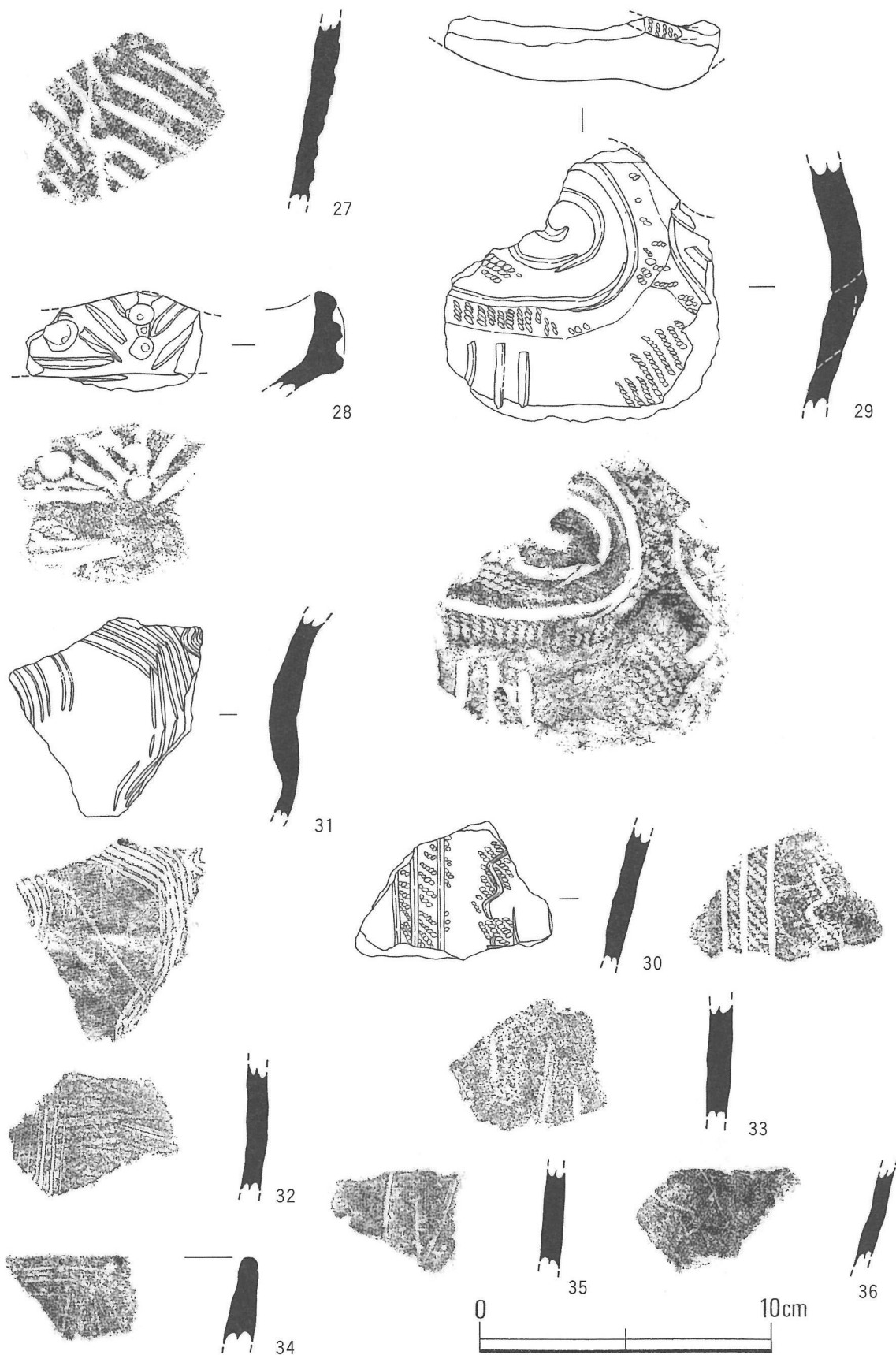


図16 出土遺物実測図（縄文1）

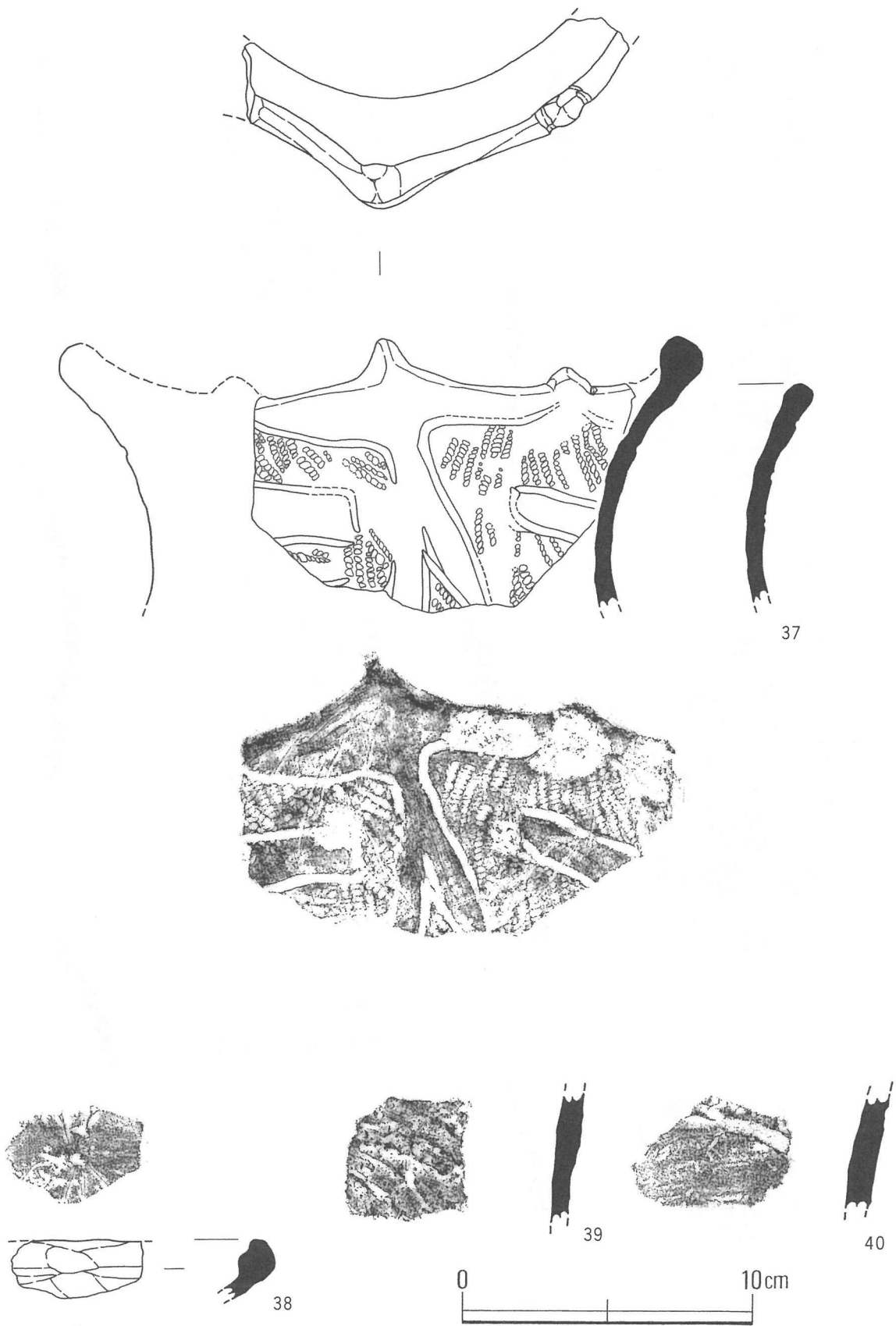


図17 出土遺物実測図（縄文2）

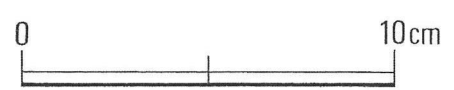
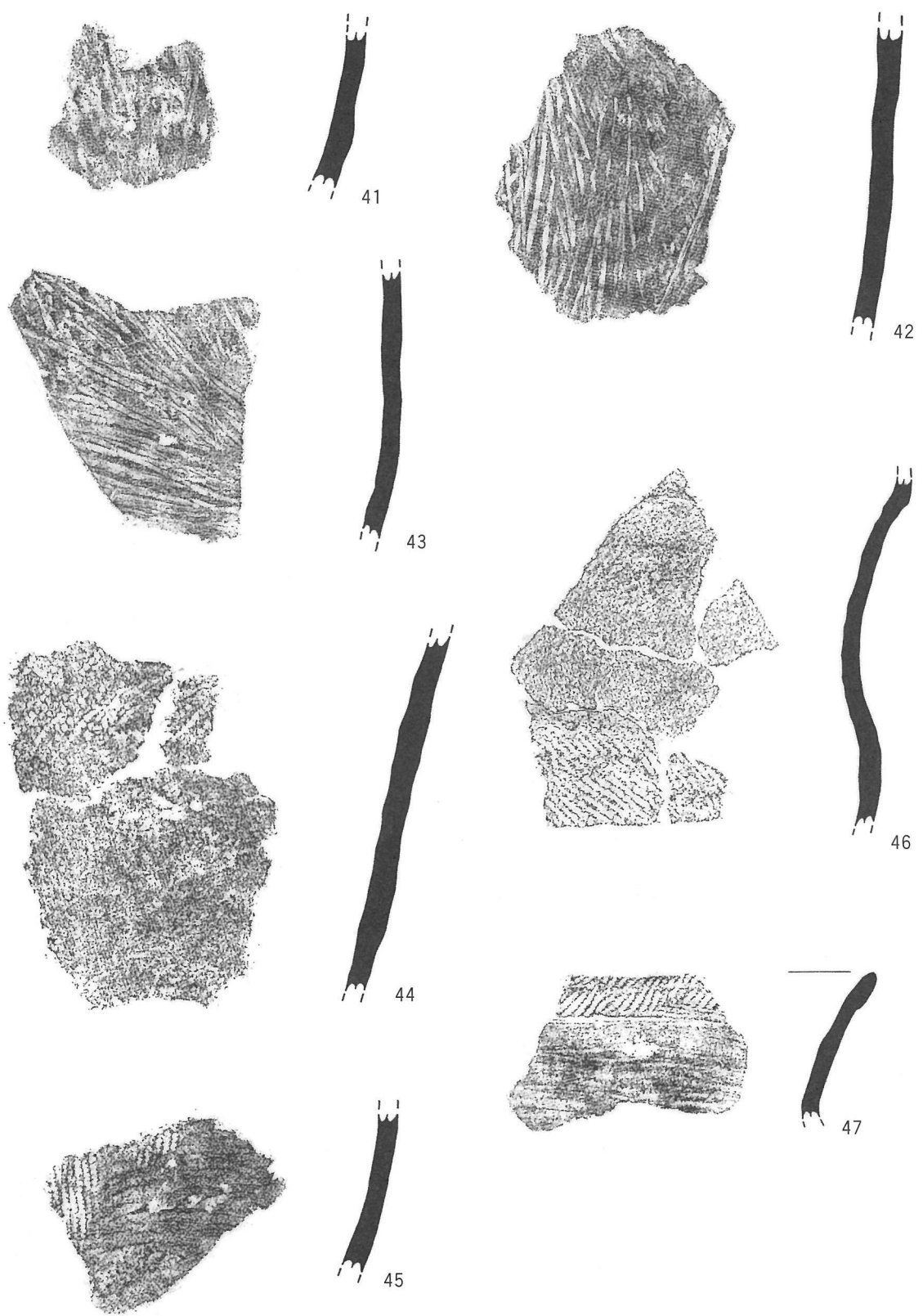


图18 出土遺物実測図（縄文3）

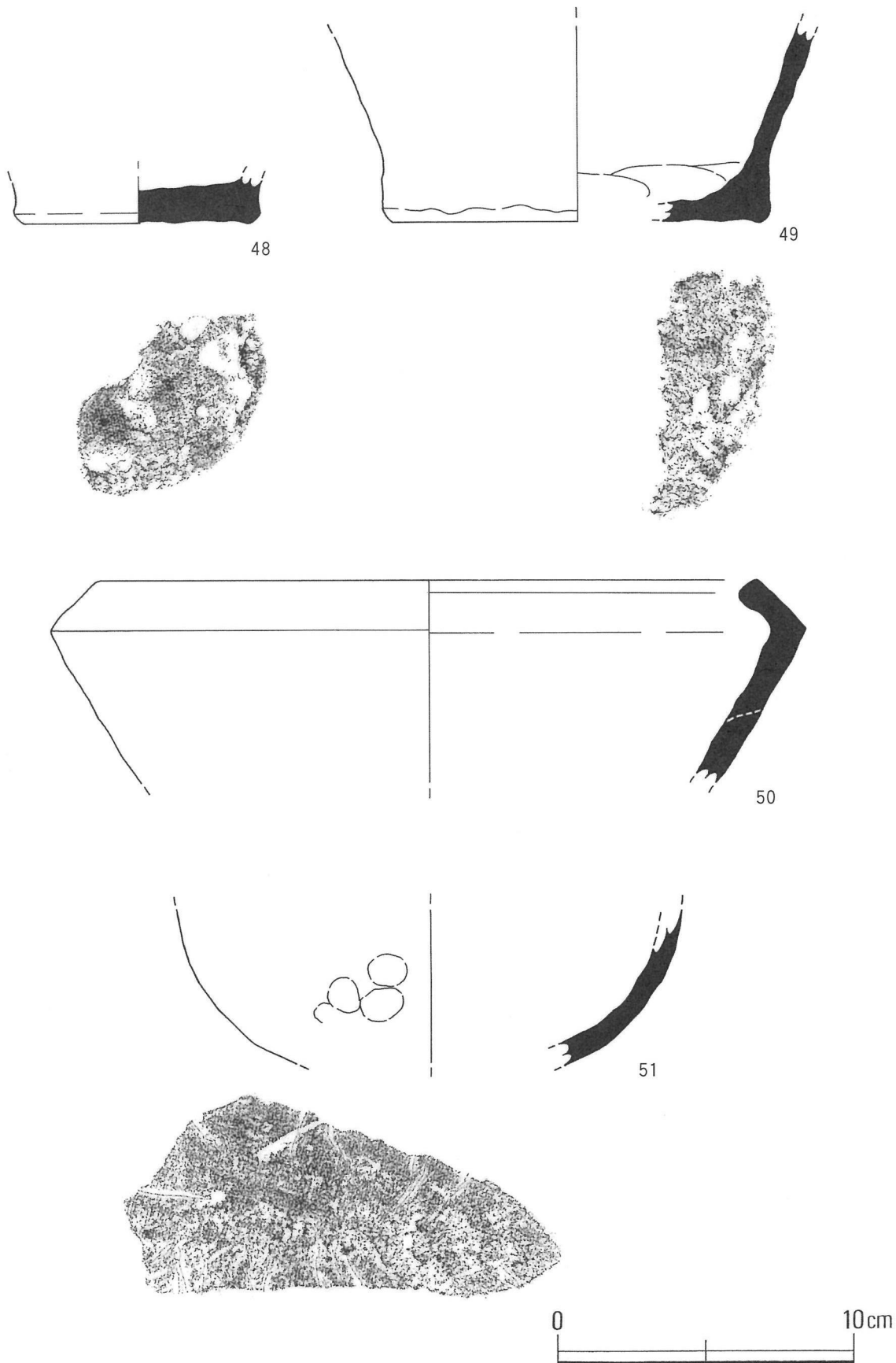


図19 出土遺物実測図（縄文4）

35は深鉢の胴部で櫛歯状工具による縦方向の施文がみられる。

36は深鉢の胴部で櫛歯状工具による施文がみられる。

37は4単位波状口縁をもつ深鉢で突起をもつ。復原し得た口径は22.3cmである。器壁が薄い頸部は区画文で縄文を施す。観察された沈線や縄文は29の深鉢に比べ浅い。形態は中津式であるが文様が崩れている。

38は皿形浅鉢の口縁部片である。内彎気味の口縁端部の外面は無文で内面には段を有する。緻密な胎土で色調も他の土器と違い淡橙色を呈する。福田貝塚の資料に類例が見られる（奈良国立文化財研究所1989）。

39は体部には条痕文が観察された。粗製土器の深鉢と思われる。

40は深鉢で、体部には縄目摺り消しが観察された。幅広い沈線が施される。

41は深鉢で、胎土が粗く、色調は 。ナデで外面を調整している。

42は巻貝による縦方向に施される条痕文をもつ粗製の深鉢である。

43は巻貝による左斜め方向に施される条線文をもつ粗製の深鉢である。

44は胴部にR Lの斜め方向の縄文が冠される。下半部にナデを施す。

45は胴部に縄文が施される。縁帯文土器の深鉢胴部である。中津式から北白川上層に該当し縄文時代後期前半となる。

46の頸部はナデ仕上げの深鉢で口縁端部が欠損する。胴部にL Rの斜め方向の縄文が冠される。一乗寺K式に該当する。胎土は白色砂が少量入り、色調は黒い。

47は縁帯文の深鉢の口縁部である。北白川上層式にあたる。後期前半。

48は底部の破片である。平面形は円を呈するものと思われ、復元した底部径は7.6cmを測る。平底風で底の厚みが約1.0cm。

49も底部の破片である。外反する体部から深鉢の底部である。平面形は円で、直径が13.6cmを計測できた。底径が大きいので縄文時代中期の可能性がある。

50は浅鉢と考えられる。「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。最大胴径26cmを計測する。外面はナデ仕上げ。野畑遺跡出土の浅鉢に類例を見ることができる（泉2005）。

51は注口の破片で底部付近と考えられる。外面ナデ仕上げ。復元した胴径は17.3cmとなる。色調は黒褐色を呈し、河内の胎土である。

以上出土した縄文土器はかつて醍醐式土器と設定された土器型式の範疇で、縄文時代中期後半と考えられる資料である。また、縁帯文土器と呼ばれる土器もわずかながら含まれている。したがって縄文時代後期初頭の土器も含まれることになる。

当遺構からは石鏃、石匙などの石器は1点も見出すことができなかった。サヌカイトの剥片が数点のみである（写真2⑥～⑩）。

まとめと展望

高屋丘陵東域の石川氾濫原で新たな遺跡を確認することができた。遺跡は低地に形成された微高地に存在することが判明した。標高はT. P. 28mを測る。今後、地形分類の氾濫域の申請地に対して注意を要する結果となった。

改めて、今回の発掘調査で明らかになった点を以下にあげると、

- ①縄文土器の出土から当該地の生活の痕跡は今から4300年前に遡ることが実証できた。当該地周辺の調査地で確認されている砂層は縄文時代中期以前であることが土層堆積で明らかとなった。

- ②土地の安定化は弥生土器の出土から今から1850年前の弥生時代後期後半であることがわかった。以降、砂の堆積が確認できなかったため洪水など自然災害はなかったようである。
- ③古墳時代の遺物は5世紀後半から6世紀代に集中するので、高屋丘陵に古墳が造営される時期に該当する。小片であるが磨滅もなく調査地の西側に居住地の存在が考えられる。出土した遺物の量からは大規模な集落であったとは考えられない。
- ④中世の遺物を含む土層は水平堆積であることから耕作地として現在まで継続する。

以上が古市鳥飼遺跡の成果である。

新規発見に伴う範囲確認の調査であったが、多くの成果を得た。発掘成果をもとに調査終了後の開発側との協議を行い、盛土による包含層、遺構の保護をお願いしたところ、開発業者の協力により遺構の全面保護が叶った。

羽曳野市域での縄文土器の出土例は多いとは言えず、出土した土器の位置付けと遺跡立地を南河内地域の遺跡と比較し、古市鳥飼遺跡の重要性についてまとめておきたい。

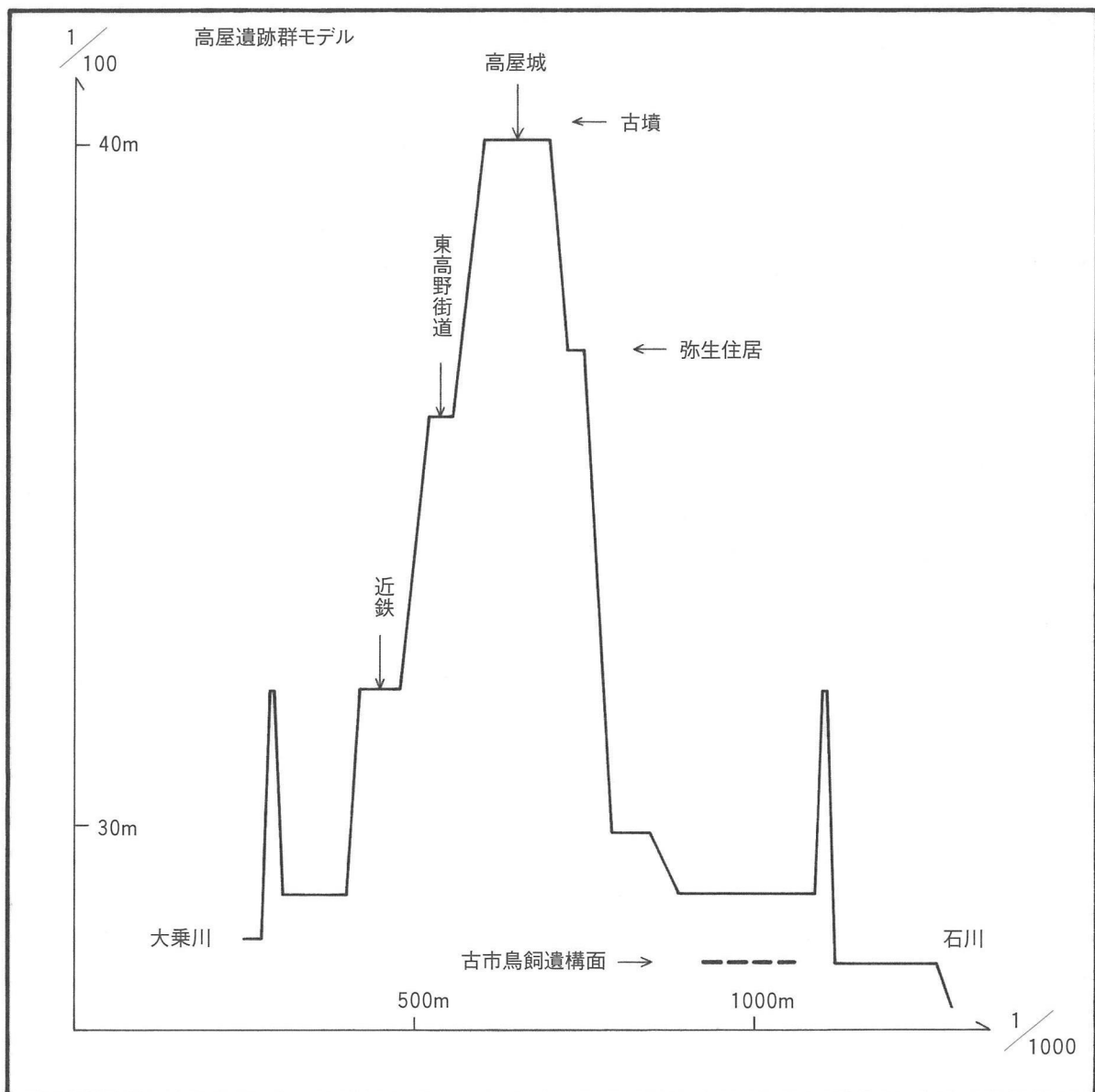


図20 高屋遺跡群

古市鳥飼遺跡の縄文土器について

出土した縄文土器を施文方法から大きく7種に分類する。

1群は、口縁部下部に連弧状文を施す特徴を有する。星田式と呼ばれる型式にあたる。胎土は粗砂を多く含み白色系の色調を呈する。図16の27の1点である。

2群は、平口縁に渦巻き文を配する突起をもつ。胴部には3条の垂下沈線と蛇行沈線。北白川C式3期と呼ばれる型式。鉢A類は図16の29、30、図10の40、図18の41、44、図19の49が該当する。その他、図12の50の浅鉢が伴う。胎土は粗砂を多く含み灰白色系の色調を呈する。

3群は、中津式に近い形態を示す図17の37が該当する。同破片に見られる文様やモチーフが中津式に比べて崩れている。中津式系というべきであろうか。胎土は細砂を多く含み灰褐色系の色調を呈する。

4群は、福田KⅡ式に該当する資料とする。胎土は粗砂を多く含み白色系の色調を呈する。図16の28の深鉢と図17の38の浅鉢が該当する。

5群は、深鉢の胴部に条線文を施す粗製土器。条線文系と称すべきもので北白川上層に位置づけられる。胎土に微砂を多く含み褐灰色系・橙褐色系の色調を呈する。図16の31～36が該当する。

6群は、縁帯文系と称する土器群である。縁帯文式土器は千葉豊氏に詳細に検討されているが、ここでは細分せずに大きく取り扱った。北白川上層に位置づけられた資料の一群である。胎土は砂粒を多く含み白色系の色調を呈する。図18の47が該当する。

7群は、一乗寺式系とする。図18の46が該当する。器壁の薄い胴部に縄目が細かく施されている。胎土は微砂を含み黒褐色系の色調を呈する。

8群は条痕文系の土器を一括した。粗製土器にあたる。胎土は微砂を含み黒褐色系の色調を呈する。図18の42、43が該当する。

分類した土器群を畿内の縄文土器編年にあてはめると以下の通りとなる。

1群は星田式に該当し、中期中葉となる。

2群は北白川C式3期となり、縄文中期末葉である。後期初頭の中津式そのものは確認できないが、中津式系の新しい型式から福田KⅡ式が存在する。

3群の中津式系としたのは後期前葉であるが中津式より新しく位置づけられる。

4群は北白川上層式に該当するので縄文時代後期である。続く四ツ池式（広瀬）、芥川式が本遺跡では認められない。

5群の条線文系の土器は北白川上層式になろうか。確実な北白川上層式は6群の突帯文系土器があげられる。いずれも後期となる。

7群とした土器は一乗寺K式系にあたることから後期中葉である。

8群は後期と考えている。

なお、図17の39、図19-48の底部、図19-51の注口土器は明確な特徴に欠け、分類した8群に帰属が不明である。底部の直径が小さいことから後期であろう。

最も古く位置づけた縄文時代中期中葉とした1群は、包含層からの出土であり今後の調査の進展で慎重に取り扱わなければならない。上記の土器群は2群から8群が同一層の出土であるが、各群の出土点数に偏りが認められる。

縄文遺跡の分布について

佐久間貴士氏が昭和54年（1979）に「縄文時代の大阪」と題し府下の縄文遺跡の地名表と分布図を作成し139ヶ所あげ、発展の特色を述べた。南河内においては①国府、②船橋、③林、④土師の里（以上藤井寺市）、⑤東阪田（羽曳野市）、⑥錦織、⑦錦織南、⑧寺池、⑨原田、⑩市村北、⑪外子、⑫甘南備、⑬浦川東（以上富田林市）の13遺跡をあげられている（佐久間1979）。佐久間氏は府下の縄文遺跡の分布から11群に地域を大別され、南河内は①～⑤をF群（国府・羽曳野群）、⑥～⑬がG群（西織群）の2地域に設定している。この内土器型式が判明しているのはF群で国府遺跡が縄文時代前期から中期前半にあたる北白川下層Ⅰ～Ⅲ式、鷹島式、船元式の土器が出土している。また、林遺跡、土師の里遺跡では中期から晩期、船橋遺跡では突帯文土器が報告されている。

石川の中流域にあたるG群では、錦織遺跡では北白川下層Ⅱ式、北白川下層Ⅲ式、大歳山式、鷹島式の土器が出土している。

河内地域については平成元年（1989）に宮野淳一氏が縄文後期文化の成立状況を検討した論考がある（宮野1989）。河内地域を景観的に分けると北群・中央群・南群の三ブロックとなり、それぞれ現在の北河内、中河内、南河内に該当する。氏は縄文中期後半に画期を求め、後期・晩期の遺跡数が汀線部に近い山麓扇状地や低湿地に活動範囲が拡大することを指摘している。遺跡の発展を石錘の出土から漁労の開始によるものとし、その背景は加曾利E式系の土器などから東日本系土器の流入を考えられている。

また、平成元年（1989）に「国府台地周辺の縄文時代」として石川と大和川との合流地点に位置する国府遺跡を拠点集落としている。石川谷に分布する寛弘寺、神山、三日市の遺跡では押型文土器が出土しているが、明確な遺構が確認されていない。したがって定期的な集落は前期になってからとしている。そして宮野氏は、西大井遺跡から出土した中期後半の土器がキャリパー形を呈し、胎土も

C14年代	時期区分		土器型式
B.C.13000	草創期		隆起縄文土器 爪形文土器
B.C.10000	早期		大川 神宮寺 高山寺 穂谷 石山
B.C.6000	前期	前葉	一乗寺南下層
		中葉	北白川下層Ⅰ
B.C.5000	中期	後葉	北白川下層Ⅱ 北白川下層Ⅲ 大歳山
		前葉	船元Ⅰ 船元Ⅱ 船元Ⅲ 船元Ⅳ 里木Ⅱ 北白川C
B.C.4000	後期	前葉	中津 福田KⅡ 北白川上層1 北白川上層2 北白川上層3
		中葉	一乗寺K 元住吉山Ⅰ 元住吉山Ⅱ
B.C.3000	晩期	後葉	宮滝 滋賀里Ⅰ
		前半	滋賀里Ⅱ 滋賀里Ⅲa 滋賀里Ⅲb 滋賀里Ⅳ
B.C.2500	弥生前期	後半	船橋 長原

表1 時期区分

在地のものでないことから東方からの搬入、外的な要因として先の論を補強している。（宮野1989）

その後、宮野氏は羽曳野市史第1巻のなかで羽曳野市域の縄文遺跡のの出土地点から①東除川流域の段丘面、②羽曳野丘陵東側の石川左岸に発達した段丘面、③羽曳野市東部の飛鳥の丘陵地帯の大きく3つの地域に分けられた（宮野1997）。

氏によれば平成3年（1991）、河原城遺跡から出土した縄文中期後半の土器を羽曳野市内最古に位置づけ、縄文時代前期の拠点集落を中心とした社会と異なり中期後半は中小規模のムラが点在していたと推定している。

今回確認した古市鳥飼遺跡は、宮野氏が区分した地域の②の羽曳野丘陵東側の石川左岸に発達した段丘面に当たる。厳密に言えば石川左岸に位置するが段丘面ではなく低地に形成された微高地に当たる。

もう少し、視野を広げて石川流域の縄文遺跡は過去の調査で、藤井寺市国府を中心とする地域で確認されている。表2は石川流域とその周辺の縄文遺跡を抽出した¹⁵⁾。遺跡の消長を確認するための時期区分を表1に提示した。

石川の左岸に存在する縄文遺跡は東西2km、南北3kmの範囲に

群	No.	遺跡名	所在地	立地	標高	早期		前期		中期		後期		文献	備考
						前	後	前	後	前	後	前	後		
		古市鳥飼	羽曳野市南古市	沖積地	28										
		古市	羽曳野市古市	低位段丘	29							●			土器棺墓
		城山	羽曳野市古市	沖積地	32						●				炉
		西浦東	羽曳野市西浦	沖積地	28						●				石匙・注口土器 有舌尖頭器
		東阪田	羽曳野市東阪田	低位段丘	47										有舌尖頭器
		翠島園	羽曳野市翠島園			○									土器棺墓
		高鷲中之島	羽曳野市高鷲			○									土器棺墓
		伊賀	羽曳野市伊賀	中位段丘	33							●			土器棺墓
		河原城	羽曳野市河原城	低位段丘	35						●				縦形石匙
		株山	羽曳野市株山	丘陵	200										石器のみ・落とし穴
		飛鳥千塚A4	羽曳野市飛鳥	丘陵	54										石匙
		国府	藤井寺市国府	段丘	16							●			竪穴住居
		林	藤井寺市林	沖積地	23							●			土器棺墓
		土師の里	藤井寺市道明寺		14						●				後期・晩期
		小山	藤井寺市小山3丁目												後期
		小山平塚	藤井寺市小山	沖積地											
		津堂	藤井寺市津堂	沖積地											
		西古室	藤井寺市西古室1丁目	段丘											
		西大井	藤井寺市西大井	沖積地											
		北岡	藤井寺市岡1、2丁目	段丘											
		船橋	藤井寺市船橋・北条町	沖積地											
		大和川今池	松原市天見西	中位段丘	10										後期・晩期
		難波大道跡	松原市天見西												有舌尖頭器・石匙
		南新町	松原市南新町												石匙
		東新町	松原市東新町												
		三宅西	松原市三宅西												
		上田町	松原市上田	沖積地											
		高見の里	松原市高見の里												
		新堂	松原市新堂	沖積地	22										晩期土器・石匙
		一津屋町	松原市一津屋												晩期の焼土塊(炬跡?)・石棒
		清堂	松原市丹南1丁目	中位段丘	29										石鎌・製作地 晩期流路
		立部	松原市立部												
		若林	松原市若林2丁目												
		玉手山	柏原市玉手町	沖積地	17										晩期の土器 土偶

表2 南河内縄文地名表

8か所確認できる。

表2から見出せる縄文時代中期の遺跡は羽曳野市では古市鳥飼遺跡の他、河原城遺跡があげられる。周辺地域では藤井寺市の西大井遺跡、船橋遺跡。河南町の神山遺跡、河内長野市の宮山遺跡、三日市遺跡である。この内、前代から続く遺跡は国府遺跡、神山遺跡の2遺跡から前期の土器が出土している。

南河内における最も古い土器は神山遺跡、三日市遺跡、小塩遺跡から出土している押型文土器である。続く土器は国府遺跡から出土した北白川下層式が確認されている。

南河内の縄文遺跡において、土器の出土量は縄文後期になってから増加する傾向にある。表2に提示した遺跡には、有舌尖頭器や石鏃などの石器の出土しか確認できない遺跡もあり狩猟採集民の活動範囲としても評価できよう。土器が出土する遺跡から考えられる活動拠点については、今回のように偶発的な遺跡の発見があるように、未発見の遺跡の存在も考慮せねばならないのである。発見される縄文遺跡の存在により遺跡の格差が見出せる可能性は十分にある。

表2の作成は石川流域の縄文遺跡を群として捉えるのが目的であった。力量不足もあってここでは提示できなかった。今後も引き続き、調査の進展とともに土器の型式差にみられる集団の移重や自然環境の中での遺跡の消長も今後の課題と考えている。

縄文時代の古市鳥飼遺跡

古市鳥飼遺跡の縄文土器は旧流路から出土している。土器の表面や断面には磨滅が認められないことから調査地の周辺に生活拠点があった可能性が高いと思われる。

遺跡の性格については小規模な面積の調査で得た情報から考えるには時期尚早なのかもしれない。あえて周辺の縄文遺跡から類推するのなら古市鳥飼遺跡の南に位置する西浦東遺跡が大いに参考となる。

大阪府文化財センターが調査した成果では西浦東遺跡は、縄文後期の北白川上層式2期の土器が大半を占める。調査担当者は屋外炉の存在から長期定住集落ではなく一時的な居留地であるキャンプサイトであった可能性を示唆している（大阪府文化財調査研究センター2002）。

土器から考えられる生活拠点になった時期が中期後葉～末葉（星田式、北白川C式）、後期前葉（中津II式、福田KII式）となり、古市鳥飼遺跡も同じような遺跡が考えられるとするならば自然環境によって生活拠点の移動が考えられる。

安田喜憲氏によれば「古市湿原では14c年代6920±115年の値が得られた層準の直上よりアカガシ亜属が急増し、コナラ亜属、クマシデ属、ニレ属、ケヤキ属などの落葉広葉樹が減少する。」という（安田1981、2007）。

6500～7000年を境にして西日本の各地では常緑広葉樹の拡大期が認められる。4000年前に始まったとされる気候の涼冷・湿潤化は、縄文晩期に入ってさらに低下が進んだことになる。

調査トレンチから直径20cmを超える自然木が包蔵されているのが確認された。表皮が付いたままであり、年輪も観察が可能な保存状況であった。最近の研究は自然科学的手法による動植物遺存体の分析と古環境の復元をもとに生態学観点から当時の食料獲得領域を想定が可能と聞く。今回サンプルとして3本取り上げたが、残りの自然木については包含層の保存がなされることになり、現況のままで残すことにした。

古市鳥飼遺跡の範囲について

最後に、古市鳥飼遺跡の範囲について述べておきたい。範囲確認調査の成果に基づく周知域は東西30m、南北35mとした。これは、調査地の周辺はすでに市街化して現状では広範囲の確認調査が困難となっていることによる。そこで過去に実施した調査成果から遺跡分の範囲を再検討することにした。

羽曳野市教育委員会が過去に南古市1丁目・古市5丁目周辺で調査を実施した現場は14件であり、調査地点の概要を表3に、調査位置を図21に明示した。主な成果があったのは3ヶ所である。⑨の地点（古市5丁目1275）で、今回の調査区と指呼の距離にある。調査は平成9年（1997）10月に実施し、瓦器片が出土している。

その他遺物が確認された地点は⑪と⑬の2ヶ所である。

⑪では平成12年4月12日（古市1389-1、-9）の調査では現地表面から1.1m下まで盛土で、その下で旧耕土を確認した。耕土は厚さ9cmで、耕土を除去すると褐灰色粘質土が厚さ16cm堆積していた。土師器皿（中世）が1点出土した。その下には8cmの厚さに灰色砂層があり、その下が灰白色砂礫層の地山であった。

⑬平成12年10月16日に古市4丁目1240-1で実施した調査では現地表面下1.2mで黄褐色粘土の地山となり、古墳時代の須恵器が出土している。須恵器は甕片が2点と少ない。

以上、限られた調査成果ではあるが今回調査した調査区の北西側に包含層が拡がる可能性は高い。

No	調査地	調査日	層序	遺物	地山高
①	古市1913-1	1994・4	造成盛土	なし	未確認
②	古市1388-1他	1994・9	盛土、耕土、灰茶色粘質土	なし	27
③	古市1831-4	1994.11	盛土	なし	未確認
④	古市1911、1912他	1994・11	攪乱	なし	未確認
⑤	古市	1995・6			
⑥	古市1409-1	1997・4	盛土、暗灰色粘質土、青灰色砂質土、暗灰色粘質土	なし	未確認
⑦	古市6丁目1249	1997・6	盛土	なし	未確認
⑧	古市1217	1997・7	盛土、茶褐色土、黄褐色土、青灰色粘質土	なし	未確認
⑨	古市5丁目1275	1997・10	耕作土、にぶい黄褐色土、明黄褐色砂質土、黒色土、黄灰土、灰黄砂質土、黄灰土、緑灰粘質土	瓦器	未確認
⑩	古市3丁目1325-5	1998・3	耕作土、茶褐色粘土	なし	未確認
⑪	古市1389-1	2000・4	盛土、耕作土、褐灰色粘質土、灰色砂	瓦器	28.6
⑫	古市1412-2	2000・4	盛土、耕作土、暗青灰色粘質土、黄褐色粘質土、淡青灰色粘質土	なし	29
⑬	古市4丁目1240-1	2000・10	盛土、褐灰色砂質土、褐灰色粘質土	須恵器	28.7
⑭	古市4丁目1240-1	2000・10	盛土、褐灰色砂質土、褐灰色粘質土	なし	28.7

表3 調査地一覧

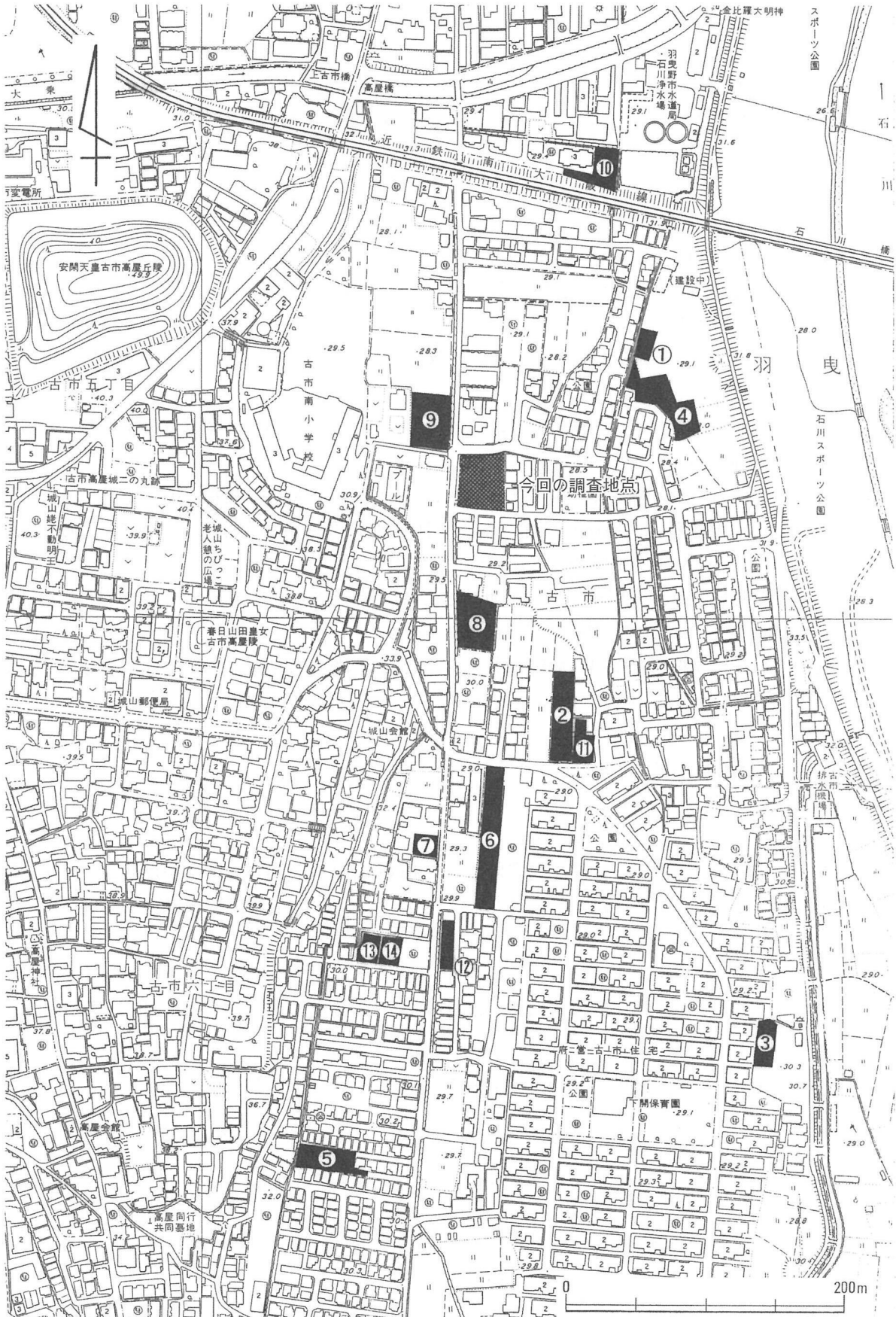


図21 調査位置図 (番号は表3に対応)

付記

市民への古市鳥飼遺跡の周知は羽曳野市広報11月号で紹介した。出土した縄文土器については羽曳野市鳥泉にある市立陵南の森総合センターの歴史資料室にて公開した。展示は平成22年11月9日から12月26日までの短期間ではあったが、出土遺物活用の一環として速報展を実施した。今後、調査資料が多く活用されることを願う。

註)

- ①瓦器片、須恵器の甕片等が出土した。
- ②小字は昭和60年発行の羽曳野市史料編別巻に所収されている羽曳野市域大字・小字図および大字・小字詳図（明治22年土地台帳）による。なお、遺跡発見については羽曳野市教育委員会から9月1日付け（羽教生社第2300号）で提出し、大阪府教育委員会から9月9日付け（教委文第11-13）で回答をもらっている。
- ③羽曳野市史料編別巻所収の羽曳野市域地形分類図（日下雅義原図）による。羽曳野市史編纂委員会編集で昭和60年に発行している。
- ④高屋丘陵全体は高屋城跡として周知され、城域から室町以前の遺構・遺物が出土する。高屋城下層遺跡として周知するか、高屋丘遺跡（古墳、散布地）、高屋遺跡（弥生、散布地）、城山遺跡（旧石器～・集落跡）の範囲拡張を将来的には検討しなければならない。
- ⑤白瑠璃椀の発見経過は、石田茂作1950「西琳寺白瑠璃碗」『考古学雑誌』36-4、藤澤一夫1950「安閑天皇陵発見の白瑠璃碗」『史迹と美術』207に詳しい。
- ⑥大阪府教育委員会の発掘調査で円筒埴輪が出土している高屋城1号墳、高屋城2号墳が発見されている。
- ⑦同範瓦は西琳寺跡から出土している。
- ⑧昭和45年に大阪府指定文化財に指定されている。
- ⑨16世紀末の土師皿の出土による。
- ⑩宝永元年（1704）に付け替えられている。
- ⑪昭和40年代に羽曳野市内在住の郷土史家によって土砂採集工事後の崩土のなかから土器が採集されている。市史にあるお旅山遺跡に該当する（羽曳野市史編纂室 羽曳野市教育委員会1986）。
- ⑫名称変更については『西浦東』報告書に詳しい。
- ⑬調査最終日の午後に調査区北壁の立割りの作業中に検出した。急遽、立割り部分を拡張し、東西幅1.5m、南北長さ2mのトレンチを調査区北西隅に設定した。図12の方位部分にあたる。遺構は宅地造成で損壊を受けないことを確認し、調査せず保存することにした。
- ⑭遺物の報告にあたり大野薫、岡田憲一、菊井佳弥、合田幸美、中川二見、宮野淳一、三好孝一の各氏にご教示を得た。
- ⑮表2は現在も作成進行中である。同表の作成にあたり、佐久間氏作成の地名表をベースに大阪府教育委員会発行の『大阪府文化財地名表』から縄文遺跡を抽出した。また、青木昭和、赤井毅彦、池田貴則、和泉大樹、芝田和也、角南辰馬、鍋島隆宏、平野淳、安村俊史、山田幸弘の各氏に遺跡の概況や掲載文献のご教示を得た。

参考文献

- 秋里籬里著『河内名所図会』（享和元年） 復刻柳原書店1975
- 石田由紀子2008「北白川C式から中津式へ - 縄文原体からの検討 - 」『関西の縄文中期末土器 - 北白川C式とその周辺 - 』（第9回関西縄文文化研究会発表要旨集）
- 泉拓良1982「西日本縄文土器再考 - 近畿地方縄文中期後半を中心に - 」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集
- 泉拓良2005「縄文時代」『新修豊中市史』第4巻考古編
- 今村啓爾1977「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌』第63巻第2号 日本考古学会
- 大阪府教育委員会1979『高屋城址発掘調査概要』Ⅴ
- 大阪府教育委員会1980『高屋城址発掘調査概要』Ⅵ
- 大阪府教育委員会1987『府営城山住宅建替に伴う高屋城跡（城山遺跡）発掘調査概要』
（財）大阪府文化財調査研究センター2002『羽曳野市西浦・古市所在西浦東遺跡 - 南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書』
- 大野薫1997「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- 佐久間貴士1979「縄文時代の大阪」『摂河泉文化資料』第18号
- 富井眞1998「北白川追分町遺跡出土の縄文土器 - 北白川C式の成立を考える - 」『京都大学構内遺跡調査研究年報1994年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 奈良国立文化財研究所1989『福田貝塚資料』
- 羽曳野市教育委員会1981『古市遺跡群』Ⅲ
- 羽曳野市教育委員会1986『考古学にロマンを求めて - 三木精一氏収集考古遺物展』
- 羽曳野市教育委員会1986『古市遺跡群』Ⅶ
- 羽曳野市教育委員会1990『羽曳野市内遺跡調査報告書 - 平成元年度 - 』
- 羽曳野市史編纂委員会1994『羽曳野市史』第3巻 史料編1
- 羽曳野市史編纂委員会1994『羽曳野市史』第7巻 史料編5
- 羽曳野市史編纂委員会1997『羽曳野市史』第1巻 本文編1
- 宮野淳一1983「河内における縄文後期文化の成立」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念考古学論叢』
- 宮野淳一1989「国府大地周辺の縄文時代」『石川左岸幹線管渠築造遺跡群他発掘調査概要』Ⅳ
- 宮野淳一1997「羽曳野丘陵と縄文社会」『羽曳野市史』第1巻本分編1
- 安田喜憲1981「花粉分析による気候環境の復元」『考古学ジャーナル』192
- 安田喜憲2007『環境考古学事始』洋泉社（1980日本放送出版協会）
- 湯浅利彦2003「縄文土器の位置づけ - 後期初頭中津式の成立過程を中心として - 」『矢野遺跡Ⅱ』第2分冊 徳島県教育委員会
- 和田大作2008「大阪府の中期末土器の概要・集成」『関西の縄文中期末土器 - 北白川C式とその周辺 - 』（第9回関西縄文文化研究会資料集）

【縄文遺跡表文献】

古市遺跡

羽曳野市教育委員会1990『羽曳野市内遺跡調査報告書 - 平成元年度』

羽曳野市・羽曳野市教育委員会1993『古市駅前再開発事業に伴う試掘調査報告書』

城山遺跡

大阪府教育委員会1987『府宮城山住宅建替に伴う高屋城跡（城山遺跡）発掘調査概要』

西浦東遺跡

(財)大阪府文化財調査研究センター2002『西浦東遺跡 - 南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書』

東阪田遺跡

大阪府教育委員会1980『東阪田遺跡 - 1979年度第1区の調査』

大阪府教育委員会1981『東阪田遺跡 - 1979年度第4区の調査』

羽曳野市教育委員会1980『東阪田遺跡 - 1980 - 』

翠鳥園遺跡

高鷲中之島遺跡

羽曳野市遺跡調査会1994『高鷲中之島遺跡調査報告書』

伊賀遺跡

羽曳野市教育委員会1989『古市遺跡群』 X

羽曳野市教育委員会1990『羽曳野市内遺跡調査報告書 - 平成元年度』

河原城遺跡

大阪府教育委員会1993『東除川改修に伴う河原城遺跡発掘調査概要』

株山遺跡

大阪府教育委員会1990『南河内遺跡群発掘調査概要』 III

飛鳥千塚A支群

羽曳野市教育委員会1996『古市遺跡群』 XVII

国府遺跡

京都帝国大学1918『河内国府石器時代遺跡発掘報告』

京都帝国大学1920『河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告』

大阪府教育委員会1971『国府遺跡発掘調査概要』

藤井寺市教育委員会1998『国府遺跡』

林遺跡

大阪府教育委員会1981『林遺跡発掘調査概要・III』

土師の里遺跡

大阪府教育委員会1979『土師の里遺跡発掘調査概要』

大阪府教育委員会1980『土師の里遺跡発掘調査概要・II』

大阪府教育委員会1981『土師の里遺跡発掘調査概要・III』

大阪府教育委員会1982『土師の里遺跡発掘調査概要・IV』

大阪府教育委員会1983『土師の里遺跡発掘調査概要・V』

大阪府教育委員会1984『土師の里遺跡発掘調査概要・VI』

大阪府教育委員会1985『土師の里遺跡発掘調査概要・VII』

小山遺跡

藤井寺市教育員会1997『石川流域遺跡群発掘調査報告』ⅩⅡ

小山平塚遺跡

津堂遺跡

西小室遺跡

西大井遺跡

宮野淳一1989「国府大地周辺の縄文時代」『石川左岸幹線管渠築造遺跡群他発掘調査概要』Ⅳ

(財)大阪府文化財調査研究センター1995『西大井遺跡』

大阪府教育委員会2003『西大井遺跡・縄文時代・後期旧石器時代石器群の調査』

北岡遺跡

船橋遺跡

森浩一1958「大阪府船橋遺跡出土の縄文土器」『古代学研究』第18号

『船橋遺跡の遺物の研究(Ⅱ)』

柏原市教育委員会1994『船橋遺跡』

(財)大阪府文化財センター2008『船橋遺跡』Ⅳ

大和川今池遺跡

大阪府文化財調査研究センター2001『大和川今池遺跡(その3・その4)』

難波大道跡

南新町遺跡

※松原市ホームページ

東新町遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

三宅西遺跡

清水梨代2006「三宅西遺跡出土の北白川上層式縄文土器について」『大阪文化財研究』第30号(財)大阪府文化財センター)

上田町遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

高見の里遺跡

松原市教育委員会1985「高見の里4丁目所在遺跡」『松原市遺跡発掘調査概要昭和59年度』

新堂遺跡

大阪府教育委員会2006『新堂遺跡』

一津屋町遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

清堂遺跡

大阪文化財センター1993『清堂遺跡 中央環状線丹南交差点立体化工事に伴う発掘調査報告書』

立部遺跡

※松原市ホームページ

若林遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

玉手山遺跡

柏原市教育委員会1985『玉手山遺跡 玉手中学校用地内埋蔵文化財調査』

大鳥池遺跡

狭山町史編纂委員会1967『狭山町史』第一巻本文編

勝部明生1988「狭山の石器」『大阪狭山市史要』

上野正和1992「狭山の考古学研究と私」『さやま誌』創刊号

寺ヶ池遺跡

狭山町史編纂委員会1967『狭山町史』第一巻本文編

新池遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

茶萁木北遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

ミヤケ北遺跡

大阪府教育委員会2010「ミヤケ北遺跡」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』14

植田遺跡

一須賀古墳群発掘調査委員会1996『太子カントリー倶楽部建設に伴う植田遺跡ほか発掘調査報告書』

喜志西遺跡

大阪府教育委員会1988『喜志西遺跡発掘調査概報』

喜志南遺跡

富田林市遺跡調査会1998『喜志南遺跡』（富田林市遺跡調査会報告12）

1985『富田林市史』第1巻

桜井遺跡

中野北遺跡

中野遺跡

大阪府教育委員会文化財保護課1981「中野遺跡発掘調査概要」『節・香・仙』第32号

太郎池遺跡

富田林市遺跡調査会1996『太郎池遺跡』

トユノ浦遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

新家遺跡

甲田南遺跡

大阪府教育委員会1981『甲田南遺跡発掘調査概要』I

錦織遺跡

北野耕平1951「錦織縄文遺跡について」『古代学研究』5号

渡辺誠1971「大阪府富田林錦織出土の縄文土器」『古代文化』第23巻第3号

大阪府教育委員会1985『錦織遺跡発掘調査概要』

錦織南遺跡

大阪府教育委員会1981『錦織南遺跡』

錦織南遺跡調査会1993『錦織南遺跡』

錦織南遺跡調査会1994『錦織南遺跡』Ⅱ

甘南備遺跡

富田林市遺跡調査会1997『甘南備遺跡』

浦川東遺跡

佐久間貴士1979「縄文時代の大阪」『摂河泉文化資料』第18号

外子遺跡

佐久間貴士1979「縄文時代の大阪」『摂河泉文化資料』第18号

寺ヶ池遺跡

佐久間貴士1979「縄文時代の大阪」『摂河泉文化資料』第18号

五軒家遺跡

富田林市史編集委員会1985『富田林市史』第1巻

西板持遺跡

大阪府教育委員会1995『柿ヶ坪・尾平・西板持・寛弘寺遺跡発掘調査概要』

芹生谷遺跡

※大阪府教育委員会ホームページ

神山遺跡

大阪府教育委員会1988『神山遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

谷川遺跡

大阪府教育委員会1995『谷川遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

寛弘寺遺跡

山城廃寺

大廻遺跡

西山昌孝1999「千早赤阪の文化財20国史跡赤阪城跡」『広報ちはやあかさか』4月号No.321

誕生地遺跡

千早赤阪村教育委員会1995『誕生地遺跡発掘調査概要Ⅰ』

向野遺跡

河内長野市編修委員会1994「向野遺跡」『河内長野市史』第一巻

烏帽子形城

河内長野市遺跡調査会1990『河内長野市遺跡調査会報』Ⅱ

三日市遺跡

三日市遺跡調査会1988『三日市遺跡調査報告書』

三日市北遺跡

高木遺跡

河内長野市編修委員会1994「高木遺跡」『河内長野市史』第一卷

宮山遺跡

河内長野市教育委員会1998『河内長野市埋蔵文化財調査報告書』XV

小塩遺跡

河内長野市教育委員会1993『河内長野市埋蔵文化財調査報告書』VIII

河内長野市教育委員会1999『河内長野市埋蔵文化財調査報告書』XV

河内長野市教育委員会2006『河内長野市埋蔵文化財調査報告書』XXV

河内長野市教育委員会1993『河内長野市埋蔵文化財調査報告書』VIII

高向遺跡

大阪府埋蔵文化財協会1989『高向遺跡』

市町西遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

栄町東遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

大井遺跡

大阪府教育委員会2008「大井遺跡」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』12

昭栄町東遺跡

大阪府教育委員会2001『大阪府文化財地名表』

滝尻遺跡

河内長野市教育委員会2001『滝尻遺跡』

河内長野市教育委員会2006『滝尻遺跡』

菱子尻遺跡

大阪府教育委員会1973『菱子尻遺跡発掘調査概要』

寺ヶ池遺跡

河内長野市編修委員会1994「寺ヶ池遺跡」『河内長野市史』第一卷

尾崎北遺跡

河内長野市教育委員会2005『河内長野市埋蔵文化財調査報告書』XXI

喜多町遺跡

河内長野市編修委員会1994「喜多町遺跡」『河内長野市史』第一卷

島泉東遺跡

本遺跡は、平成14年に新規発見された遺跡で、羽曳野市島泉6丁目に位置する。遺跡の立地は、東除川によって形成された沖積段丘にあたる。段丘の西側には、かつて東除川から分岐する流路の痕跡が自然の凹地として残る。標高は22~26mで北側へ下降する緩慢な傾斜をもつ地形を呈する。地形分類図によれば遺跡の北300mには氾濫源が広大に拡がる。

周辺の遺跡には、島泉北遺跡が存在する。調査地点の西200mに広がる集落遺跡であり、島泉東遺跡と同じ沖積段丘に立地する。島泉北遺跡からは畿内第Ⅱ様式から第Ⅲ様式の弥生土器が出土しており、今後弥生時代中期の住居址などの発見が予想される。また、高鷲北小学校周辺の調査では瓦器が包蔵される井戸や溝が確認されるなど小規模な調査ではあるが、徐々に遺跡の様相が明らかになりつつある。今後、島泉北遺跡と島泉東遺跡の間を埋める資料の発見が予想される。

高鷲北遺跡の南東には「雄略天皇丹治高鷲原陵」として治定されている丸山古墳や平塚古墳が中位段丘上に存在する。丸山古墳は直径75m、高さ8mの円墳で、現状は二段築成である。周濠が巡るが、北側は後世による改変で拡張されており、南側も幕末の補修に際し造り直されていることが判明している。一方、平塚古墳は一辺50mの方墳で、高さ8mを測る。

現況の景観は明治18年(1885)において施工された修陵によって丸山



図22 調査区位置図

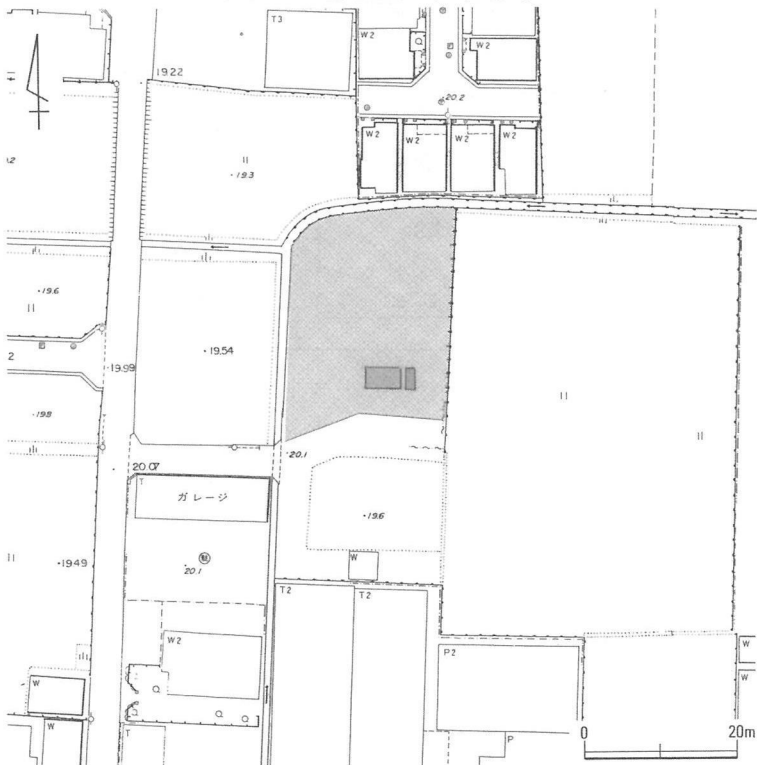


図23 調査区配置図

古墳に平塚古墳を取り入れて前方後円墳にしている。『河内名所図会』などには丸山古墳のみが雄略陵として描かれている。

調査にいたる契機と経過 (09-01)

今回の申請地は、島泉6丁目13-11にあたり平成14年度に新規発見された本遺跡の西縁辺部に位置していることから、平成21年12月21日に埋蔵文化財発掘の届出書を収受し(羽教生社2353号)、平成22年1月6日に事前調査を行ったところ溝状遺構が検出されたため、同日から9日まで調査を実施した。

平成14年度の調査では、東西に走る8条の溝、南北に走る2条の溝と古墳の周溝と考えられる埴輪が出土する溝を確認した。東西の溝の一部が、今回の申請地内まで伸びている可能性が考えられたため、予想される範囲に調査区を2ヵ所設定した。第1調査区は東西1.3×南北2.9mで最も深いところで1.6m、同様に第2調査区も東西4.7×南北3.1m、最も深いところで2mまで掘り下げた。第1調査区では東西に走る溝を1条検出し、第2調査区では東西に走る溝を2条と南北に走る短い溝状の遺構を検出した。溝はさらに調査区外まで伸びていることがわかった。

基本層序と検出遺構

第1調査区では、上層に0.4mほど盛土が堆積し、その下層に耕土、旧耕土、旧床土と続く。さらににぶい黄色粘質土、暗灰黄色粘質土となるが、これらの層を切り込んで溝1が形成されている。地山層は黄褐色粘質土と考えられるが、縄文時代ごろの古い堆積層かもしれない。現状、遺物の出土が

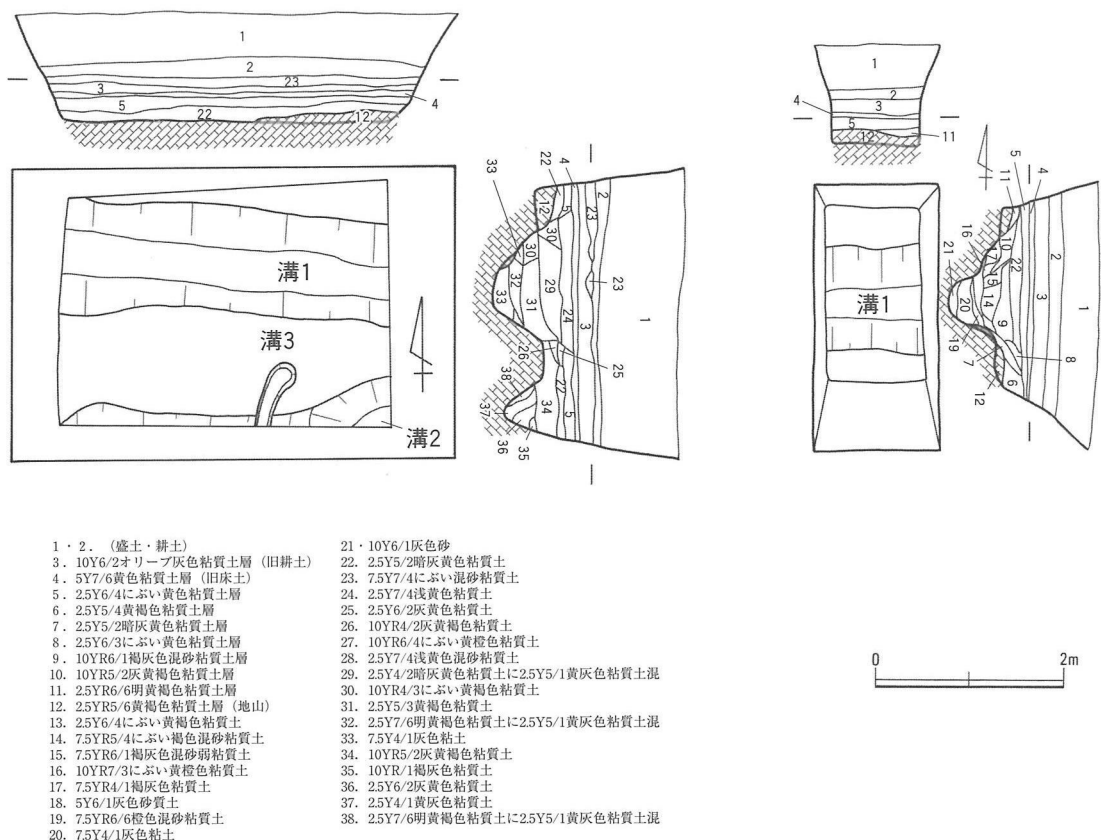


図24 調査区平面図・断面図

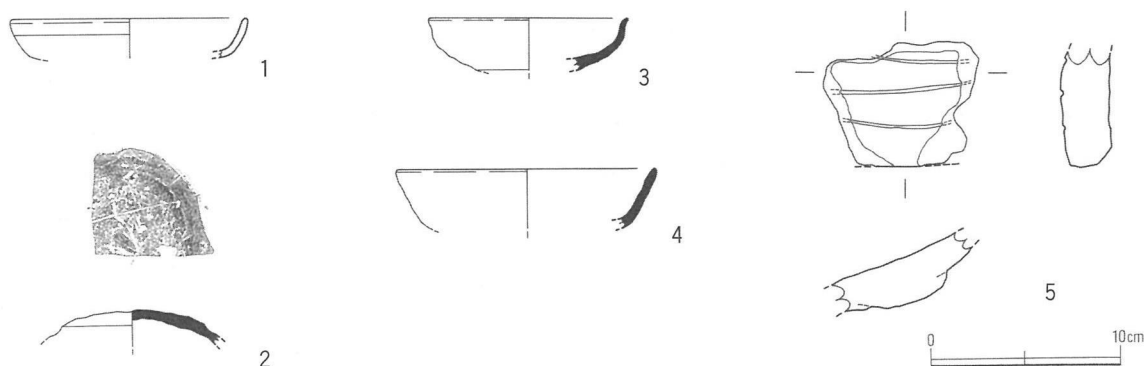


図25 出土遺物

ないので確証はない。

溝 1

東西に走る幅1.15m、深さ0.65mを測る、しっかりとした溝である。灰褐色系の粘質土及び砂質土と黄褐色系の粘質及び砂質土が堆積し、底には灰色の砂が堆積していた。遺物も土師器の碎片のみでほとんど出土しなかった。

第2調査区はさらに盛土が0.85mと厚く堆積している。下層は耕土、にぶい橙色混砂粘質土、旧耕土、旧床土と続く。にぶい黄色粘質土、暗灰黄色粘質土を切って溝1を形成している。第1調査区からの延長部にあたる。

溝1の長さは調査区内で現状3.5m、幅は1.5m、深さ0.85mを測る。溝内の堆積は調査区1とほぼ同様である。

溝 2

調査区南側で検出した東西に走る溝であるが、調査区南側に接して発見されたため、さらに南に広がるものと考えられる。この溝は、地山層に近い灰黄褐色粘質土を切り込んで形成されており、溝1より古い溝であることがわかる。溝の幅は0.5m以上、深さ0.35mを測る、溝1と比べて狭小な溝である。堆積土は灰褐色及び黄褐色の粘質土で、かなり締まった堆積層であった。しかしながら溝からの遺物の出土はなく、掘削された時期については判然としない。

溝 3

調査区南側で溝2を切るように検出した、長さ0.6m以上、幅0.2m、深さ0.15mの短く浅い溝である。埋土からの遺物の出土は見られなかった。

これらの溝の形成順序は、溝2→溝3→溝1となる。遺物の出土が乏しいため、それぞれの時期については判然としない。

遺物

遺物の出土量は少なく、形象埴輪や須恵器片など図化できるものは数点しかなかった。1は土師皿の口縁部の一部である。復元口径12.2cmを測る。端部は丸くおさめ、内外面ともヨコナデが観察できる。色調は茶褐色を呈する。2～4は須恵器である。2は杯蓋の一部と考えられる。口縁部は欠損し

天井部の一部のみ残存する。天井部付近には調整は見られず、ヘラ記号と思われる線刻が存在する。内面には同心円状圧痕が見られるが、ヨコナデによって調整されている。色調は青灰色を呈する。3・4とも杯蓋あるいは高杯の身の部分かと考えられる。3は口縁部の一部のみ残存する。復元口径は10.3cmと小さく、口縁部外面には強いナデ調整が施され、若干段が生じている。色調は淡い青灰色を呈する。4も口縁部の一部のみ残存する。復元口径は14cmを測る。口縁部は長く伸び、端部は丸くおさめる。外面には自然釉がかかっており、内面はくすんだ灰色を呈する。5は鶏形埴輪の羽根の一部である。外面には横方向に1.5cmほどの間隔で線刻が施されて羽根が表現されている。やや厚みがあり、内外面とも薄い肌色を呈する。

まとめ

今回の調査によって、東西に走る2条の溝と、南北に走る短い溝状の遺構を発見した。溝1は幅及び深さともしっかりしており広範囲に形成された溝と理解することができるが、出土遺物に乏しいためその時期については判然としない。平成14年度の調査においても多くの溝が検出されており、農業的な要素も考えられる。またこの時の調査で東西に走る複数の溝に切られる形で古墳の周溝と思われる溝が発見され、中から埴輪が発見されている。この埴輪は、黒斑をもつことから5世紀前半ごろと位置付けられている。今回の遺物の中に鳥の羽根の一部と考えられる形象埴輪片が発見されているため周辺地域に古墳群を形成していた可能性も考えられる。

今後の調査の進展によって、古墳未発見空白地における古墳築造の様相が解き明かされることを期待したい。

参考文献

2005 『羽曳野市内遺跡調査報告書 -平成14年度-』 羽曳野市教育委員会

郡戸東遺跡

羽曳野丘陵の西麓を流れる東除川左岸の中流域の低位段丘から中位段丘上に広がる東西約300m、南北350mの規模の遺跡である。昭和62年の開発に伴う調査で井戸や柱穴が確認されたため、新規に遺跡として周知された。さらに平成2年には遺跡の拡張を行った。これまでの調査で13世紀～14世紀の遺構や遺物が多いことから、中世を中心とした遺跡と考えられている。遺跡の北には檜山遺跡、南東には郡戸遺跡、南に河原城遺跡が位置している。これまで調査は少なく遺跡の性格は不明な点が多いが、大化改新以後、丹比郡に属し「郡」の字が残ることから、この辺りには同郡の役所が設けられていたのではないかと考えられている。

周辺の河原城遺跡や郡戸遺跡は中世の遺跡であり、本遺跡内にも中世の小規模な開発を示す垣内や辻などの小字名が多く残っていることから、これらの遺跡と併行して存在した地域であったと考えられる。

調査にいたる契機と経過 (10-01)

申請地周辺では、前年度に住宅開発に先立って道路部分の本調査を実施した。調査によって中世の遺構及び遺物が発見されたことから、個別の専用住宅についても遺構が発見される可能性が考えられた。これに従って平成22年4月21日（羽教生社2054号）で埋蔵文化財発掘の届出書を提出してもらい、平成22年4月26日に事前調査を実施したところ、遺構や遺物が密集して発見されたた



図26 調査区位置図



図27 調査区配置図

め、同日より30日まで調査を実施した。調査面積は約50㎡である。

基本層序と検出遺構

平成20年度に宅地開発に伴って調査を実施した道路部分の北側に接した一角にあたる。すでに耕土はめくられており遺構面が露出している状況であった。遺構は黄灰色粘質土を切り込んで形成されていた。

調査区全体を精査し遺構検出を行ったところ、直径0.1～0.2mほどの柱穴が調査区全面に広がっており、調査区東側では一辺0.7mほどの土坑、北東隅などでも一辺0.3mほどの土坑を確認した。遺構の埋土については、柱穴のほとんどは灰色系の粘質土であり、東側の土坑などは黒褐色系の粘質土であった。どちらの遺構からも中世の土器が出土するため、この時期の遺構と考えられるが、若干の時期差があるものと考えられる。

また中世の遺構が見られた遺構面の堆積層である黄灰色粘質土の中から5世紀後半の須恵器が発見されていることから、この堆積層が古墳時代のものである可能性が考えられる。

柱 穴

調査区全面に広がって発見されたが、密集している状況ではなく、さらに切り合っている遺構もほとんど確認できなかった。このため建物を復元することができなかった。柱穴は直径0.1～0.3m程度の大きさのものが大半であり、掘方の深さも0.2mほどと比較的浅い。またこれらの埋土は灰色粘質土が主体であることから、同時期に形成された遺構であると考えられる。ただ遺構からの遺物の出土量が少ないことや細片になっていることから柱穴それぞれの時期を特定することは難しく、土色以外は具体的な検証には至っていない。仮に同時期であるという前提に立つと、建物が密集、継続して形成されていたとは考えにくく、短期間で住居地を変えていた可能性が指摘できる。

土坑 1

調査区南側で発見された、東西1.1m、南北0.8m以上の大型の土坑である。埋土は黒褐色粘質土で、今回の調査でもっとも遺物が出土した遺構である。しかし、造成時に削平を受けていたのか、遺構の深さは0.15mほどと浅かった。遺構からは瓦器碗をはじめ土師質甕や白磁など豊富な遺物が見られた。廃棄場の可能性も考えられる。

土坑 2

調査区南東隅で発見された遺構で、東西0.35m以上、南北0.4m以上、深さ0.3mを測る。埋土の土色は土坑1と同じく黒褐色粘質土であった。遺構からの遺物の出土は少なく、瓦器片などが少量見られたのみであった。

土坑 3

調査区北東端で発見された遺構で、東西0.45m、南北0.55m、深さ0.15mを測る。埋土の土色は若干黒っぽい灰色系の粘質土であった。遺物の出土は無く、詳細は不明である。

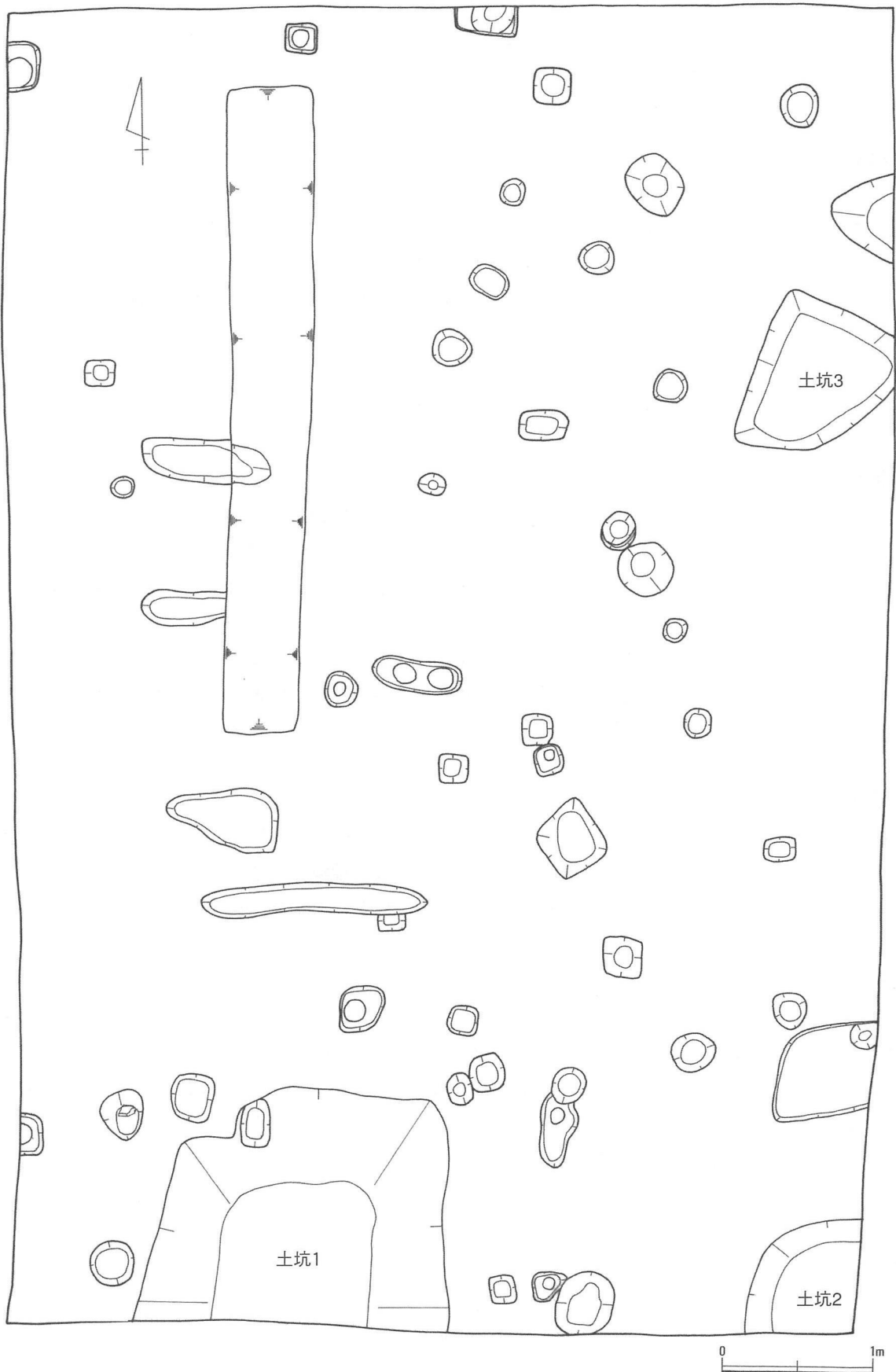


图28 调查区平面图

遺物

調査によって出土した遺物の全体量は少なく、また細片になっているものが多かった。しかしその中でも土坑1からは比較的まとまって出土した。出土した遺物はそのほとんどが中世の時期のものであった。

須恵器

1は把手付椀である。中世の遺構が築かれた基盤層内から出土した。全体の1/3ほど残存している。復元口径11.0cm、器高7.2cmを測る。把手部分は欠損しており、外面下部には取付け部分が見られる。体部はやや丸みをもちながら立ち上がり、口縁部は薄く作り上げられている。体部には2条の鋭い突線をもち、波状文等は見られない。体部外面上半から内面の見込み近くまでは回転ナデ調整が施され、体部外面下半から底部にかけては不正方向の手持ちヘラケズリが見られる。また底部はやや平らになる。色調については外面がやや黒っぽい青灰色、内面が灰青色、断面はセピア色を呈する。時期は田辺編年TK208型式の範疇に入るものと考えられることから5世紀中頃のもの判断できる。

土師器

2は甕の口縁部分である。小坑内から出土した。復元口径は19.4cm、残存器高5.0cmを測る。口縁部はくの字状に外反し、端部は面をもつ。端部の調整によってわずかに内側に張り出している。全体的に摩耗が激しく、調整等は観察できない。色調はレンガ色を呈する。詳細な時期はわからないが、奈良～平安時代ごろのものであろう。

3～5は土師質羽釜の口縁部の一部である。3・4は端部付近でくの字状に短く外反し、端部は丸くおさめている。5は端部付近でやや肥厚させ丸くおさめている。色調はそれぞれ3が赤褐色、4が灰橙色、5が黄茶色を呈する。鎌倉時代初期ごろのものか。

陶磁器

6は白磁の壺の口縁と考えられる。一部のみ残存する。口縁端部は短く外側に折り返し、端部はまるくおさめる。輸入陶磁器はこの1点のみであった。7は灰釉陶器と考えられる。外面の一部と内面には薄い黄緑色の釉がかかっている。底部は円形に削り出された幅3.1cmの高台をもつ。

土師皿

8～15は土師皿である。8は口縁部に特徴をもつ「ての字状口縁」と呼ばれるものである。復元口径8.8cm、器高1.2cmを測る。つくりにはやや粗雑さが感じられる。色調はクリーム色を呈する。11世紀ごろか。9～14については口径が8.3～12.8cmを測る、小中型品である。15は大型品で復元口径15.4cmを測る。器高も1.3～2.0cmほどである。細片になっているものや摩耗が激しいものなどがほとんどであったが、10のみが完形品であった。10については摩耗が進んでいるが、かろうじて口縁部の一部にナデの痕跡が確認できる。底部については指オサエと思われる凹凸の痕跡が見られた。

瓦器

16～21は皿である。復元口径8.6～10.4cm、確認できる器高は1.5cm前後である。土師皿と同様に摩耗が進んでいるが、内外面の口縁部にはナデ、外面底部付近には指オサエ、内面の見込み部分には暗文が確認できる。口縁部はゆるやかに内湾しながら立ち上がるものと端部を外反させるものがある。後者の皿については、口縁部の強いヨコナデによるものと見られる。22は捏鉢と考えられる。復元口

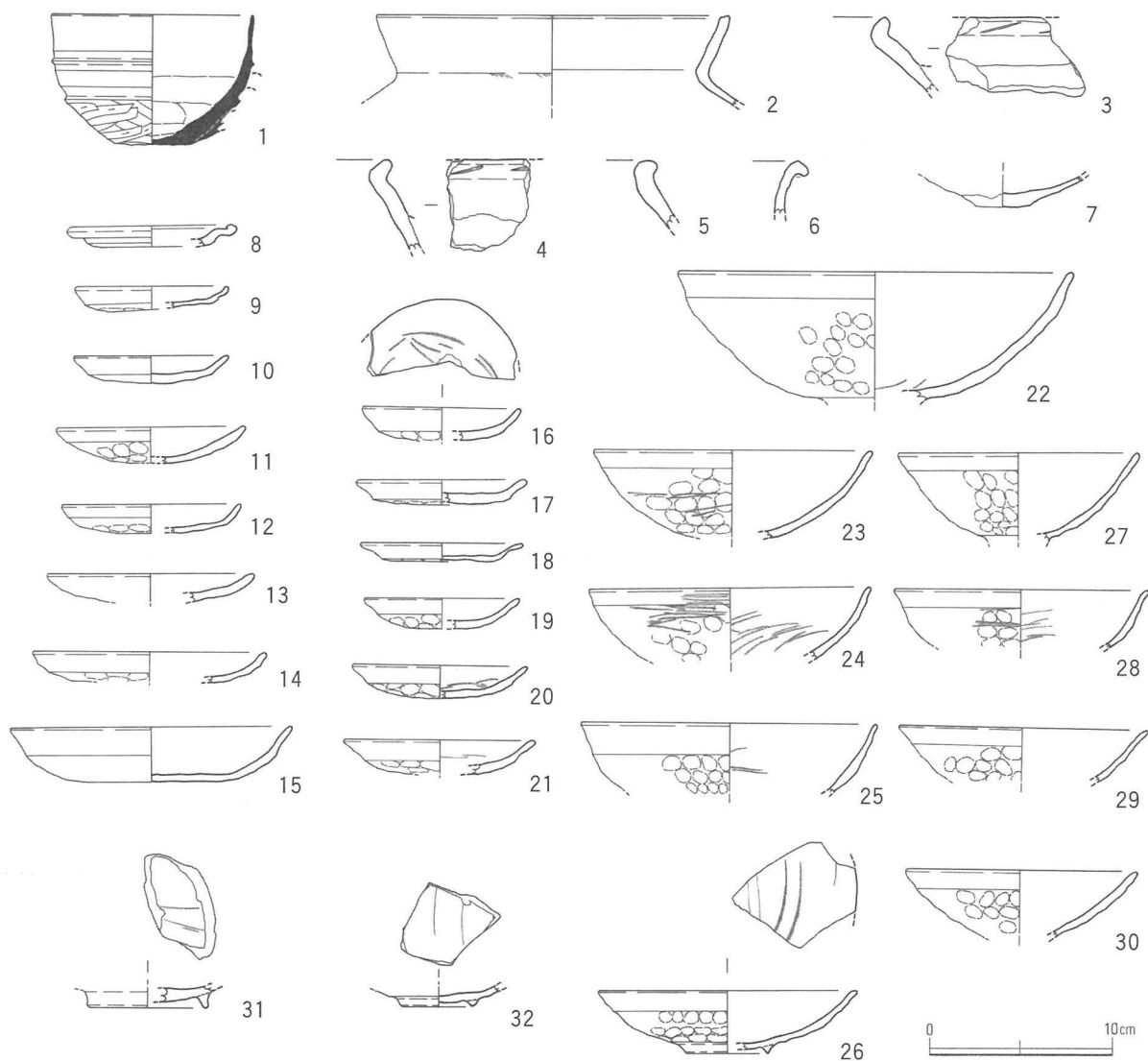


図29 出土遺物

径は21.7cm、残存器高7.1cmを測る。口縁部は逆ハの字状に立ち上がり、端部は丸くおさめるが、端部のヨコナデによってやや外反気味である。外面には指オサエ痕が残り、内面にはかすかに暗文が観察できるが、かなり摩耗している状況が看取できる。大型品であることや内面に播り目が認められないことなどから捏鉢と判断した。23～32は椀である。復元口径は12.6～16.2cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がるものがほとんどで、外反するものは見られない。内外面の口縁部はヨコナデ、外面は指オサエが施されている。23、24、27については外面にヘラミガキが見られる。また全体的に摩耗しているものの内面に暗文が施されているものが多く見られるが、暗文の省略現象がはじまり、密に施されているものは見られない。30～32については高台が観察できるものである。あと数点高台の破片が出土しているが、図化した遺物同様、断面が三角形状になっているものがほとんどで、暗文同様退化していることがわかる。これらのことから時期はおおよそ12世紀中ごろと考えられる。

まとめ

今回の調査で柱穴がまばらに広がっている状況が確認できた。切り合いもほとんどないことから短期間に形成された集落と考えることができる。前年度の道路部分の調査時にも、直径0.2mほどの小さな柱穴が大半を占めており、今回も隣接地ということもあって遺構の状況は同様の結果となった。土坑の遺物などから、おおよそ12世紀ごろに形成されたものと考えることができ、道路部分の調査時と大差はなかった。

これらのことから調査地周辺には12世紀ごろに小規模な村が形成されていたが、建替えの痕跡が明瞭に確認できないことから、短期間に集落が移動した可能性が考えられることを指摘しておきたい。

また中世の遺構を形成していた基盤層内から5世紀中ごろの須恵器が出土していることから、古墳時代以降の堆積層と考えることができ、今後、古墳時代の遺構が発見される可能性が高くなったと言えるだろう。

参考文献

- 1991 「郡戸東遺跡」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成2年度』 羽曳野市教育委員会
- 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

高屋城跡・城不動坂古墳

高屋城は石川左岸に広がる標高36～40mの河岸段丘である独立丘陵を利用して築かれた平山城で、南北800m、東西450mの規模をもつ。その構造は、丘陵全体を土塁と堀で三つに区切り南北に配置した連郭式である。本丸となるI郭は安閑陵古墳を取り込んで造られており、平時は使用しない非常時の避難場所であったようだ。

築城については、文献では応永年間（1394～1428）に畠山基国によるものとされているが、畠山政長以前の居城は若江城（東大阪市）にあったことや出土遺物の検討などから応仁の乱が終わった頃（1477年頃）であったと考えられている。その後、畠山氏の家督相続の内紛や三好氏との戦乱で高屋城の荒廃が進み、天正3年（1575）に織田信長によって焼討ちされ廃城となった。

これまで100ヶ所以上の調査が行われ、礎石建物や掘立柱建物などの住居跡、埴貼の特殊な構造をもつ建物、土塁や櫓台、堀など城に関連した施設、焼失した家屋や焼土層の痕跡など多くの調査成果をあげている。

昨年、高屋城の最も北側で東高野街道の一部と考えられる、通称「不動坂」と呼ばれる切り通しの道に面した場所で、高屋城期の土塁の下から6世紀中頃の横穴式石室を内部主体とした古墳が発見された。石川左岸での横穴式石室の発見は希少であり、貴重な発見であった。小字名をとって「城不動坂古墳」と名付けた。安閑陵古墳とは指呼の間に存在することや近い時期に築造されていることからその関係が注目される。

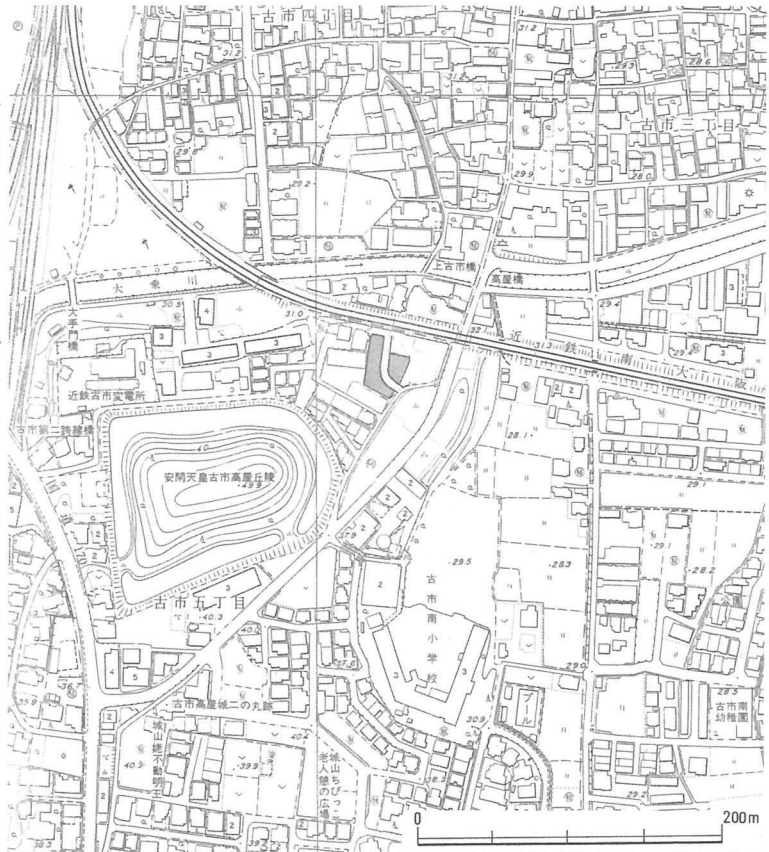


図30 調査区位置図

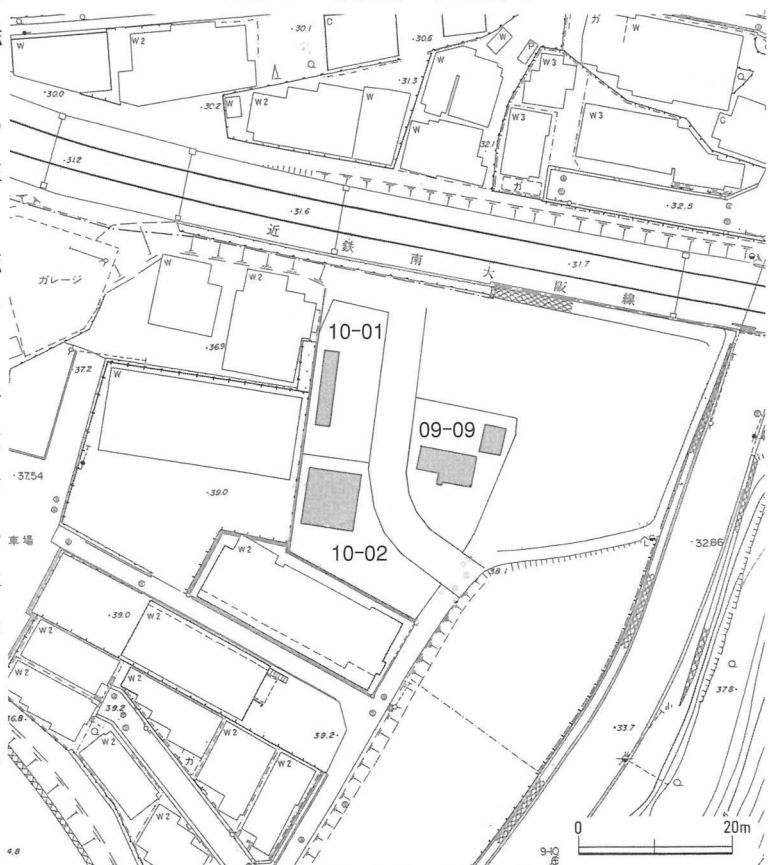


図31 調査区配置図

調査に至る経緯と経過 (09-09)

この発掘調査は羽曳野市古市5丁目における個人住宅建築工事に係る埋蔵文化財発掘届書（羽教生社第2458号 平成22年3月12日付け）にもとづき、平成22年3月15日から19日までの間に実施したものである。

調査地は高屋城跡の第1郭の北東部、高屋築山古墳（安閑陵古墳）の後円部中心から北東へ約120mの地点で、中位段丘がつくる低地との最大比高差12mほどの台地の北縁にあたる、北方向への眺望にすぐれた場所である。段丘崖の下には、江戸時代に開鑿された大乘川が流れ、一部で台地を侵食しており、これに沿って走る鉄道敷によっても、段丘崖の一部が切り取られている。

当該調査地は平成20年度に造成工事に伴う発掘調査が造成深度までに行われ、その際、土塁、建物等の高屋城関係の遺構とともに、墳丘は著しく削り取られているが、高屋城の土塁下に残った横穴式石室が検出されている（08-01調査）。

今回の発掘調査は、先の造成工事による造成地で計画された個人住宅建設に伴うもので、造成面下0.2mまでの住宅基礎掘削範囲を対象とした。造成面下の遺構確認のために既に行われている09-01調査では、不動坂古墳の墳丘南側の周溝の残存が確認されている。横穴式石室中軸の南への延長線以西の調査区では、平面形がやや直線的で西にゆくにしたがって南外方に開く傾向が認められることから、墳形は前方後円形である可能性も考えられていた。

今回の調査地は南周溝の東への延長線上にあたり、周溝の検出と平面形がより明らかになることが予測された。調査区は周溝予測範囲に建物基礎が重なる位置に調査区1（東西7.3m×南北4m）、調査区2（東西2.9m×南北3.6m）を設定した。遺構の掘り下げは、建物基礎工事が及ぶ現地地表下0.2mまでの範囲とした。

検出遺構

調査地は切土による造成が行われており、薄い造成土層の下には、いわゆる地山である砂礫から成る中位段丘構成層が上部をやや削られた状態で堆積する。遺構検出はこの茶色粗砂を主とする標高38.80m付近の地山層で行った。

検出した遺構は地山を掘り込んだ古墳周溝、土坑、小穴である。

古墳周溝SD1は、調査区1から調査区2にかけて検出した弧状の溝である。調査区2では近年の土坑SK2、SK3によって外縁部と北への延長部分が破壊されているが、平面形をほぼ明らかにすることができた。

溝の幅は内外縁とも多少の出入りはあるが、1.9mから2.1mでほぼ一定している。全体的には弧状を呈するが、調査区1の西半4mの間は、内縁の輪郭はやや直線的にみえる。断面形をみると内縁側は急傾斜で立ち上がり、外縁側はそれに比べて緩やかである。周溝内には内縁に沿って厚さ0.2m以上の灰褐色シルトの傾斜堆積があり、同様に外縁に沿って茶灰色シルト、茶褐色シルトの堆積がある。古墳築造後の墳丘側、および外側からの流入による自然堆積土と考えられるが、埴輪等の遺物はほとんど含まれない。

その上位にはこぶし大の円礫を多く含む、厚さ0.2m以上の灰褐色シルトがレンズ状に堆積する。これには埴輪片が多量に含まれる。円礫は大きさにもまとまりがあり、墳丘葺石、あるいは敷石の用材である可能性が強い。葺石の根石を思わせる大型の石材はみられない。また、周溝の内縁斜面には葺石を施した形跡がなく、これが施されたにしても施工範囲はこれよりもさらに高い位置にあったと考えられる。

これが人為的な堆積か、自然為によるものか、判断が難しいが、円礫や埴輪片は周溝中位のほぼ同一レベルに分布し、本来の位置である墳丘側への偏りが認められないこと、埴輪には細片となったものが多いこと、埴輪片と円礫が混在すること、などの点は、墳丘からの自然的要因による流入、崩落の結果とは考えにくいことを示している。この層にはごく少量ではあるが、飛鳥時代から中世の時期と考えられる須恵器（29）、土師器、瓦の小片が含まれており、築造後、ほぼ原形を保っていた墳丘に、この頃、改変の手が及んだ可能性がある。ここに含まれる組合式家形石棺の一部とみられる凝灰岩石材の破片は、石室内部からの持ち出しが、比較的遡るこの時期に行われたことを推測させる。

調査区2中央部の円礫を含む灰褐色シルト層中には、ほぼ完形の須恵器短頸壺1点（30）が、埴輪片と共に出土している。倒立状態でありここに置いたものとは考えられず、墳丘上、あるいは石室内部が本来の位置であったと考えられる。

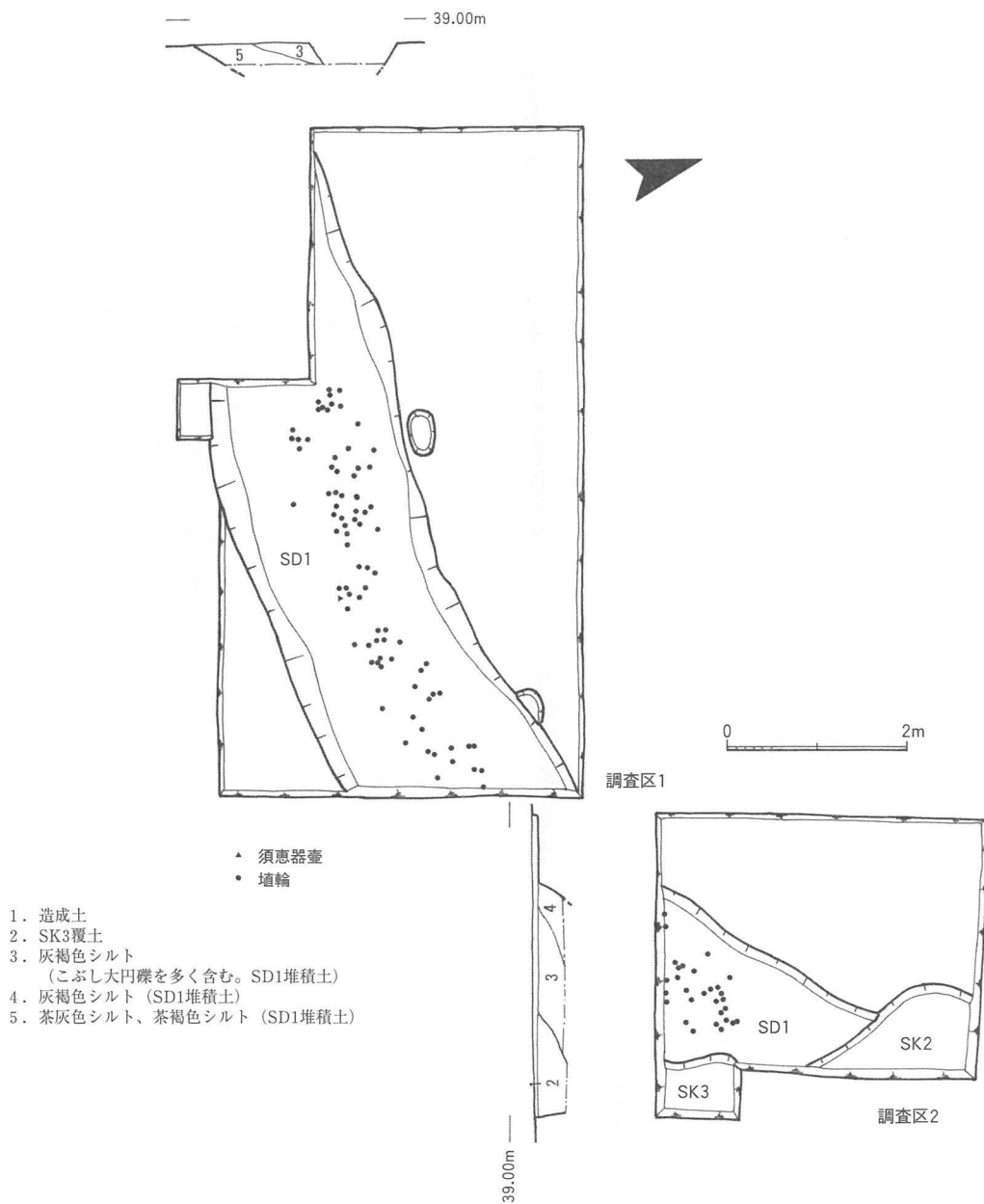


図32 09-09調査 遺構実測図

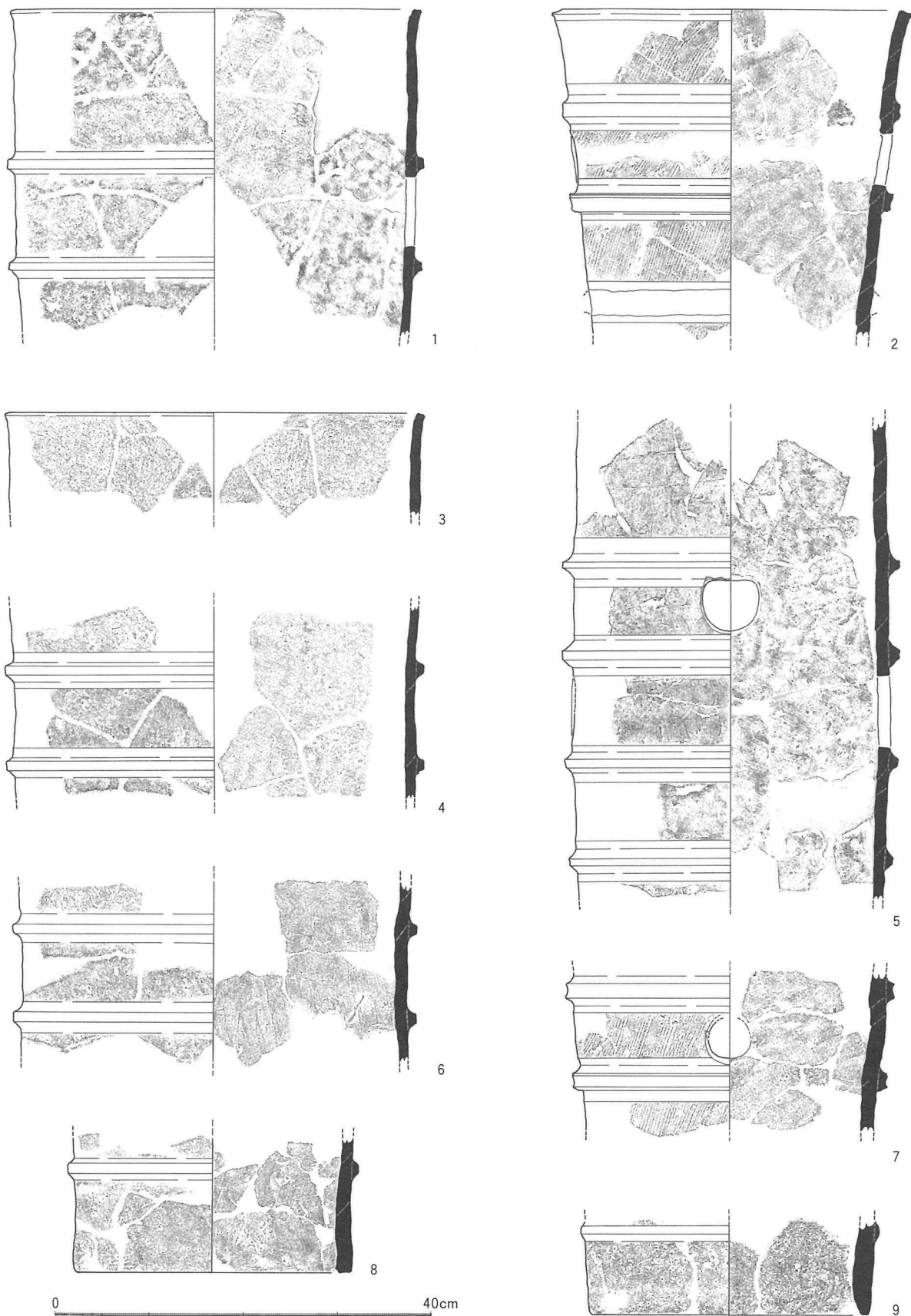


图33 09—09調査 遺物実測図 (1)

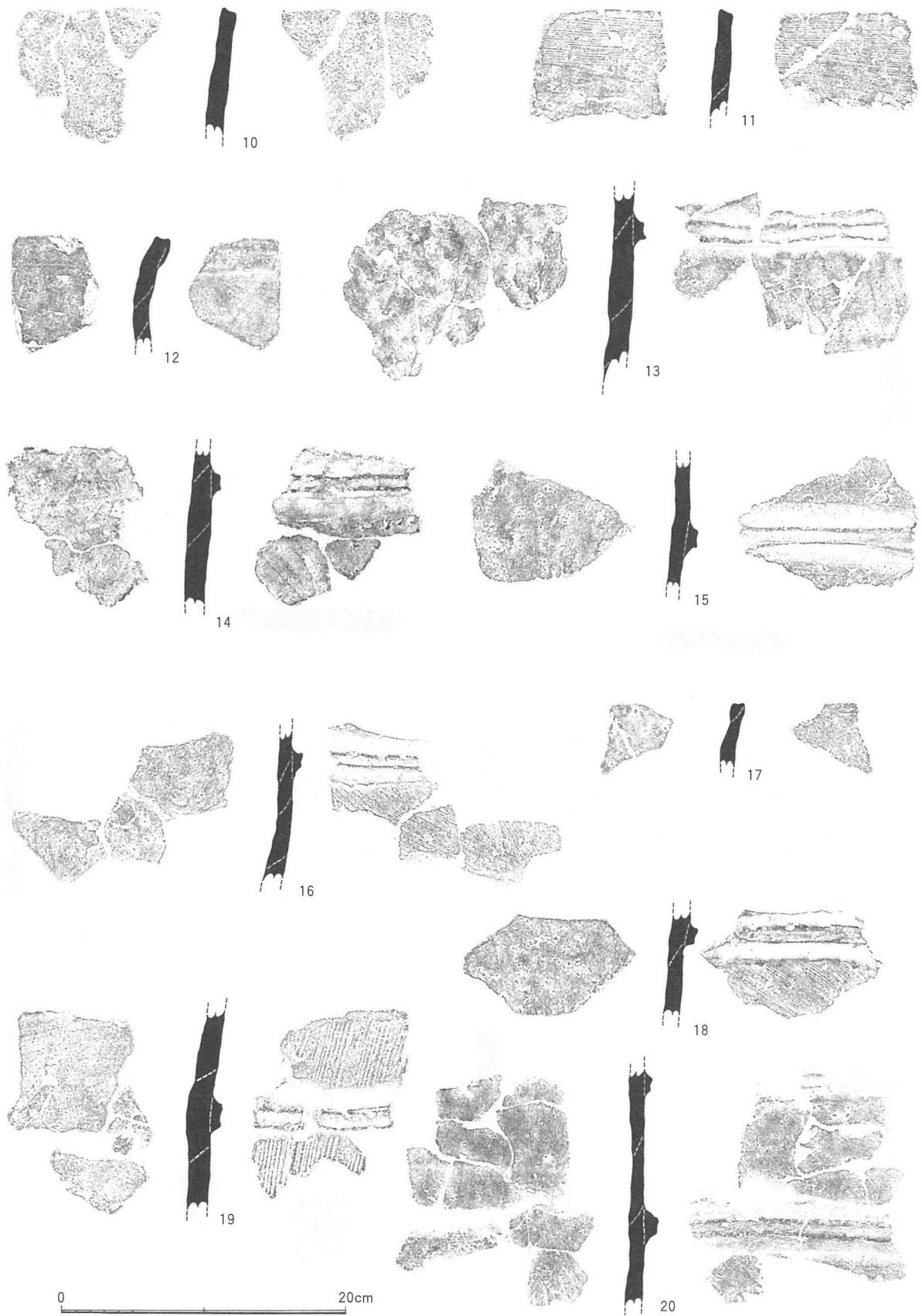


図34 09-09調査 遺物実測図 (2)

SK2、SK3や小穴は埋め土の状況からみて、近年に掘り込まれたものと考えられる。

出土遺物

整理箱6箱分の出土遺物には、埴輪を主に、須恵器、土師器、弥生土器、凝灰岩製石棺材片等があり、すべてSD1から出土している。

埴輪はすべて窖窯焼成で、円筒埴輪(1~20)と形象埴輪(21~28)があり、大半は円筒埴輪であるが形象埴輪も一定割合を占める。

円筒埴輪は(1、3、4、6、8、9)は軟質、明橙色。器表の残りが悪い。(1)の口縁端部は外傾し、内面側に強い横方向のナデがある。口径43.5cm。(2、7)は褐色を帯びたやや硬質の焼成で、外面の

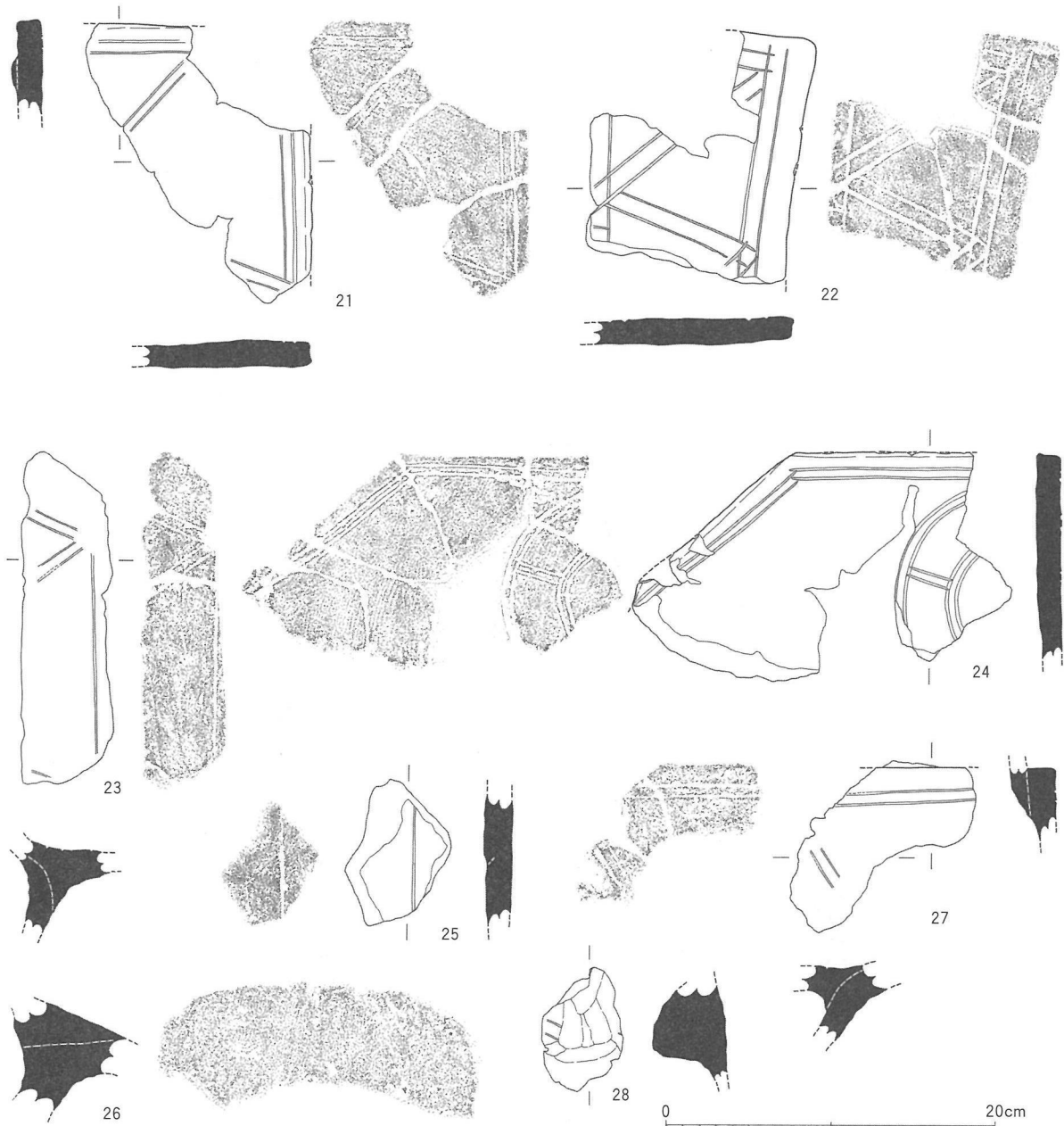


図35 09-09調査 遺物実測図(3)

タテハケは幅3mmほどの粗い目である。凸帯断面はM字形に近くしっかりしている。(2)は口径37.5cm。(5)は橙褐色で硬質。透かし孔は円形だが、残存するものは上部が凸帯位置にかかり円弧をなさない。外面調整に用いるハケ状工具は、目が不明瞭な平滑なものを用いている。凸帯と除く胴径33.6cm、残存高50.1cm。

いずれも二次調整を施さない円筒埴輪のV期に属するものであるが、凸帯の退化は進行していない。規格の上ではやや大型の部類に入るとみられる。

形象埴輪には盾形(21、22、23)、鞍形(24)、盾形か(23)、蓋形か(26)などの器財形埴輪と、盾持ち人物埴輪か(27)、顔の一部(28)などの人物埴輪がある。いずれも軟質で、淡褐色の(28)以外は、明橙色の焼成である。(28)は鼻の一部で、鼻背が通り、鼻尖を高くつくる。鼻孔は表さない。右の頬には2条の直線文を施す。

須恵器(30)は調査区1のSD1の埋め土中位から、埴輪片、円礫と共に出土した短頸壺。底部にはやや粗い回転ヘラケズリ、胴部にカキメが施され、肩部の一部に自然釉がかかる。ほぼ完形であるが、口縁部から頸部に至る人為的な波状の打ち欠きがみられる。加撃は内面側から3回なされ、加撃点の高さを口縁からの長さで表すと、向かって右から5mm、6mm、7mmと順に低くなる。おそらくこの順で加撃されたのであろう。出土状況からみて、横穴式石室内への副葬品、あるいは墳丘上での祭祀行為に用いられたものと考えられる。

須恵器(29)は坏Gの蓋で、つまみを欠失する。天井部の中位まで回転ヘラケズリが及ぶ。口径9.1cm。外面天井部に平行する2条のヘラ記号がある。7世紀中葉。

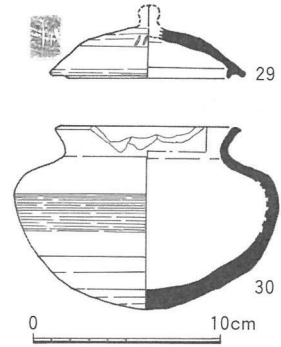


図36 09-09調査
遺物実測図(4)

調査結果

今回の発掘調査では、城不動坂古墳の南周溝と南東周溝を検出し、墳丘外部構造についての資料を得るとともに墳丘平面形の一部を明らかにし、埴輪、須恵器等の出土遺物を確認した。

周溝は残存幅2m前後で、削平部分を考慮した本来の幅は、仮に深さを1m程度としても、3mを大きく上回ることはないと推定される。周溝の平面形は円弧を描くが、調査区2の西半では内縁の輪郭が直線に近づいている。調査区1は横穴式石室の開口方向にあたる位置にあるが、墳丘を前方後円形と仮定すると、これは後円部から前方部への移行部分となるところであるが、その場合、くびれ部の幅がかなり広い前方後円形が復元される。

ほぼ正確に円弧を描く調査区1の東半から調査区2にかけての、遺構検出面での周溝内縁の円弧をもとに後円部の直径を算出すると、およそ18.2mとなる。また、調査区2の西端までの検出範囲全体をもとに推算すると、およそ19.5mとなる。今回の調査に基づくと、正円部分から求めた前者が、後円部径の実長に近い値を示していると考えられる。

周溝の底は09-01調査で標高38.30m前後であることが確認され、今回の調査区では完掘していないが同じ値が推定される。08-01調査で検出した横穴式石室の玄室床面の標高は39.00~39.10m、羨道前端の側壁最下段石材の底辺は39.10~39.20mにある。石室の前面は高屋城構築などによる破壊を蒙り、古墳の原型は不明であるが、石室入り口部から周溝までは5.5mの距離があり、床面は周溝底よりもおよそ0.8m高い関係にある。

この場合、i石室床面と同じ高さで墳丘第1段目を切り通す墓道が周溝の内縁まで延びる構造、ii墓道が南に向かって上昇し第1段目上の平坦面の外縁近くに至る構造、iii石室前に段差を設け第1段

目の平坦面に上がる構造、あるいは、iv周溝底より0.8mの高さまでを第1段目としてやや低い位置に平坦面を設け、第2段目を切り通すやや短い墓道がこの上面に通じる構造などが想定される。石室先端の側壁の状況、横穴式石室が墳丘内の奥深い位置にあることなどを考慮すると、iiiの石室入り口の前に段を設ける構造が比較的無理のないように思える。

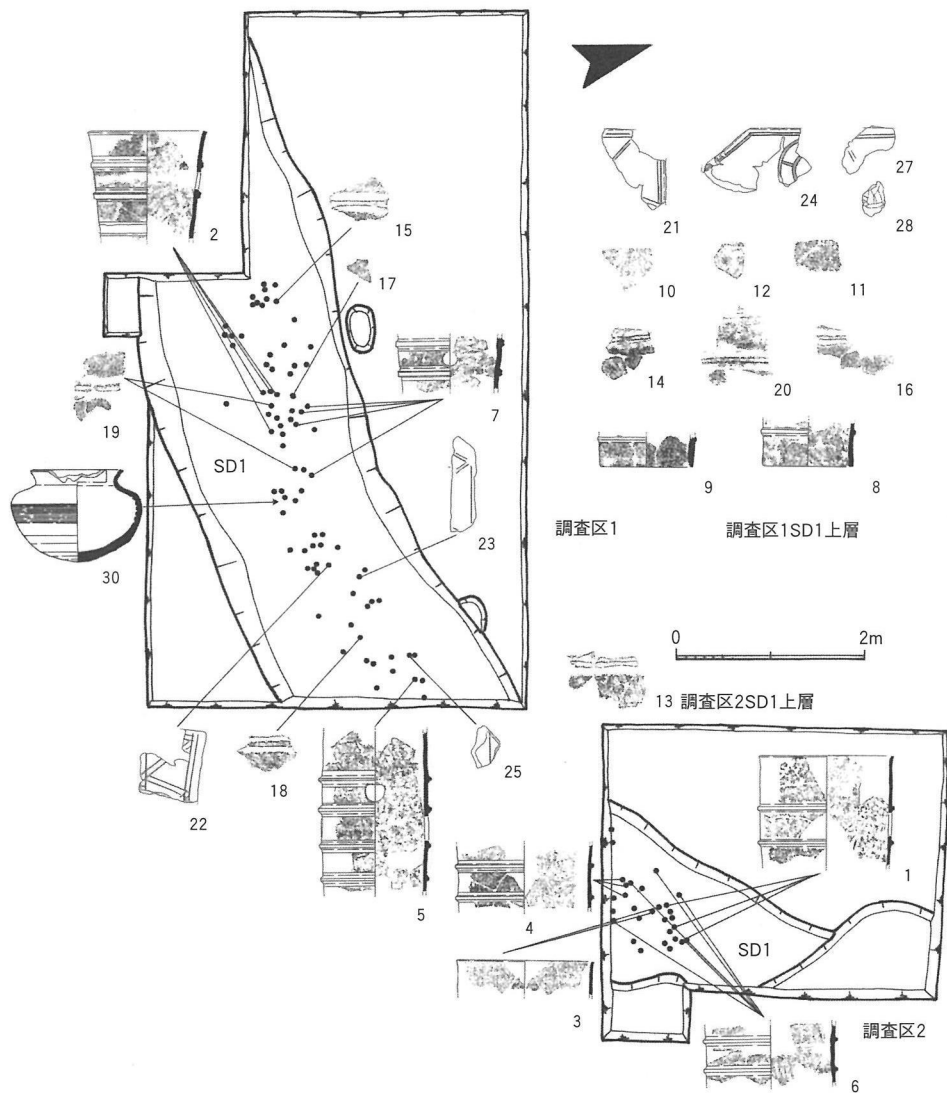


図37 09—09調査 主要遺物の出土位置

墳丘の外部構造については、溝内に残った円礫の存在から、葺石、または敷石などの施設が予想される。出土量はそれほど多いとは言えず、葺石の場合、墳丘斜面全体を覆うものであったとは考えにくいであろう。

埴輪はSD 1の全体に分布しており、本来の位置から最短距離での移動と考え、墳丘中段、あるいは墳頂部外縁に、連続的に配置されていた可能性が考えられる(図37)。形象埴輪は横穴式石室の開口部に近い調査区2に偏在する傾向があることから推すと、石室の入口付近の中段平坦面に、人物埴輪や盾形埴輪を主とした形象埴輪の配列がなされていた可能性がある。

調査にいたる契機と経過(10-01)

今回の調査地は、一昨年度に宅地造成に伴って調査を実施した場所である。調査によって新規古墳、城不動坂古墳(6世紀中葉、横穴式石室)を発見した。しかしながら調査後、古墳の保存協議を行っていたが残念なことに調整がつかないまま切土工事によって削平されてしまった。

その後、住宅工事にともなって道路敷設工事が実施されることが決まり、古墳の外周施設等が発見される可能性があるため確認調査を実施したところ、古墳周溝の一部を確認し、中から多量の埴輪が出土した。

今回の申請地は、一昨年度に宅地造成され4区画に分けられた北西区画にあたる。石室が発見されたすぐ西に位置する。また区画地の北側は既に大きく削り取られているため、その残り具合も含めて確認することとした。調査にあたって平成22年4月21日(羽教生社2055号)で埋蔵文化財発掘の届出書の提出を受けて、同年5月10日に事前調査を実施したところ、遺構を発見したため同日より14日まで調査を行った。調査面積は27㎡を測る。

基本層序と検出遺構

調査区は南北9.4m、東西約3mを設定し掘削を行った。すでに切土工事によって地山面まで削られており、堆積層は見られない。ただ切土工事の際に生じた若干の盛土が表面に堆積していた。調査区一帯はほぼ地山面であったが、北側隅に土坑状の遺構を検出した。遺構は茶褐色を呈し、中から土師器の小片が出土した。遺構は調査区外まで広がる様相を呈していたが、すでに北側は削平により急激

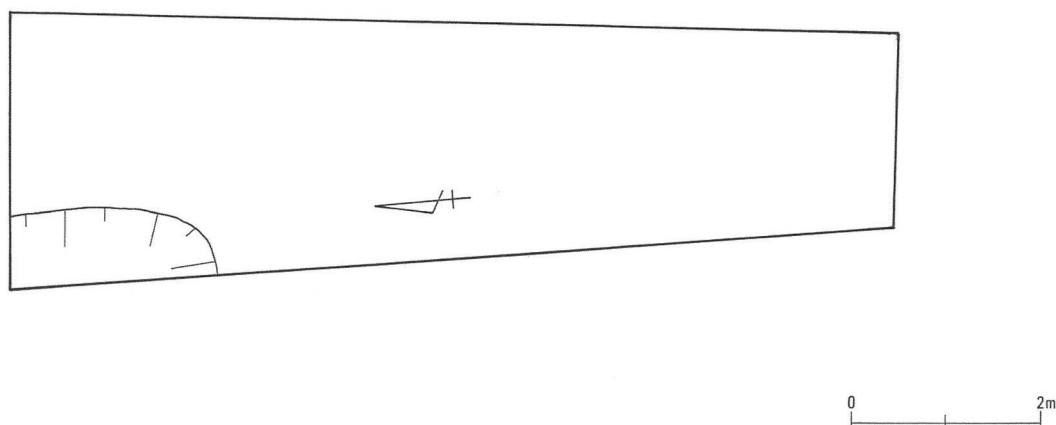


図38 調査区平面図

に落ち込み段差となっている。また西側は擁壁によって壊されていると考えられる。遺構は住宅基礎で壊されることがないため、確認のみとなった。また遺物については、遺構から若干出土したものと整地時の堆積土の中から発見されている。

土坑 1

調査区北西隅で検出した長辺2.2m、短辺0.8mの土坑状遺構である。遺構は大部分が調査区外にあるため詳しい遺構の性格は判断できない。遺構埋土は茶褐色の非常に堅い粘質土で、平成20年度の石室の調査で検出した墳丘盛土と非常に類似した土であった。建物基礎の関係で全て掘削することはできなかったが、埋土からは古墳時代前期の土師器が出土したため、この時期の遺構であることがわかる。

周辺地域では古墳時代前期の竪穴住居が発見されており、今回発見された遺構も竪穴住居の一部である可能性が考えられる。

遺物

遺物については、整地層内と土坑から土師器が数点出土している。埴輪類については城不動坂古墳に伴う遺物と考えられる。

弥生土器

1は壺の口縁部と考えられる。復元口径8.4cm、残存器高2.4cmを測る。逆ハの字状に立ち上がり、端部は丸くおさめる。色調は橙色を呈するが、全体的に摩耗が激しく調整等は観察できない。2は甕である。口縁部は短くくの字状に外湾しながらちあがり端部は面をなす。外面にはタタキ痕が観察できるが、内面は摩耗により調整は確認できない。色調は赤褐色を呈する。3は甕の底部である。外面にはタタキ痕が観察できるが、内面は摩耗している。色調は淡い赤茶色を呈する。2・3は庄内式土器と考えられる。

須恵器

4は壺の口縁部である。復元口径15.2cm、残存器高2.5cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部はまるくおさめる。端部外面に1条、頸部に1条の突線がめぐる。頸部の突線の下には波状文が施されている。色調は淡い青灰色を呈し、所々に自然釉が付着している。

埴輪

5～8は円筒埴輪である。突帯は高く突出し、断面が台形を呈する。また器壁も1cm以上あり、比較的しっかりしたつくりとなっているように感じる。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケあるいはナナメハケが施されている。ただ6については、外面にヨコハケがかすかに観察できるため、この1点については城不動坂古墳に伴う可能性は低いと考えられる。胎土には3～5mmほどの大きさの石英が見られる。色調については、5・8が淡い橙色、7が茶褐色、6が茶橙色を呈する。9～12は形象埴輪である。9・10は盾形埴輪かあるいは盾持人物埴輪の一部と考えられる。部位的には盾部と円筒部が取り付く場所と考えられる。9には盾部の線刻が見られる。色調はどちらも橙色を呈する。11・12については、小片であるため器種はわからないが、どちらも線刻が施されている。

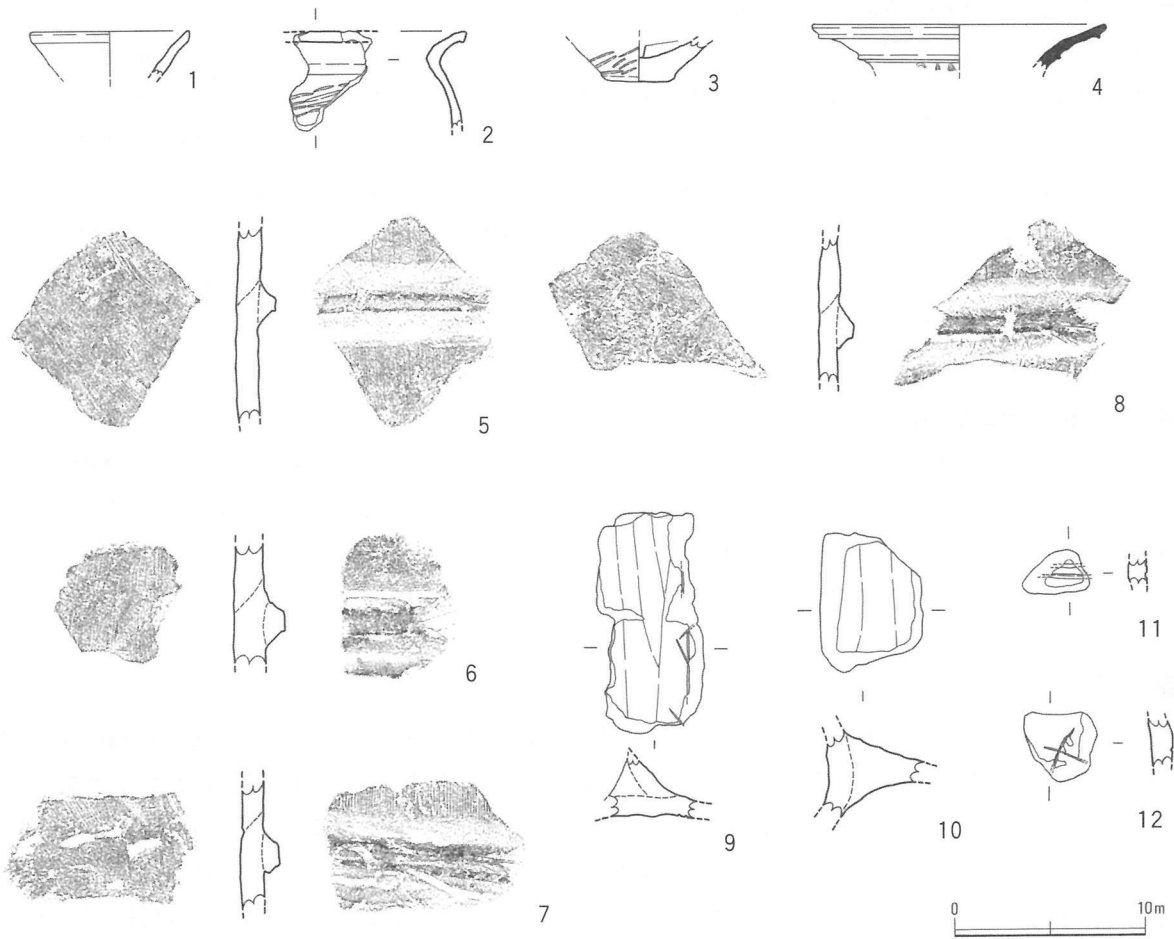


図39 出土遺物

まとめ

今回の調査によって、古墳に関する遺構は全く確認することができなかった。このため調査地が墳丘内であった可能性が考えられる。また調査区北側端で発見された遺構は、茶褐色粘質土の非常に締まった土であり、墳丘盛土で見られた堆積土と非常に類似していた。遺構からは土師器の小片が発見されており古墳時代前期ごろと考えられることから、この時期に形成されたものと言える。ただ遺構は、調査区の端で一部のみ発見されているため、その種類については判然としないが、竪穴住居の一部ではないかと考えている。周辺では庄内期から布留期に至る古墳時代前期の遺物が多数出土しており、とりわけ平成7年度には、本調査区から約100m南で古墳時代前期の竪穴住居が検出されている。このことから周辺一帯には、古墳時代前期の集落が広がっているものと考えられる。今後調査の進展によって、古墳時代前期の様相が明らかになるであろう。

参考文献

2010 『古市遺跡群XXXI』羽曳野市教育委員会

調査にいたる契機と経過（10-02）

今回の申請地は、一昨年度に宅地造成され4区画に分けられた南西区画にあたる。周溝が見つかり多量の埴輪が出土した昨年の道路部分の調査地と隣接する場所にあたる。またその時の調査で北東部分の周溝が円形に周ることは確認できたが、南西部分では円形に巡らず、前方後円墳の可能性も考えられた。南西区画は、まさしく周溝の検出状況によって円墳か前方後円墳か判断できる調査地であることから、平成22年4月23日（羽教生社2061号）の埋蔵文化財発掘の届出書を受けて、平成22年5月12日に事前調査を実施したところ、周溝が検出されたため、同日より21日まで調査を行った。調査面積は36㎡を測る。

基本層序と検出遺構

10-01区の調査地と同じく切土工事後の薄い表土層が堆積し、すぐに礫混じりの段丘礫層（地山層）となる。この地山面を掘り込んだ周溝を確認し、多量の埴輪や自然石が落ち込んでいた。周溝は調査区の北東端から南西端に向かって伸びており、これまでの調査で確認した周溝の痕跡をつなぎ合わせることによって前方後円墳になることが判明した。

周 溝

調査区のほぼ中心に北東から南西に向けて周溝を確認した。検出した周溝は長さ約6.5m、最大幅1.8mを測り、検出面から底までの深さが0.15mと浅く、大きく削平されている状況がうかがえた。

出土した埴輪は、ほぼ周溝全面に広がっていた。しかしながら全体的に細かく割れており、表面もかなり摩耗が進んでいる状況が見られ、密集しているものの遺物の状態は決して良好とは言えなかった。また埴輪に混じって直径10cm弱の小振りの石材が見られたことから、本来墳丘には葺石が葺かれていたことが推測できる。

周溝は調査区内を南西に向けて築かれており、さらに調査区外まで延びる様相を呈した。平成21年度の道路部分の調査及び09-09区の個人住宅に伴う調査では周溝が確認されていたが、なお墳形を確定するまでには至っておらず、円墳あるいは前方後円墳どちらかの可能性が考えられた。しかし今回の調査によって周溝が09-09区の円形に巡る周溝部分から屈曲して南西方向に延びることが確認されたことから、はじめて前方後円墳であることが判明した。

遺 物

古墳の周溝が検出されたが、他の遺構は見られなかった。遺物も周溝内から見つかった埴輪と若干土師器等が出土している。埴輪は細かく割れており、残存状況も良好とは言えない。

弥生土器

1は甕の体部である。口縁部及び底部は欠損している。外面には斜め方向のタタキが見られる。弥生時代終末の庄内式土器と考えられる。2は甕の底部である。外面にはわずかにタタキ痕が見られる。1同様に庄内式土器の一部と思われる。色調は1・2とも赤褐色を呈する。3も甕の底部と考えられる。底径は4cmを測る。内外面とも摩耗しており調整等は観察できない。色調は淡い赤紫色を呈する。

須恵器

4は杯蓋の一部である。復元口径は14cm、残存器高3.3cmを測る。稜線は回転ナデ調整によって、

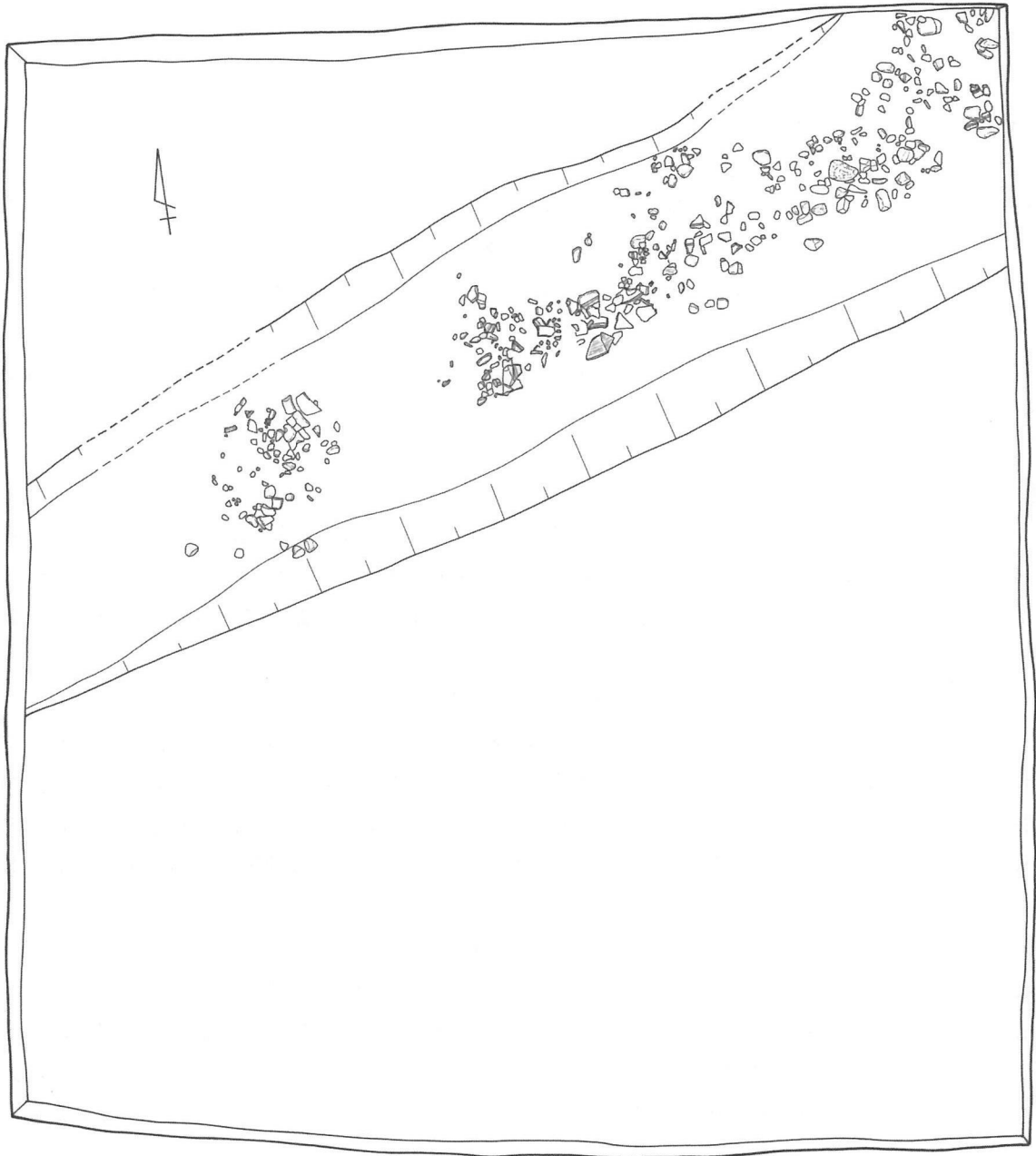


図40 遺構平面図

わずかに突出し、口縁端部は段をなす。時期は6世紀前半ごろか。

土師器

5は高杯の脚部の一部である。杯部及び底部は欠損している。全体的に摩耗しており、観察はできない。また時期等も不明である。

土製品

22・23は埴輪のように見えるが土管の一部と思われる。どちらも須恵質であり、青灰色あるいは灰紫色を呈する。22は、口径14cm、残存器高15.3cmを測る。口縁端部及び外面付近を丁寧に面取りされており、外面はタテハケ、内面にはナデが施され、粘土継目が内面で確認できる。23は復元口径23.8cm、残存器高8.1cmを測る。端部は丸みを持ちながら、やや尖った様相を呈する。外面はタテハケを施すが、タテハケを施す前に、幅2cmほどの幅を持つ板状の工具によってナデていたと考えられ、口縁部付近で斜めに工具の留痕跡が観察できる。内面についても横方向に板状工具によるナデが施されていることがわかる。

埴輪

6～13は朝顔形埴輪である。口縁部はハの字状に大きく外側に開き、端部はナデ調整により凹面となっている。内面はヨコハケあるいはナナメハケで、外面にはナナメハケを施している。13については突帯が断面M字状を呈する。色調は橙色あるいは黄色っぽいものが顕著である。破片が多く、全体像が理解できるものは全くなかった。

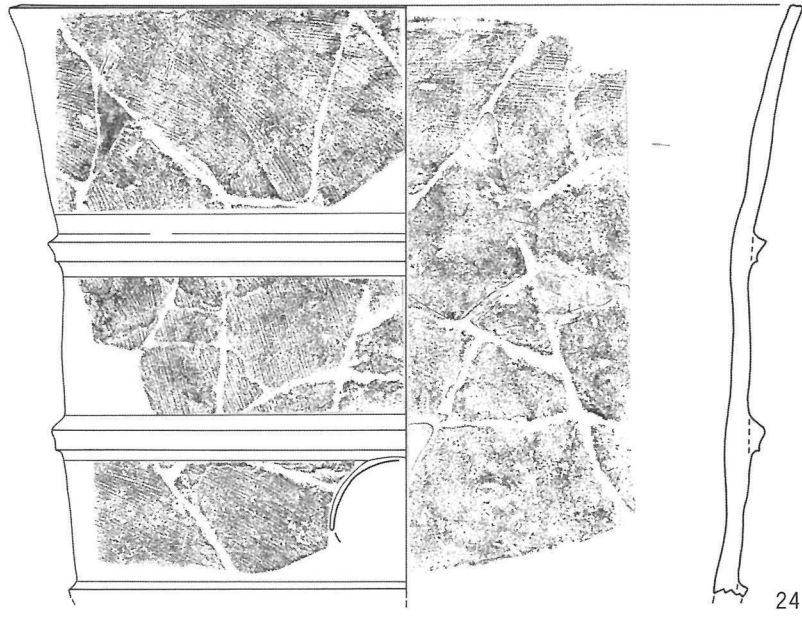
14・15は底部の一部である。破片であり調整等もわからない。

16～21は形象埴輪の一部である。16～19は鶏形埴輪の羽根の一部である。16は外面に右上がりに線刻が数本見られるが、他の破片については剥離や摩耗により線刻や調整等は全く確認できない。20は人物の鼻の部分と考えられる。正面向かって鼻の左側に2本の線刻が見られ、文面を施していることが理解できる。おそらく盾持人物埴輪の顔部の一部と考えられる。21は動物埴輪の尻尾の一部であろう。

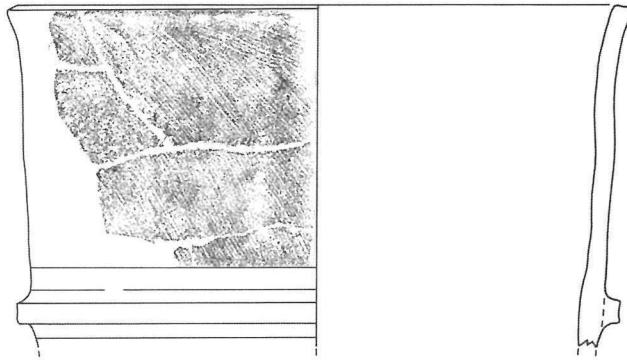
24～32は円筒埴輪である。24は今回出土円筒埴輪の中で最も大きく、やや楕円状に歪んでいるが、復元口径44cm、残存器高31.3cmを測る。口縁部はややハの字状に開き端部は若干段を呈する。突帯は断面がかろうじてM字状であるが、かなり崩れている。突帯間は10cmを測る。また口縁部と最上段突帯間は13cmある。外面はナナメハケ、内面は摩耗によりわずかに指オサエ痕が確認できる。25は復元口径31.6cm、残存器高18.1cmを測る。口縁部はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、端部は面をなす。突帯は台形状に高く立ち上がり、口縁部と最上段突帯間は16cmある。外面はナナメハケ、内面は摩耗しており観察できない。26～31は胴部のみ残存する。胴部径は27.3～35.1cmを測る。突帯は確認できるものは断面がM字状あるいは台形状が崩れたものが多い。外面はタテハケ及びナナメハケ、内面は摩耗により観察できないものが多い。27については板状工具によるナデ調整が内外面で観察できる。突帯間隔は9.5～12cmを測る。また26と27については須恵質であり、外面は薄い橙色、内面はやや濃い灰色を呈する。32は復元底径28cm、残存器高13.4cmを測る。最下段突帯から底部までは10cmある。全体的に摩耗が激しく、外面の一部に若干ナナメハケが確認できる。突帯は台形が崩れた様相を呈する。



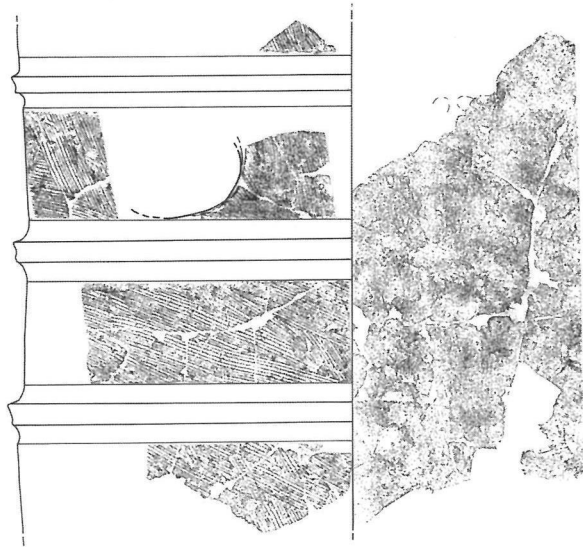
图41 出土遺物1



24



25



26

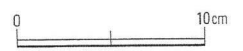


图42 出土遺物2

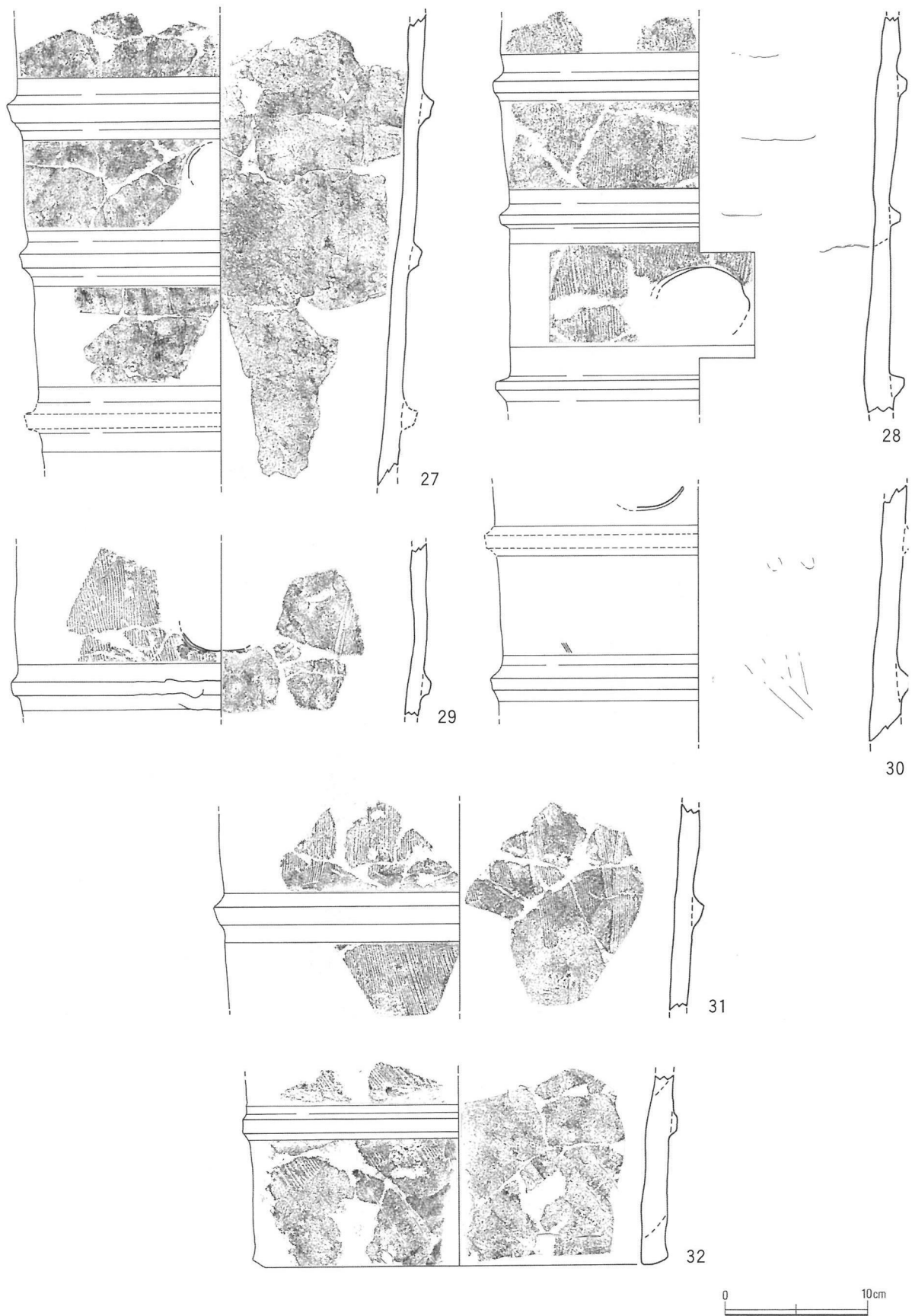


图43 出土遺物3

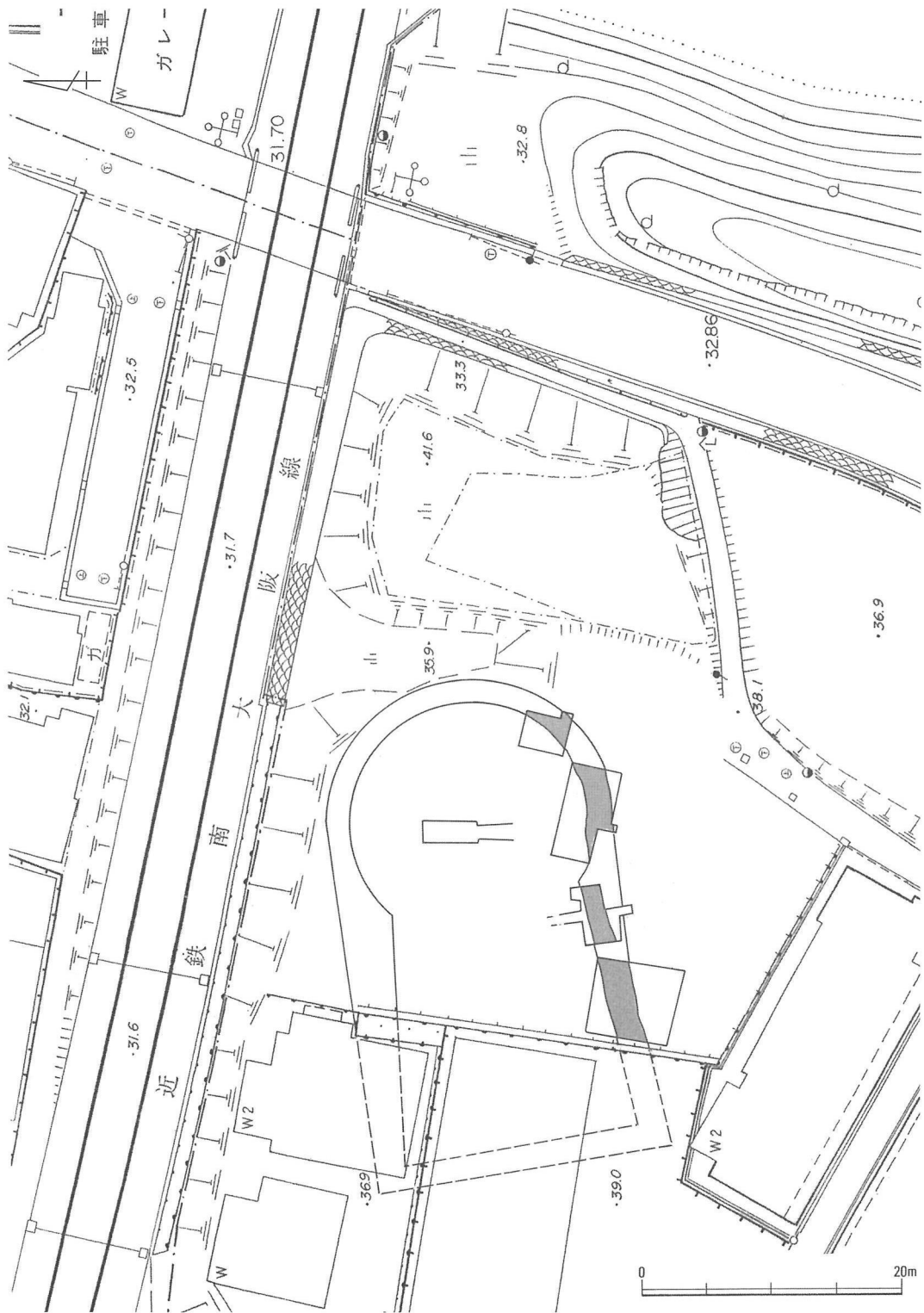


図44 古墳復元図

古墳の復元

平成20年度の調査では、墳丘が大きく改変されていることと調査期間の制約もあって石室中心の調査になり、墳形を確認するまでには至らなかった。翌年の道路部分の確認調査ではじめて周溝が残存していることが判明した。周溝内には埴輪や10cm程度の自然石が落ち込んでおり、円筒埴輪や形象埴輪などが見つかった。この時の調査で道路部分以外にも調査区を設定し周溝の確認のみを行ったが、道路部分（第1調査区）の東側の第3調査区及び第4調査区で弧を描くように周溝が確認された。一方第2調査区では周溝の延長が確認されたが、第6調査区では周溝を確認できなかったことから、周溝が円形に巡らない可能性が出てきた。このため墳形を円墳とする判断が難しくなっていた。

宅地化する4区画のうち、南側の2区画で周溝を確認できる可能性が考えられた。平成21年度の東南区画に当たる09-09区の調査では、同年度の道路部分の調査によって確認されていた周溝部分の延長が巡ることが確認されており、予想通り円形にまわる周溝を確認した。さらに本年度の西南区画に当たる10-02区の調査では、東南区画の09-09区で検出された円形に巡る周溝が、南西に屈曲して延びることを確認した。この調査によって本墳が前方後円墳であることが確認された。

古墳を復元するに当たって、すでに北側では近鉄南大阪線によって大きく削平を受けているため南側で検出した周溝から後円部の大きさを割り出した。その結果、直径が19m前後になることが明らかとなった。さらに前方部の一部が調査区外まで伸びているため、墳丘の長さを算出するにあたって、古市古墳群南西群に位置し、時期が近接する高屋築山古墳、ボケ山古墳、白髪山古墳、峯ヶ塚古墳、高屋八幡山古墳、水塚古墳、小白髪山古墳における墳丘長に対する後円部径の比率を参考とした。

各古墳の比率は、高屋築山古墳が墳長122m、後円部径78m、比率1.56、ボケ山古墳が墳長122m、後円部径65m、比率1.91、白髪山古墳が墳長115m、後円部径63m、比率1.83、峯ヶ塚古墳が墳丘96m、口縁部径56m、比率1.71、高屋八幡山古墳が墳長85m、後円部径50m、比率1.70、水塚古墳が墳丘長47m、口縁部径26m、比率1.81、小白髪山古墳が墳丘長46m、後円部径24m、比率1.91となる。これから時期や規模に近い小白髪山古墳の比率を当てはめると墳丘長がおよそ36m前後の前方後円墳になることが推測できた。さらに墳丘の復元の結果、前方部を南西にむけた主軸を持つことが判明し、西に近接する高屋築山古墳とほぼ同じ主軸になることもわかった。

まとめ

今年度の調査で東南区画の09-09区で検出された円形に巡る周溝に対して、南西に屈曲して延びる周溝を確認し、本古墳が前方後円墳になることが判明した。しかし前方部の1/3は調査区外に存在するため、全てが調査できたわけではないが、ほぼその概要が明らかになったと言える。

これまで5回にわたって調査を実施したが、判明した事項を列挙すると、①墳丘長は推定36m、②墳形は前方後円墳、③内部施設は両袖式横穴式石室、④棺は組合式家形石棺、⑤石室内遺物は須恵器（器台、壺、提瓶、高杯3）、土師器（甕・壺）、羨道内遺物（把手付椀）、⑥墳丘外面には円筒埴輪列及び葺石が存在し、周溝が巡っていた。⑦築造時期は6世紀中頃、⑧墳丘は大きく改変されていた。

以上、今回調査によって判明した事実をあげたが、今後周辺に存在する古墳との関係や古市古墳群の終焉について検討していくことが課題となろう。

参考文献

- 1991 『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
- 2010 『古市遺跡群XXXI』羽曳野市教育委員会

塚穴古墳

塚穴古墳は、羽曳野丘陵北端に近い標高64mの台地上に立地する、7世紀前半の築造とされる大型の方墳である。現在は宮内庁によって聖徳太子の弟である来目皇子埴生岡上墓として管理されている。

古墳の周辺を概観すると、小口山古墳、小口山東古墳などの墳墓や野中寺、善正寺跡の寺院、難波津と飛鳥を結ぶ官道である丹比道、野々上、車地、石曳遺跡などの飛鳥から奈良時代の集落遺跡が分布している。

この古墳は、宮内庁によって墳丘外形調査を周辺については本市教育委員会によって調査を実施され古墳および外周施設の内容が徐々に明らかになってきている。

平成17～21年本市教育委員会による調査によって古墳南面に築かれた外堤の規模や構造、構築技術が明らかとなった。このことにより、一辺の長さ約50mの方墳の周りに100m四方にも及ぶ外周施設が加わることになり、あらためてこの時期古墳がもつ規模の意味を再考させるものになった。

平成20年2月宮内庁陵墓調査室によって墳丘外形調査が行われ『書陵部紀要』第60号で報告されている。一辺53～54m、最大高約10mを測る3段築成の方墳で2段目テラス付近において凝灰岩による貼石状の外表施設が確認されている。埋葬施設については宮内庁所蔵の明治23年（1890）に作成された『石室略図』が公にされている。それによると石室は両袖式の石室で、玄室の平面は長さ約5.5m、幅約3.6m、羨道の長さ約7.6m、幅約1.8mとされている。石室の形態は、江戸時代すでに覚峰が指摘している岩屋山式石室の範疇に入るものと推測されるが、奥壁の上段が二石となるらしいなど特異な点があることも明らかにされている。

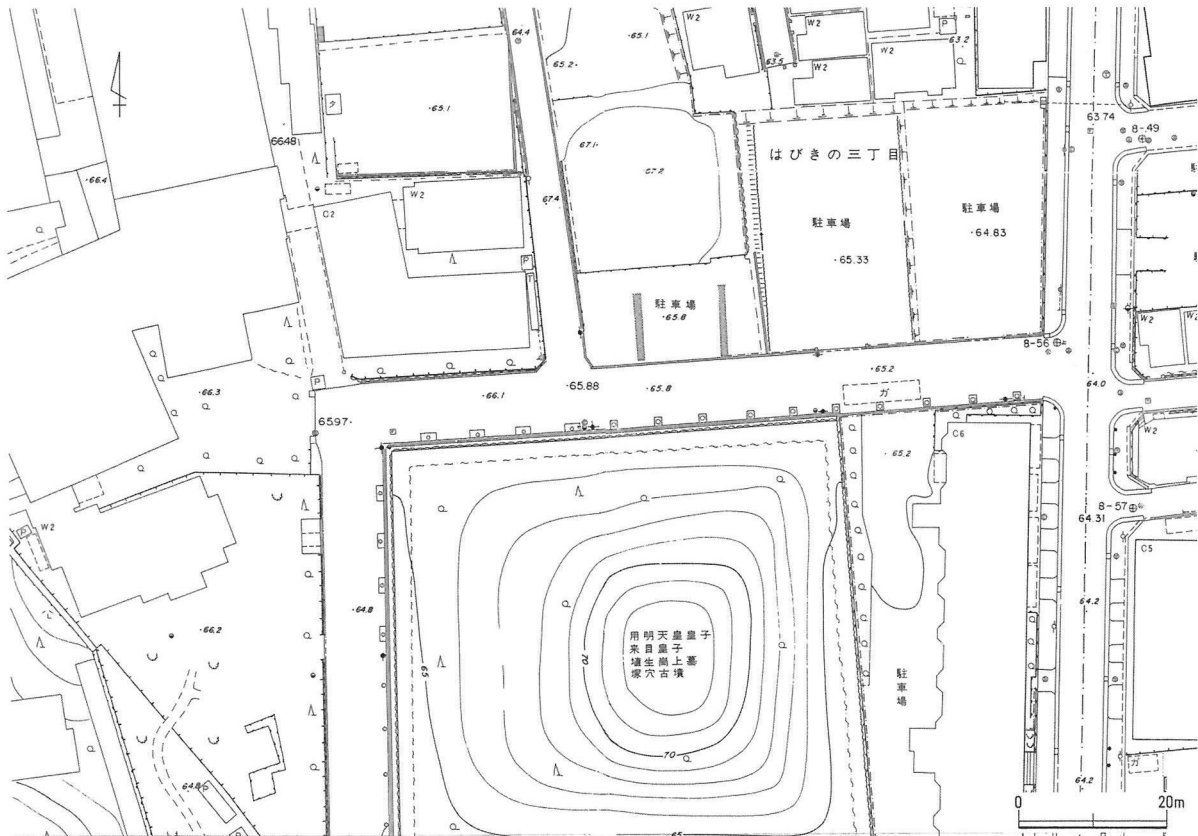


図46 調査区 配置図

調査にいたる契機と経過 (09-03)

調査場所は、塚穴古墳北側の道路を挟んだ駐車場部分にあたる。古墳北側一帯については、露天駐車場造成工事に先立ち、土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届出について（羽教生社2268号平成21年10月29日付）が提出されている。

今回の調査地は駐車場造成工事地区内であるが、工事は舗装工事のみで、表層以下には及ばないものの今後の保護策を講じる上で、遺構の有無や古墳範囲を明らかにする必要があることから、大阪府教育委員会と協議の上、古墳北側の外表施設確認のため、範囲確認調査として南北方向に2本の調査区（調査区1 9.5m×1.2m・調査区2 7.5m×1.2m 計18.5㎡）を設け発掘調査を平成22年3月1日から5日まで実施した。

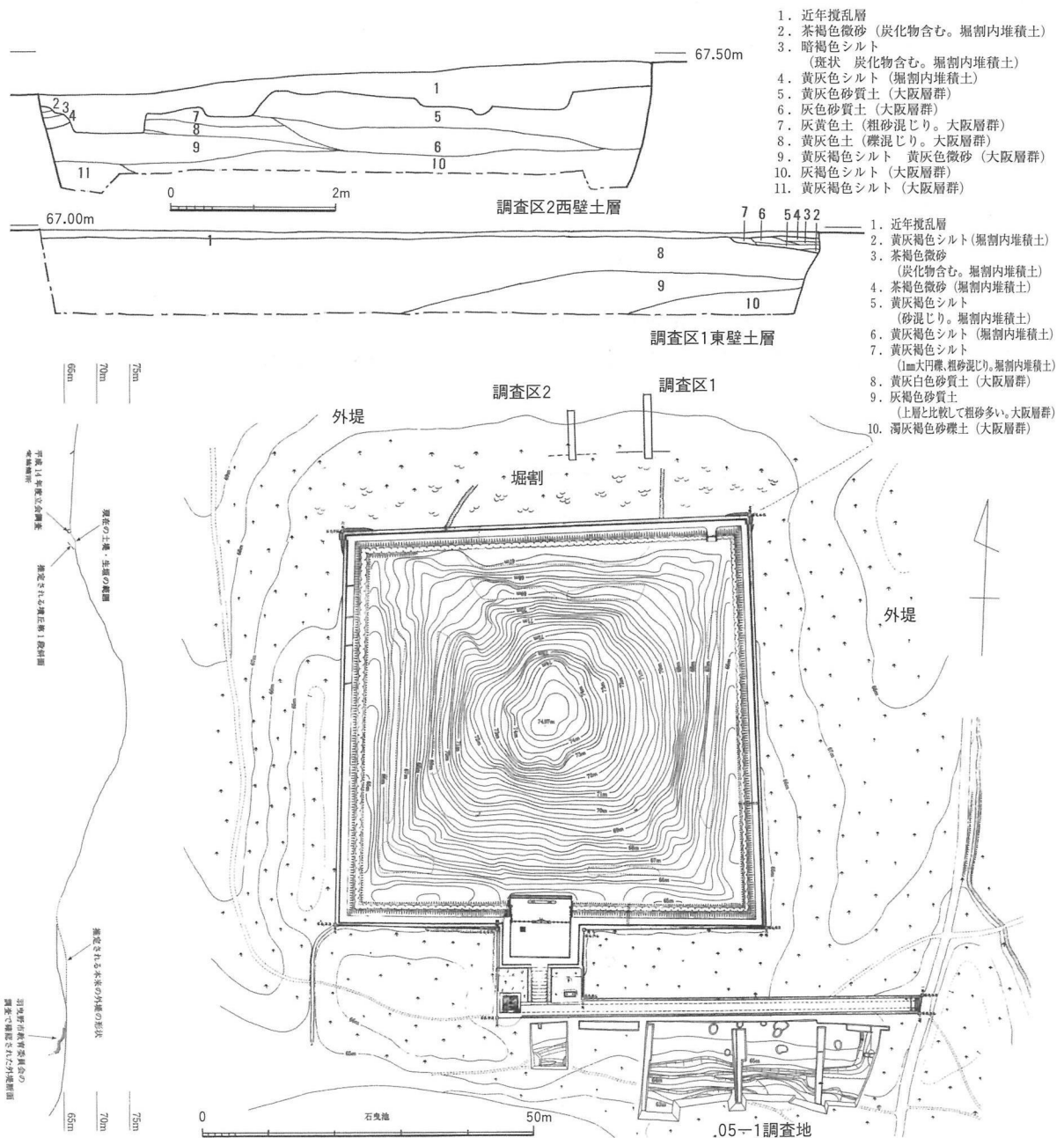


図47 土層断面図・墓域構造図（『書陵部紀要』第60号 宮内庁書陵部をもとに作成）

基本層序及び検出遺構

調査区 1 断面

約0.2mの表土層の下層に掘割内堆積土である茶褐色微砂、黄灰褐色シルト層を調査区南側際付近において確認した。その下層が地山層（大阪層群）である黄灰白色砂質土になる。土層を観察すると地山層を切り込みその上層において掘内堆積土が確認されていることから、地山が人為的に削られ整形されている可能性がある。

調査区 2 断面

表土においては最大で0.6mが工事の際による攪乱土が見られる。調査区の南側際付近において、茶褐色微砂（炭化物含む）、暗褐色シルト（炭化物斑状）、黄灰色シルト、黄灰色砂質土（大阪層群）、黄灰褐色シルト黄灰色微砂（大阪層群）層を確認した。黄灰褐色シルトである地山層は北から南にむけて傾斜している様子が観察された。地山上層である3層は掘割内堆積土の可能性はある。地山が確認できた幅が狭いため地山の傾斜が自然的か人為的なものかまでは判断できなかった。

遺物

今回の調査区においての出土遺物はなかった。

まとめ

土層断面の観察から、標高66.9m付近で大阪層群から成る地山（黄灰色砂質土・黄灰褐色シルト）を掘り込んだ墳丘北辺の堀の落ち込みを確認した。現在の墳丘端からの幅は約10.7mになる。

参考文献

- 2007 『古市遺跡群 XXVIII』 羽曳野市教育委員会
- 2010 『古市遺跡群 XXXI』 羽曳野市教育委員会

版 圖



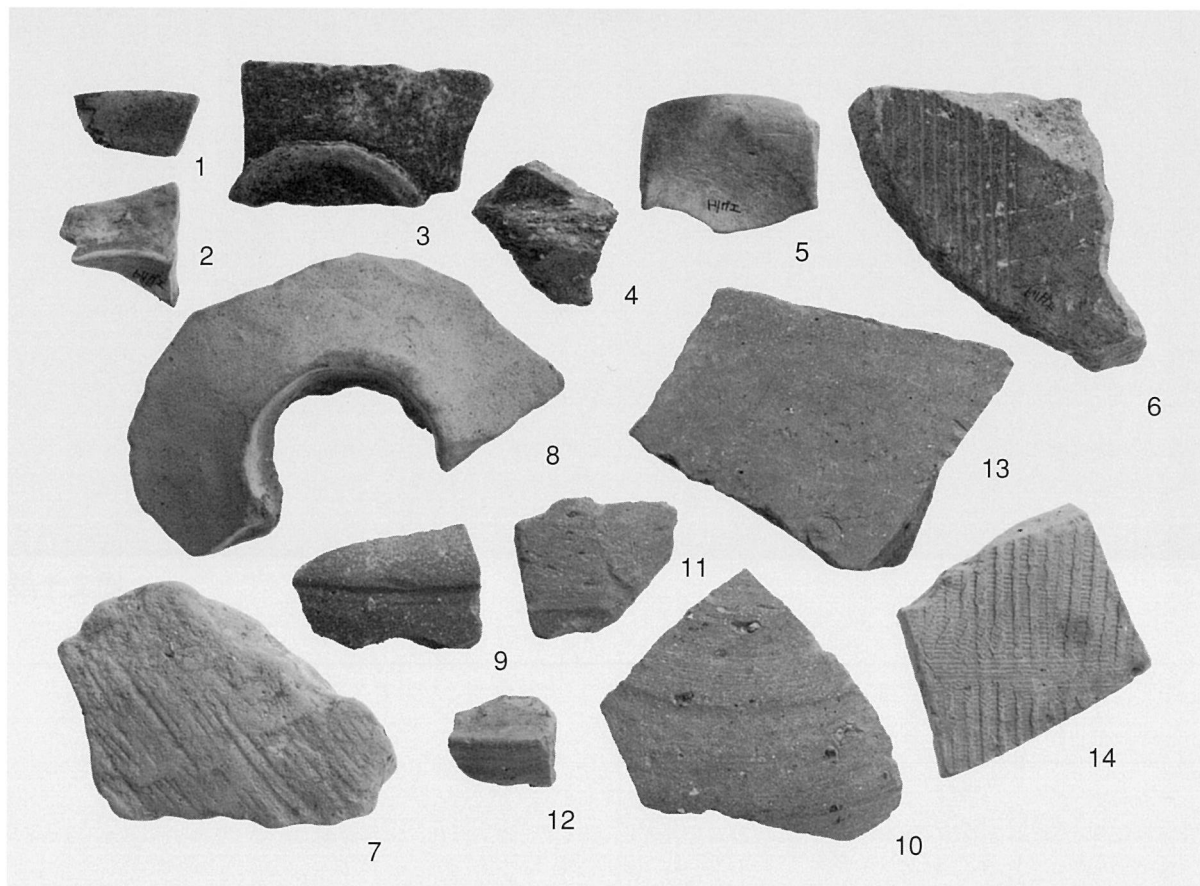
縄文土器



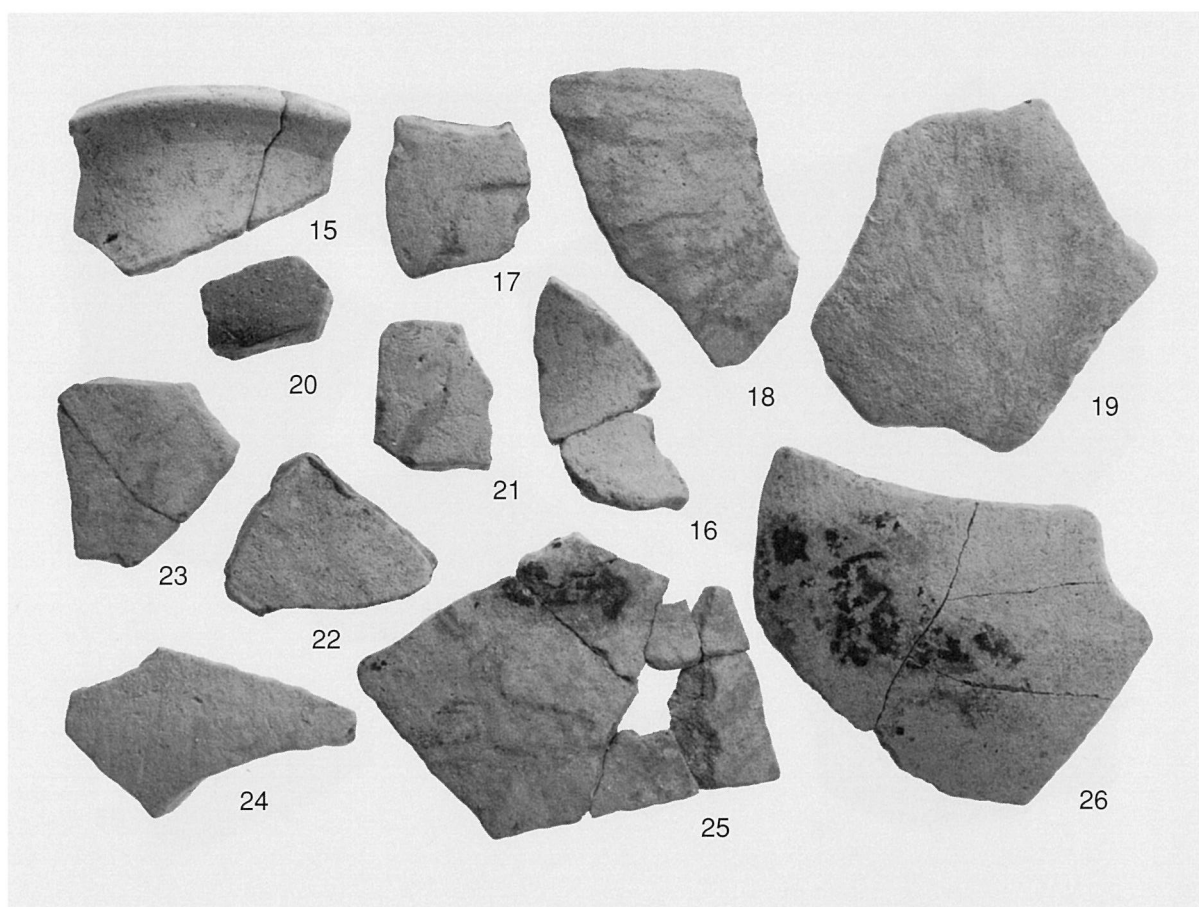
落ち込み断ち割り（東から）



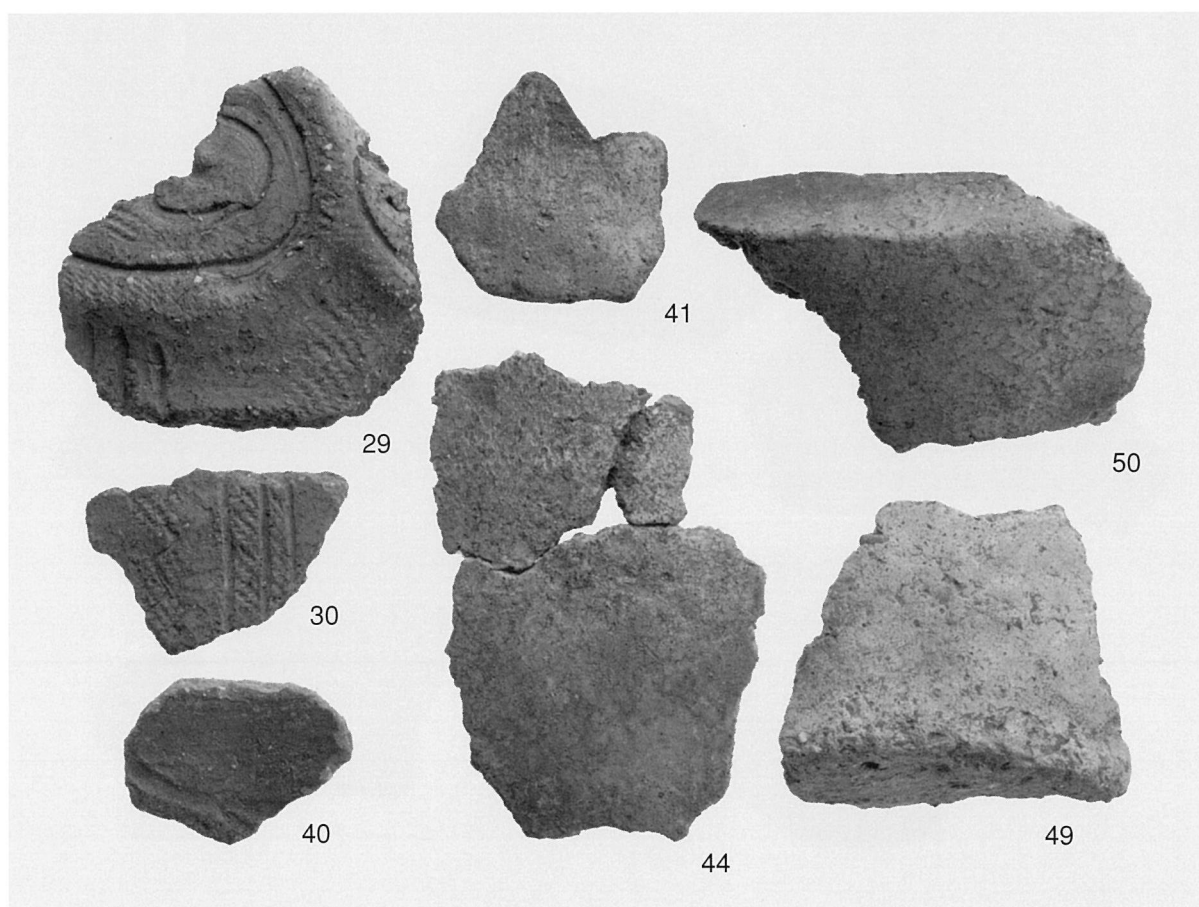
調査区全景（東から）



古代～中世土器

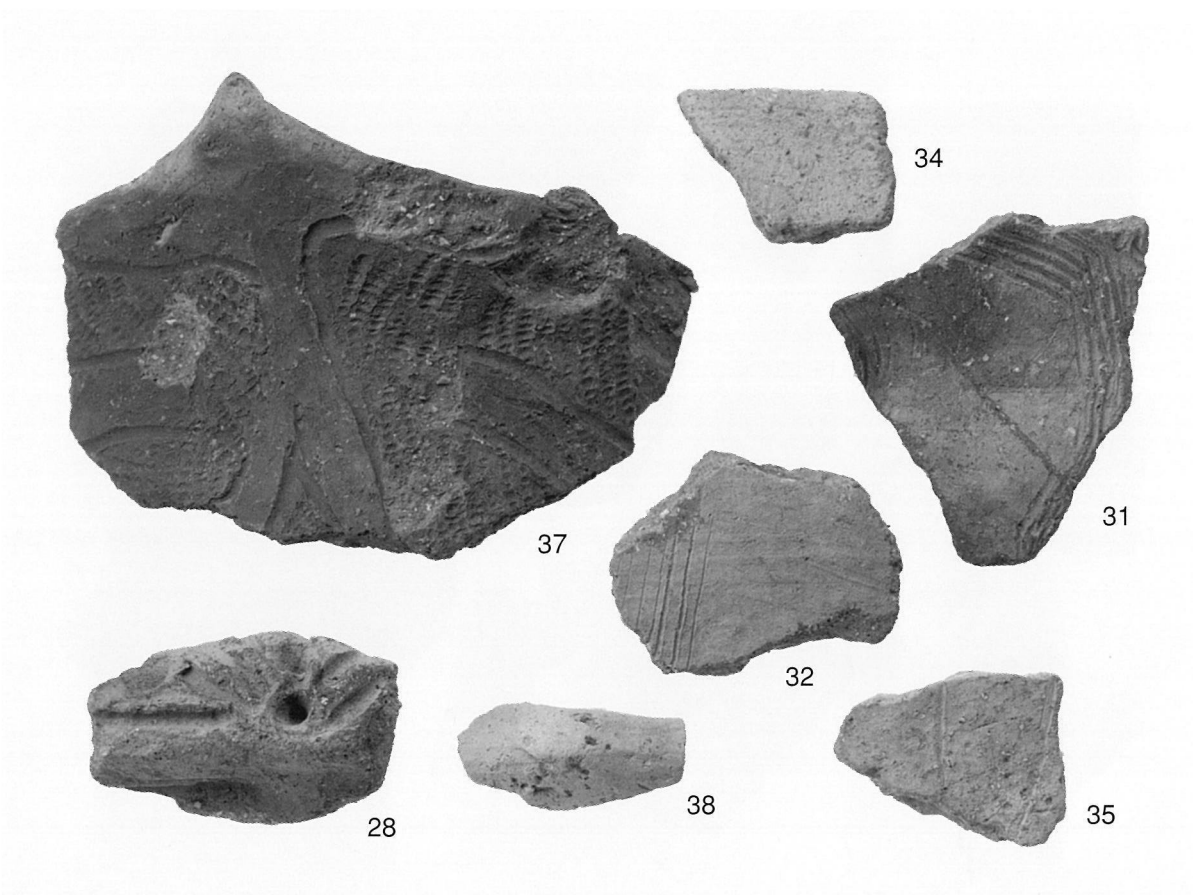


弥生土器

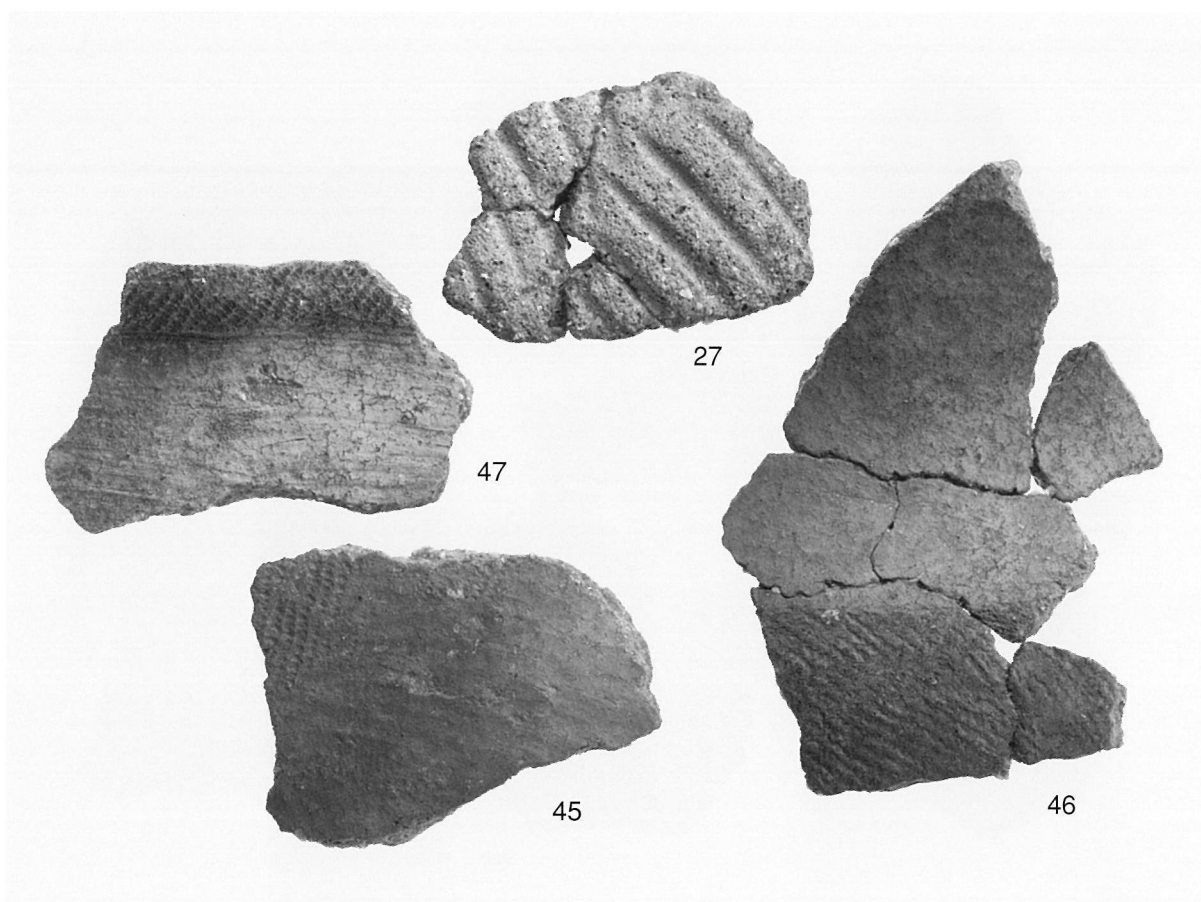


縄文土器

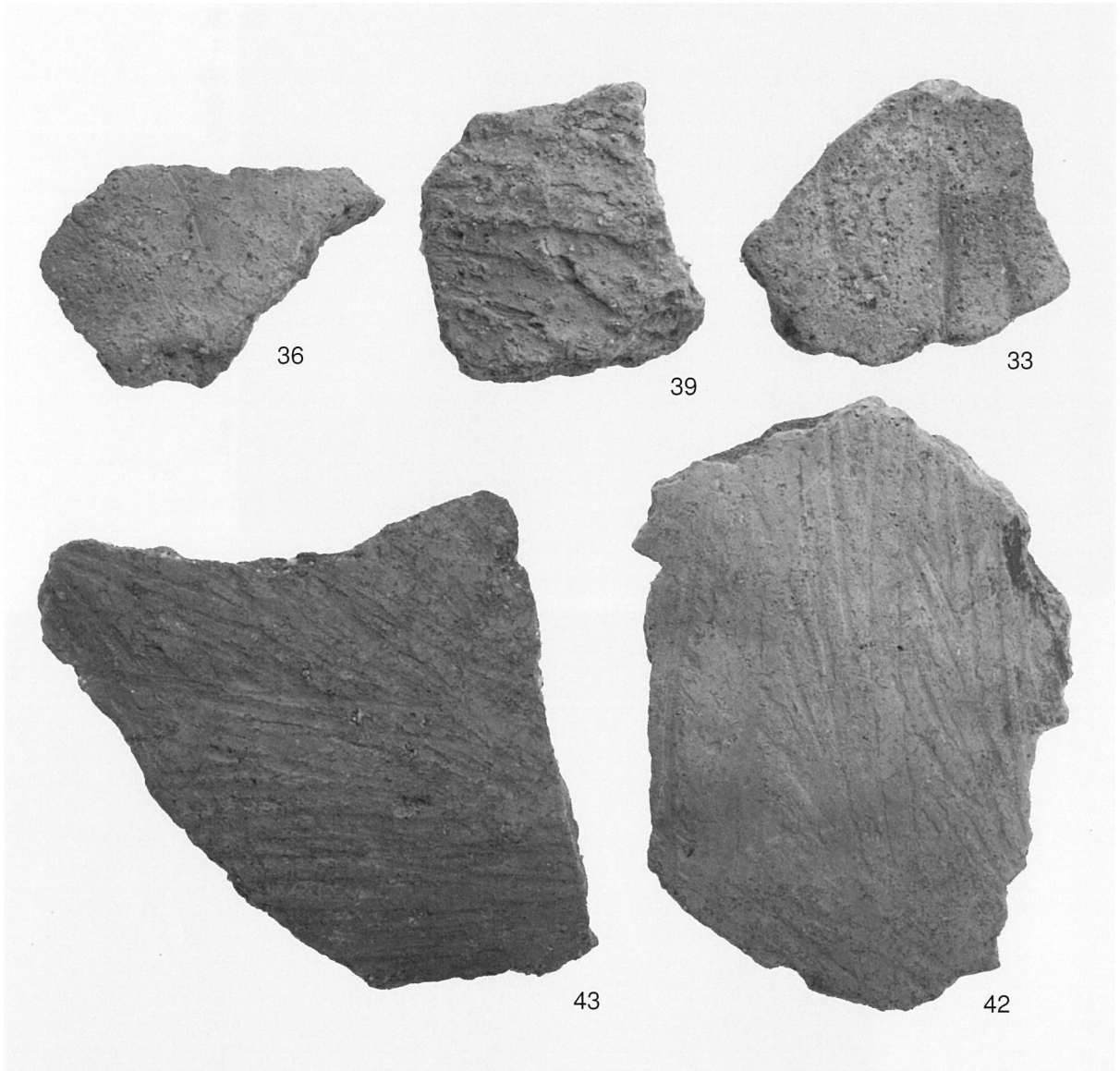
図版四
古市鳥飼遺跡



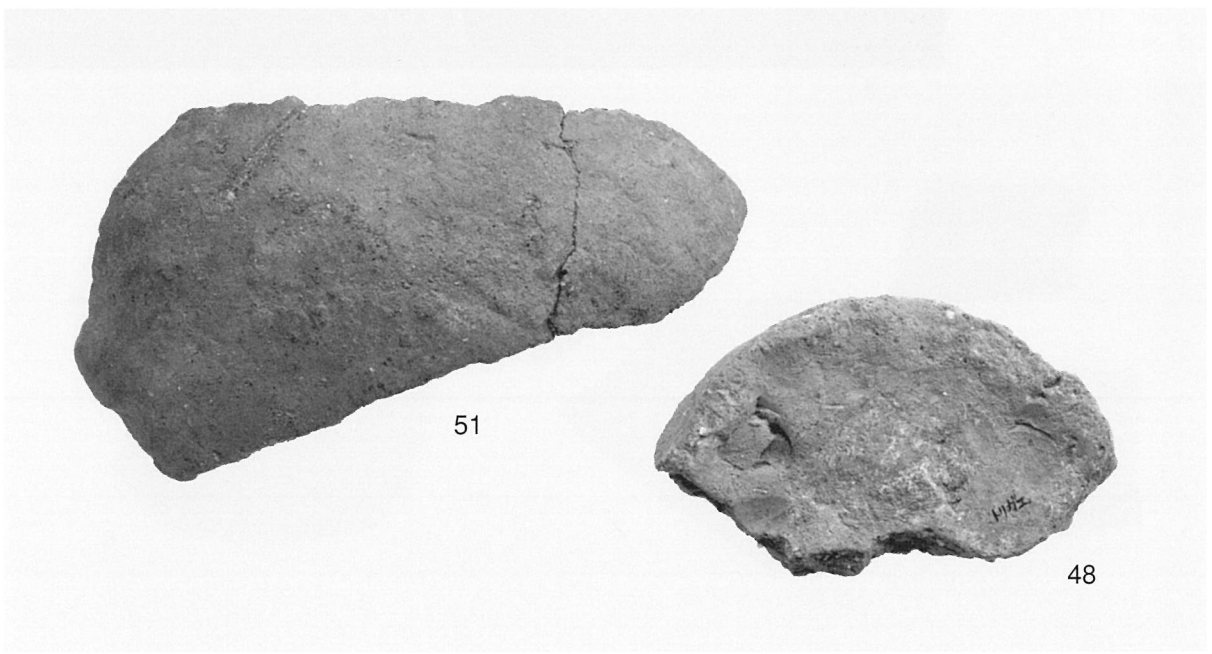
縄文土器



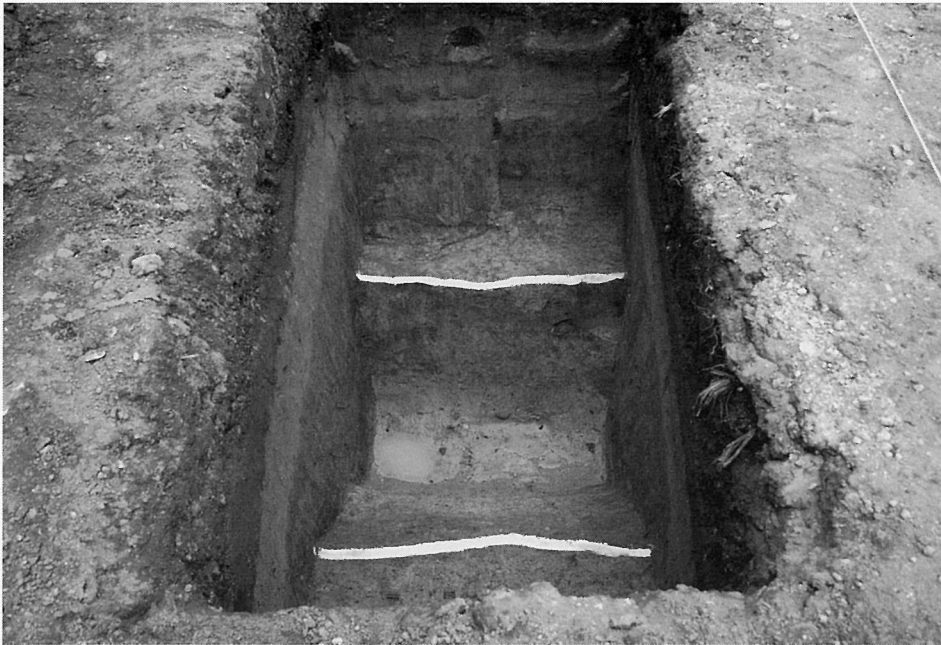
縄文土器



縄文土器

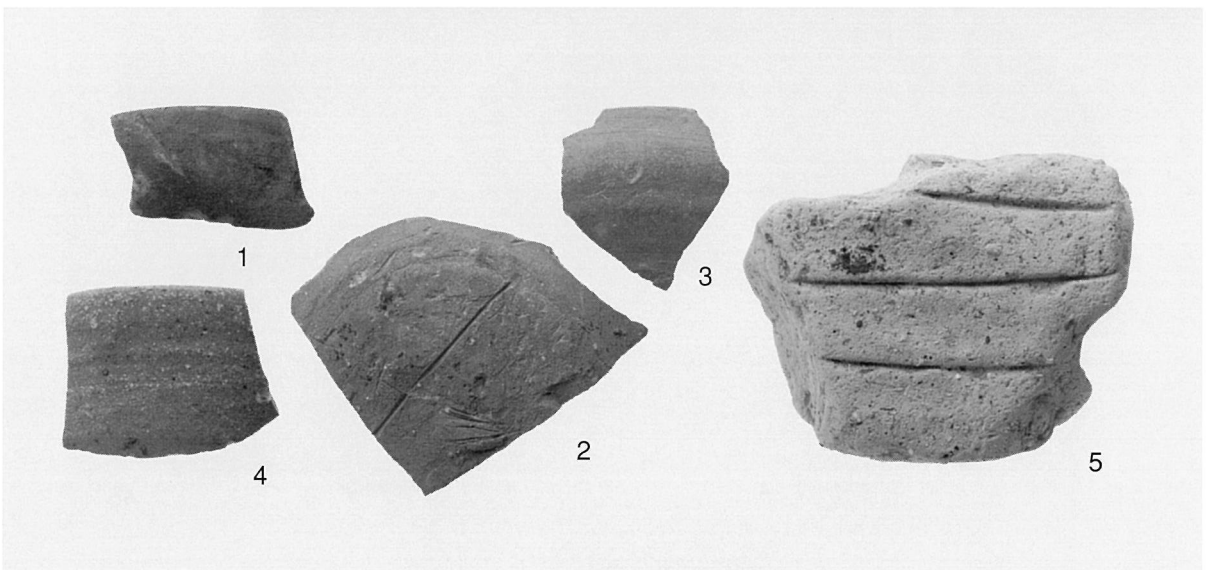
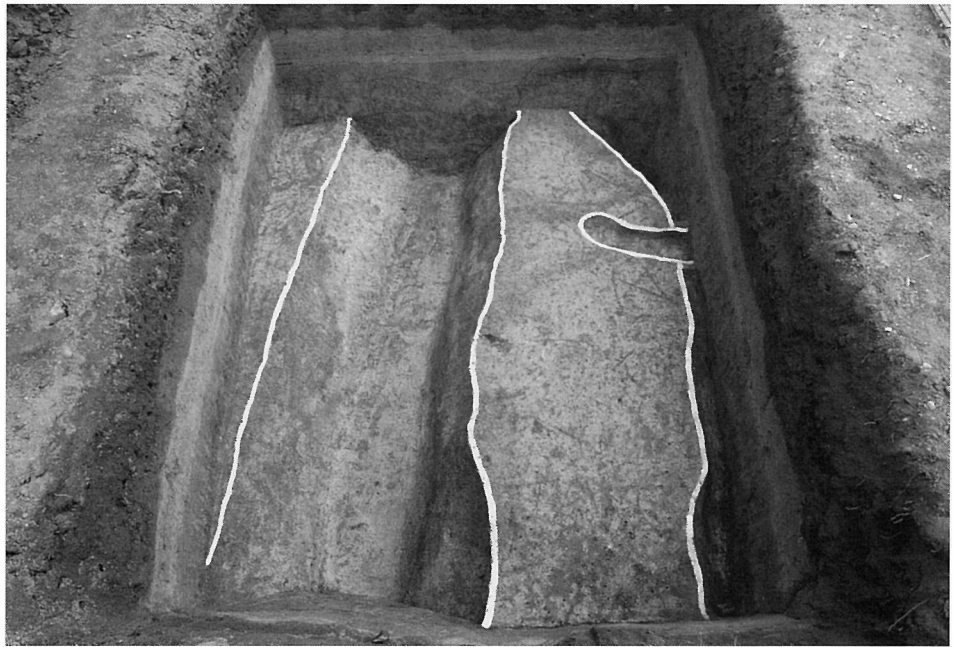


縄文土器



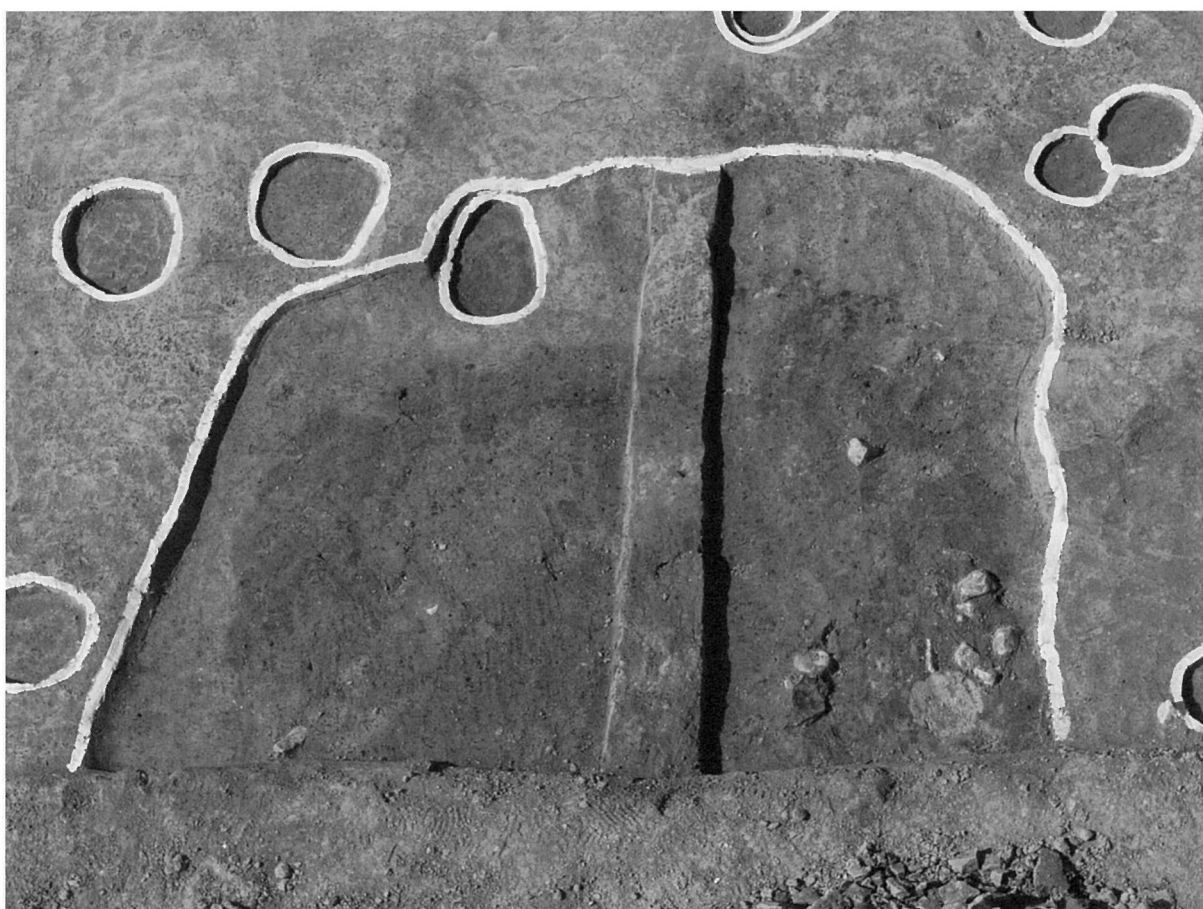
第1調査区(南から)

第2調査区(東から)



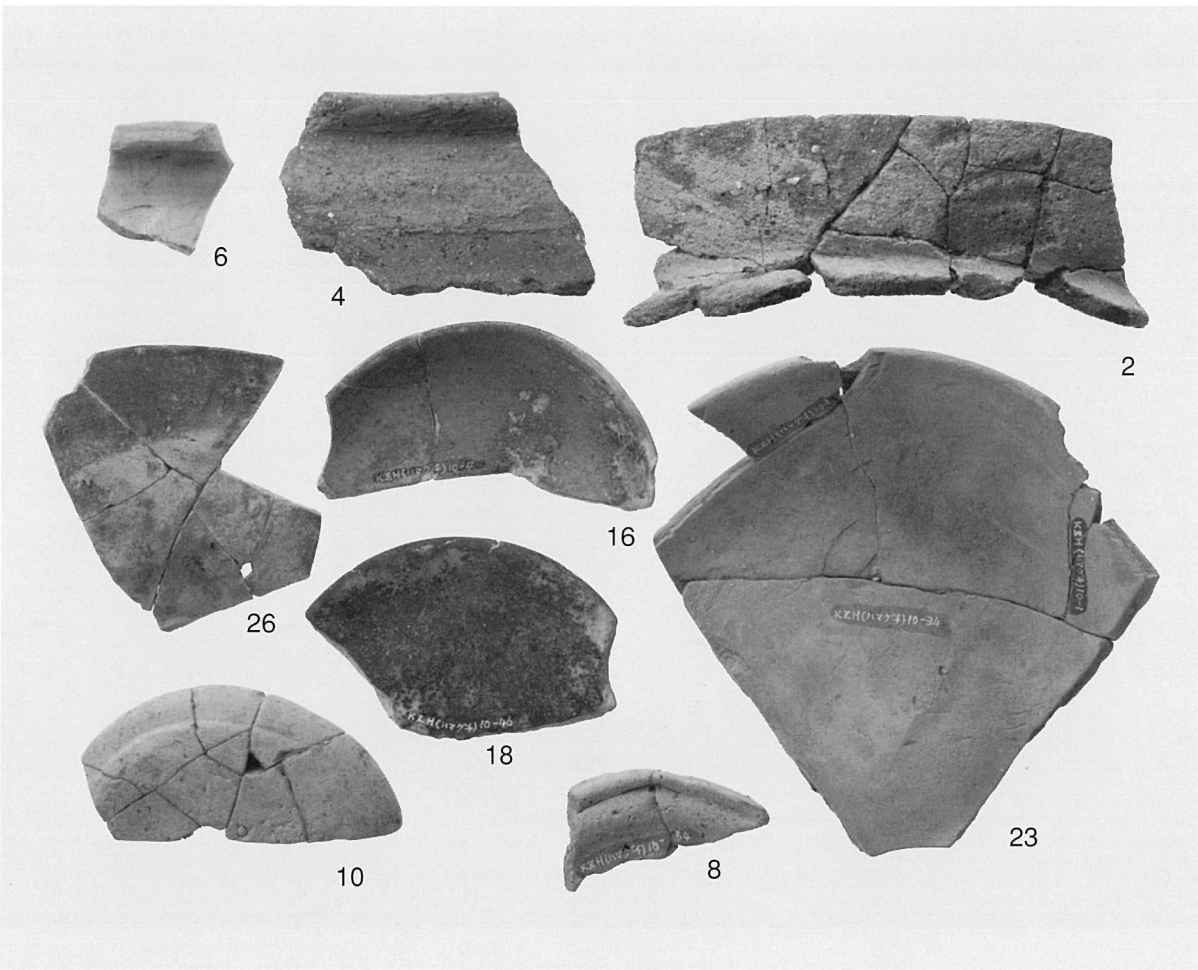
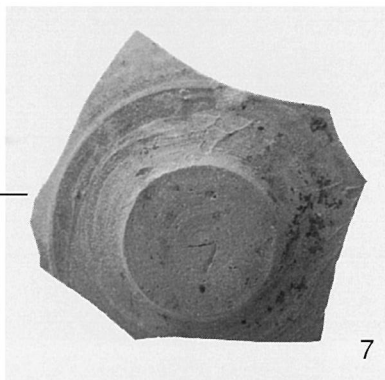
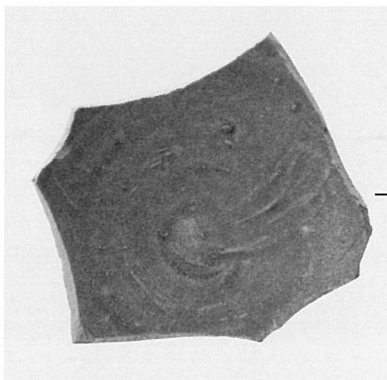
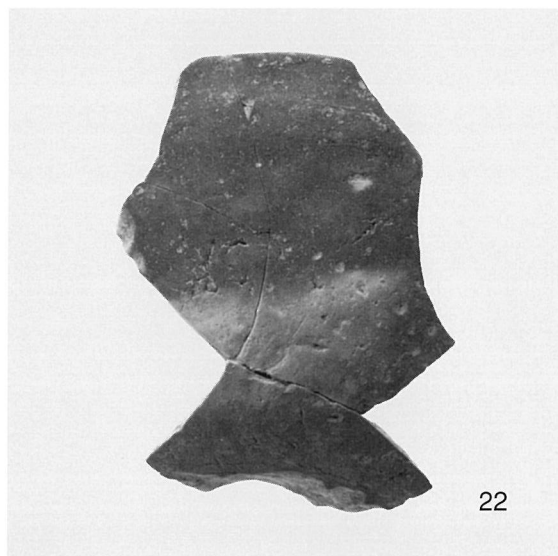
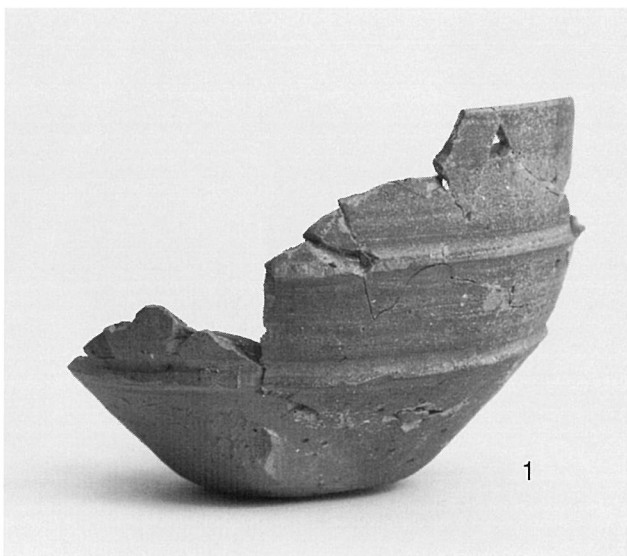


調査区全景（南から）



土坑1（南から）

図版八 郡戸東遺跡 出土遺物

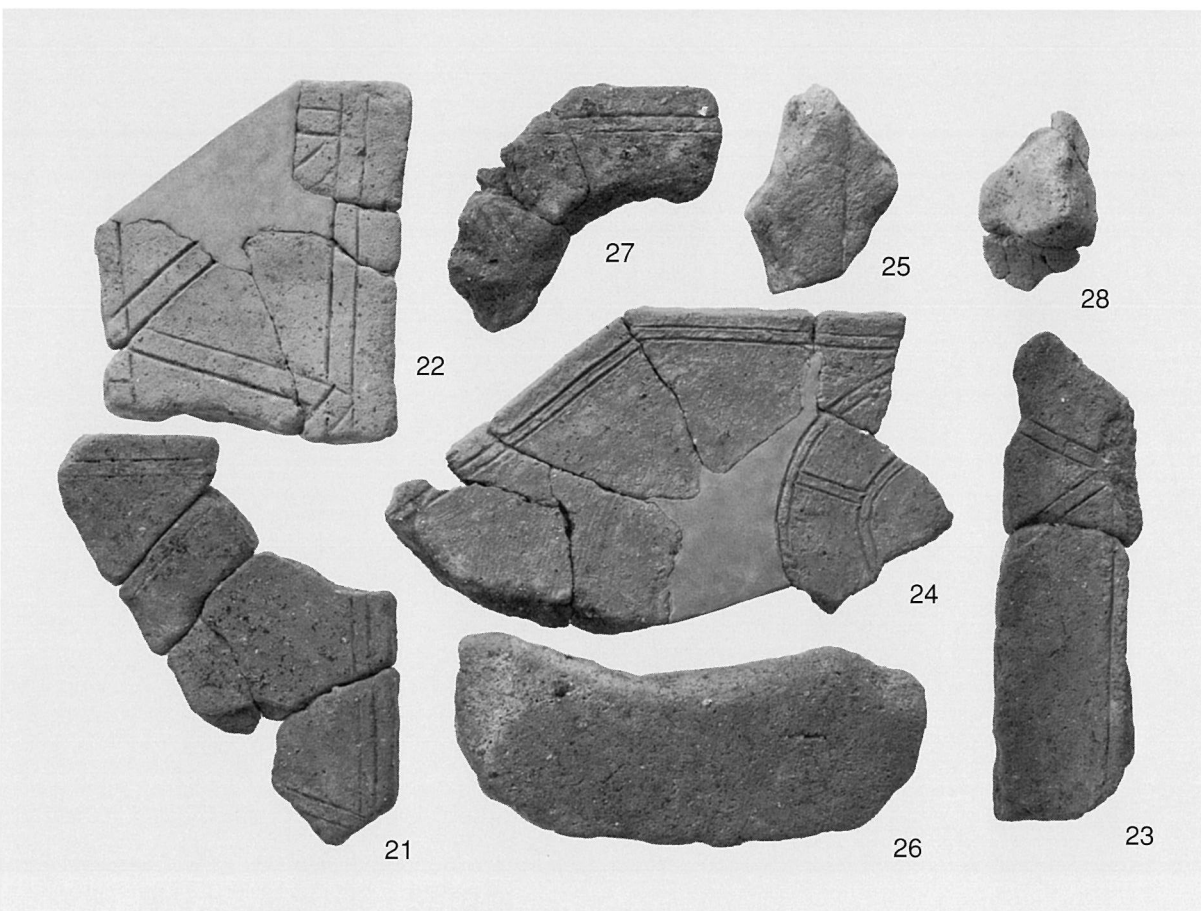
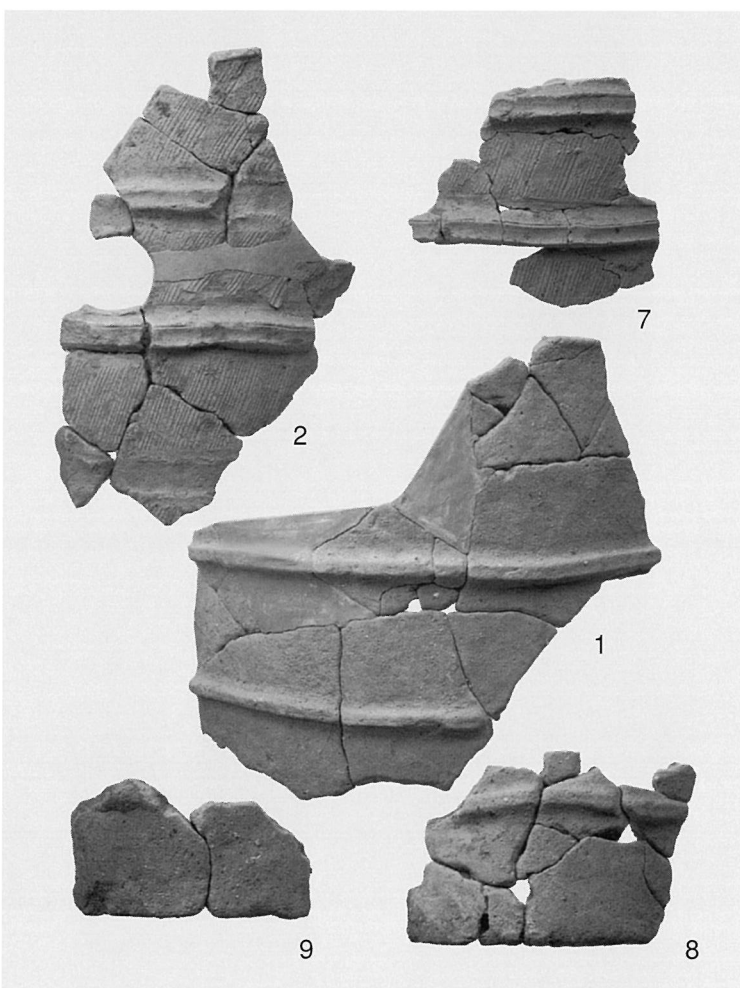




調査区1 SD1 (東から)

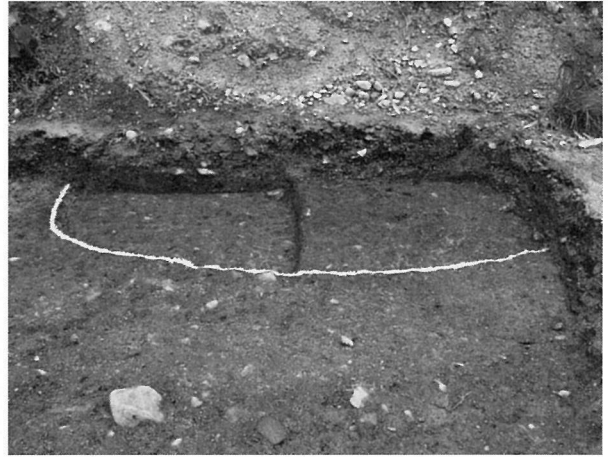


調査区2 SD1埴輪出土状態 (北から)

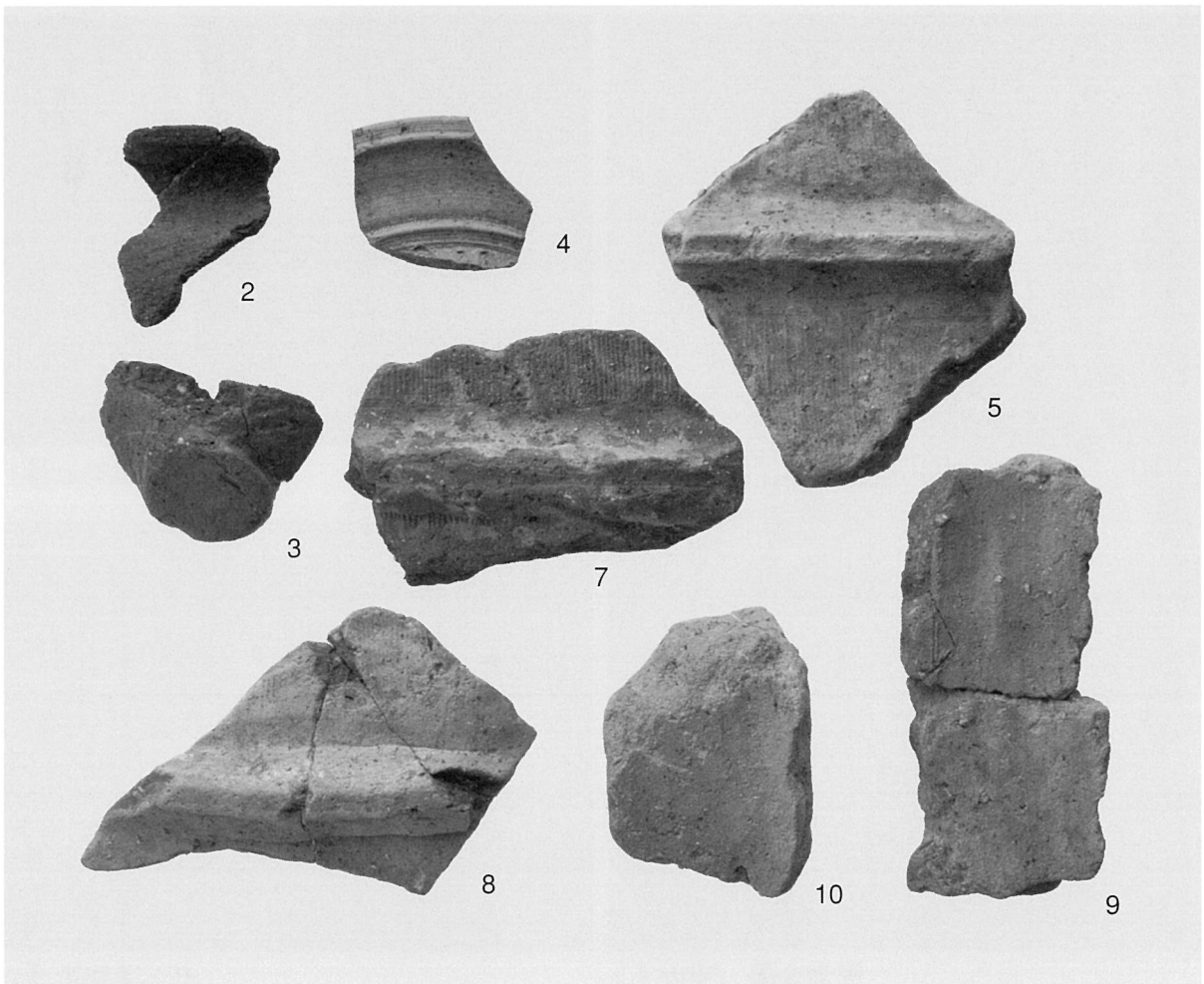




調査区全景（南から）

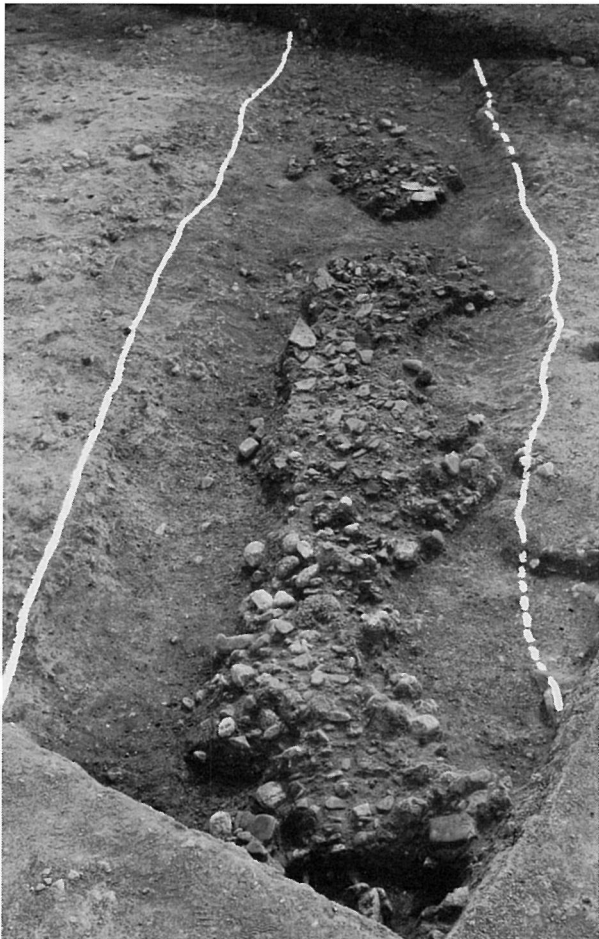


土坑1（東から）





調査区全景（北から）



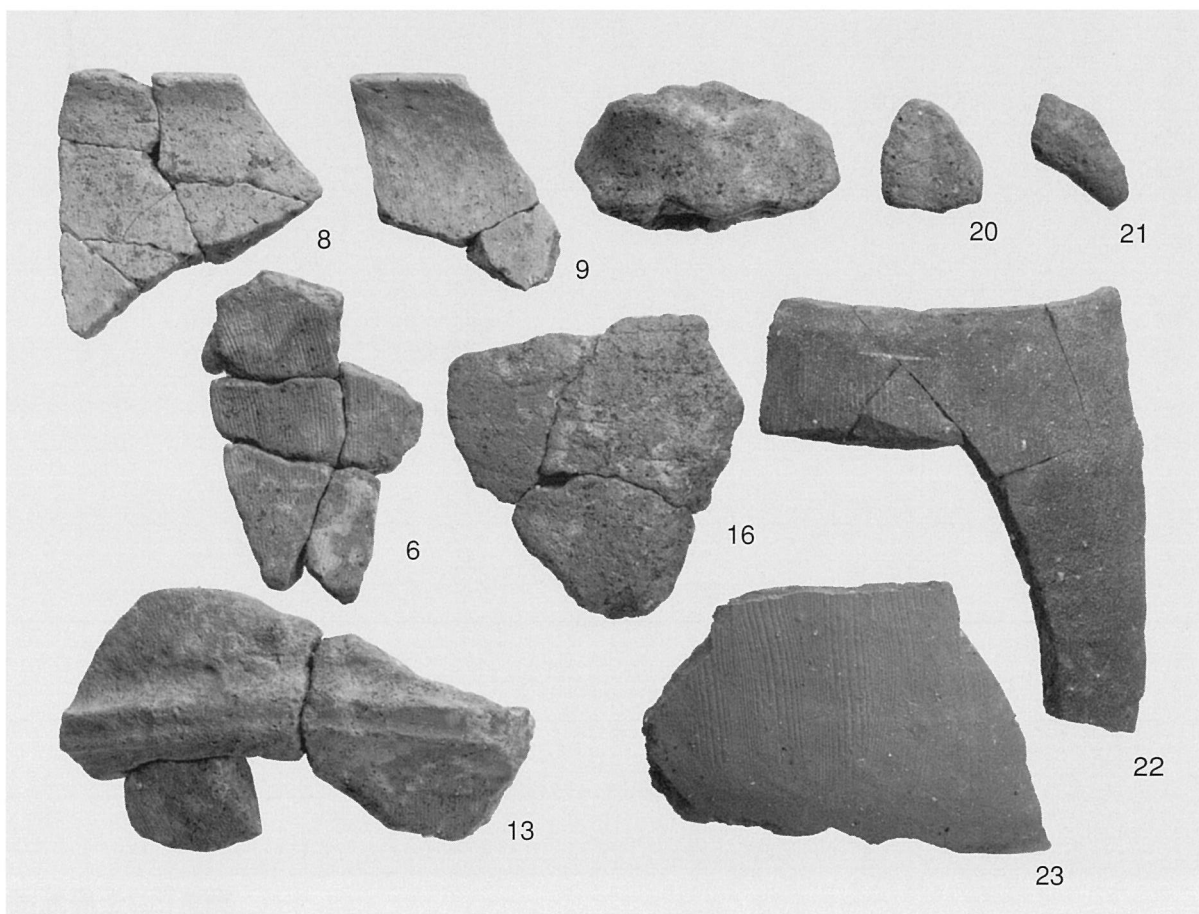
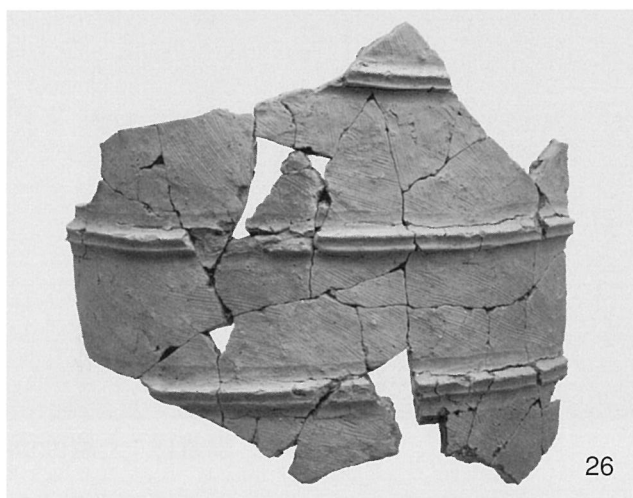
周溝全景（東から）



出土遺物近景1



出土遺物近景2



図版十四 塚穴古墳



調査区1土層断面



調査区2土層断面

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふるいちいせきぐん							
書 名	古 市 遺 跡 群							
副 書 名								
巻 次	X X X II							
シリーズ名	羽曳野市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第67							
編著者名	高野学 武村英治 河内一浩 井原 稔							
編集機関	羽曳野市教育委員会							
所在地	〒583-8585 大阪府羽曳野市誉田4丁目1-1 Tel 072-958-1111							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村	遺跡 番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ふるいちとりかいいせき 古市鳥飼遺跡	はびきの しみなみふるいち ちやうめ 羽曳野市南古市1丁目	27222	202	34°32'39"	135°36'53"	2010/9/1~ 2010/9/10	85.0	範囲確認
しまいずみがいせき 島泉東遺跡	はびきの ししまいずみ ちやうめ 羽曳野市島泉6丁目	27222	101	34°34'28"	135°35'07"	2010/1/6~ 2010/1/9	14.0	個人住宅
こうずびがいせき 郡戸東遺跡	はびきの しこうず 羽曳野市郡戸	27222	176	34°33'04"	135°34'48"	2010/4/26~ 2010/4/30	50.0	個人住宅
たかやじやうあと 高屋城跡 しろふどうざかこふん 城不動坂古墳	はびきの しふるいち ちやうめ 羽曳野市古市5丁目	27222	43 72	34°32'29"	135°36'42"	2010/5/10~ 2010/5/21	36.0	個人住宅
つかあなこふん 塚穴古墳	はびきの し 羽曳野市はびきの3丁目	27222	16	34°33'05"	135°35'31"	2010/3/1~ 2010/3/5	18.5	範囲確認
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
古市鳥飼遺跡	集落	縄文時代	溝	縄文土器				
島泉東遺跡	古墳	奈良時代ごろ	溝	須恵器・土師器				
郡戸東遺跡	集落	中世	土坑・柱穴	瓦器・土師器				
高屋城跡 城不動坂古墳	城館・古墳	古墳時代・中世	周濠	埴輪・須恵器・瓦				
塚穴古墳	古墳	古墳時代	堤					
要 約	城不動坂古墳の周濠の調査で、本古墳が墳丘長36m前後の前方後円墳であることが判明しました。また郡戸東遺跡では中世の集落跡を確認し、新規発見した古市鳥飼遺跡では、羽曳野市では珍しい縄文土器が発見されました。							

2011年3月31日

古市遺跡群 XXXII

羽曳野市埋藏文化財調査報告書67

発行 羽曳野市教育委員会
生涯学習室 社会教育課
世界遺産登録準備室
羽曳野市誉田4丁目1-1
072-958-1111

印刷 敷島印刷株式会社

